あやまる第２貝塚

笠利町文化財報告No.7

1984 年 3 月

鹿児島県大島郡笠利町教育委員会

序　　文

「あやまる第２貝塚の発掘調査」は、自然保護地域にあたる当地で，埋蔵文化財の確認調査を実施し，その結果に基づいて埋蔵文化財としても保存対策を図るために行われた事業であります。

「あやまる第２貝塚」はソテツジャングルとして保護されていたため遺跡の破壊はなく良好な保存状態でした。表面採集された土器が小片であったため遺跡なのか，どうかが問われており，また遺跡としたらどのような性格の遺跡か保護のための調査が必要となって来ました。文化庁，県からの補助もあり，県の専門職員二名を派遣され，熱心な作業が行われたことを感謝致しております。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解，さらには学術研究上の一助になれば幸いです。発掘調査期間中には鹿児島県考古学会長河口貞徳先生，沖縄国際大学教授高宮廣衛先生にも御指導を得ることが出来ました。心からお礼を申し上げます。

昭和59年３月１日

笠利町教育委員会

教育長　　大　野　清　延

例　　言

1．これは笠利町教育委員会が文化庁と鹿児島県教育委員会の補助を得て，昭和58年度に実施したあやまる第２貝塚の重要遺跡確認緊急調査報告書である。

2．「あやまる第２貝塚」の遺跡名については従来「第２アヤマル遺跡」・「第２アヤマル貝塚」・「あやまる第２遺跡」などと呼ばれていたが，今後は統一することが望ましい。

3．現地において河口貞徳氏（鹿児島県考古学会会長），高宮廣衛氏（沖縄国際大学教授）の指導を受けた。報告書作成の段階で土器は河口貞徳氏に，動物骨は西中川駿氏（鹿児島大学助教授），貝は平田国雄氏（鹿児島大学名誉教授）に指導を受けた。^{14}C年代測定については山田治氏（京都産業大学助教授）に依頼し，玉稿をいただいた。厚く謝意を表したい。

4．執筆分担は次の通りである。

第１章・第２章・第４章第10節・第８章第２節 …… 中　山
第３章・第４章第１節～第４節・第７章・第８章第３節 …… 池　畑
第４章第５節～第９節・第５章・第７章・第８章第１節 …… 牛ノ浜
第６章 …… 西中川
第９章 …… 山田・小橋川

5．現地での実測は池畑・牛ノ浜・中山が，遺物の実測，整図は池畑・牛ノ浜が担当した。遺構・遺物の写真撮影は池畑が担当した。

6．遺物の実測図は$\frac{1}{2}$縮小を基準としたが，一部実大のものがある。

7．挿図の遺物番号と図版の遺物番号は一致し，さらに出土状況にある番号とも一致している。

8．断面図に使用したレベル数値は，崎原部落近くにある基準点から引いてきたものを使用した。

本　文　目　次

序　文
例　言
第1章　遺跡の位置と環境 …… 5
第2章　調査の経緯 …… 8
　第1節　調査に至るまでの経緯 …… 8
　第2節　調査の組織 …… 8
　第3節　日誌抄 …… 8
第3章　層　序 …… 10
第4章　発掘調査 …… 11
　第1節　概要 …… 11
　第2節　第1トレンチ～第3トレンチの調査 …… 15
　第3節　第4トレンチ，第1グリッド，第2グリッドの調査 …… 20
　第4節　第5トレンチの調査 …… 31
　第5節　第6トレンチの調査 …… 39
　第6節　第7トレンチの調査 …… 43
　第7節　第8トレンチの調査 …… 45
　第8節　第9トレンチの調査 …… 46
　第9節　第10トレンチ～第13トレンチの調査 …… 49
　第10節　サタヤドリ（黒糖製造跡） …… 51
第5章　自然貝 …… 52
第6章　あやまる第2貝塚出土の動物骨について …… 62
第7章　まとめ …… 66
第8章　考　察 …… 68
　第1節　面縄前庭式土器と嘉徳Ⅰ式土器 …… 68
　第2節　外耳土器 …… 71
　第3節　あやまる第2貝塚の弥生式土器・土師器の位置づけ …… 72
第9章　液体シンチレーション法による
　　あやまる第2貝塚の^{14}C年代測定 …… 74
あとがき …… 76

挿　図　目　次

第１図　笠利半島の主要遺跡分布図 …… 6
第２図　層序の柱状比較図 …… 10
第３図　周辺の地形図 …… 11
第４図　あやまる第２貝塚 TRENCH 配置図 …… 12
第５図　第１～第３トレンチ配置図 …… 13
第６図　第１トレンチ断面図 …… 14
第７図　第２トレンチ断面図 …… 14
第８図　第２トレンチの土器分布図 …… 15
第９図　第２トレンチ出土の遺物(1) …… 16
第10図　第２トレンチ出土の遺物(2) …… 17
第11図　第２トレンチ出土の遺物(3) …… 18
第12図　第２トレンチ出土の遺物(4) …… 18
第13図　第４トレンチ２区・３区遺物出土状況 …… 19
第14図　第４トレンチ出土の遺物 …… 20
第15図　第１グリッドの遺物分布図 …… 21・22
第16図　第２グリッドの遺物分布図 …… 23・24
第17図　第４トレンチ断面図 …… 25
第18図　第１グリッド出土の遺物(1) …… 26
第19図　第１グリッド出土の遺物(2) …… 26
第20図　第１グリッド出土の遺物(3) …… 27
第21図　第２グリッド出土の遺物(1) …… 28
第22図　第２グリッド出土の遺物(2) …… 29
第23図　第２グリッド出土の遺物(3) …… 30
第24図　第５トレンチ３区・４区遺物出土状況 …… 31
第25図　第５トレンチ５区・６区遺物出土状況 …… 32
第26図　第５トレンチ５区・６区遺物出土状況 …… 33
第27図　第５トレンチ出土の遺物(1) …… 33
第28図　第５トレンチ７区・８区遺物出土状況 …… 34
第29図　第５トレンチ８区～11区断面図 …… 35
第30図　第５トレンチ11区～14区断面図 …… 36
第31図　第５トレンチの出土遺物(2) …… 36
第32図　第５トレンチ出土の遺物(3) …… 37
第33図　第５トレンチの出土遺物(4) …… 38

第34図　第６トレンチ１区遺物分布図と断面図 …… 39
第35図　第６トレンチ１区出土遺物 …… 40
第36図　第６トレンチ２区遺物分布図と断面図 …… 42
第37図　第６トレンチ２区出土貝製品 …… 42
第38図　第６トレンチ２区出土土器 …… 43
第39図　第７トレンチ遺物分布図と断面図 …… 43
第40図　第７トレンチ出土遺物 …… 44
第41図　第８トレンチ遺物分布図と断面図 …… 46
第42図　第８トレンチ出土遺物 …… 47
第43図　第９トレンチ出土土器 …… 47
第44図　第９トレンチ遺物分布図と断面図 …… 48
第45図　周辺採集の土器 …… 48
第46図　第11トレンチ遺物分布図と断面図 …… 49
第47図　第11トレンチ出土遺物 …… 49
第48図　第13トレンチ遺物分布図と断面図 …… 50
第49図　第13トレンチ出土土器 …… 50
第50図　サタヤドリ …… 51
第51図　面縄前庭式土器と嘉徳Ⅰ式土器出土分布図 …… 68
第52図　外耳土器出土遺跡分布図 …… 71
第53図　弥生時代以降の遺物編年表（試案） …… 73

表　目　次

第１表　あやまる第２貝塚の周辺遺跡 …… 7
第２表　第５トレンチ出土の遺物の出土区 …… 38
第３表　貝類遺存体集計表（その１） …… 53・54
第４表　貝類遺存体集計表（その２） …… 55・56
第５表　貝類遺存体集計表（その３） …… 57・58
第６表　貝類遺存体集計表（その４） …… 59・60
第７表　棲息地別出土状況 …… 61
第８表　動物別およびトレンチ別出土骨量 …… 62
第９表　トレンチ別遺物出土表 …… 67
第10表　面縄前庭式土器出土地 …… 69
第11表　嘉徳Ⅰ式土器出土地 …… 70

図 版 目 次

図版１　動物骨
図版２　遠景
図版３　第１・２トレンチの近景と出土遺物
図版４　第２トレンチの出土遺物
図版５　第１グリッドの近景
図版６　第１グリッドの遺物出土状況
図版７　第１グリッドの出土土器
図版８　第２グリッドの近景と螺蓋製貝斧
図版９　第２グリッドの出土土器と第４トレンチの螺蓋製貝斧
図版10　第５トレンチの遺物出土状況(1)
図版11　第５トレンチの遺物出土状況(2)
図版12　第５トレンチの出土遺物
図版13　第６トレンチの遺物出土状況
図版14　第６トレンチ～第13トレンチの出土土器
図版15　第７トレンチ・第９トレンチの近景
図版16　第６トレンチ～第９トレンチの貝・石製品
図版17　サタヤドリ
図版18　発掘風景

第 1 章　　遺跡の位置と環境

あやまる第２貝塚は鹿児島県大島郡笠利町須野字大道に位置している。笠利半島は大島本島北部に位置し，比較的平地の多い地域である。笠利半島でも特に東海岸側が起伏のおだやかな台地状地形が形成されて，裾礁がよく発達し，砂丘が多く形成されている。そのために眺望も広く，はるかかなたに喜界島がうかんで見える。この展望は赤尾木から用岬まで同様である。赤尾木・土浜・節田・アヤマル崎・用付近では比高20ｍ前後の海蝕崖もみられる。

一方西海岸では小半島によって多くの支湾に分かれている。山から急峻に海に続く。集落や遺跡は川によって切り開かれたように三方山に囲まれた地域に限られる。

笠利半島は奄美でも他地域に比べて先史遺跡が多く，考古学的な調査もゆきわたっているがそのほとんどが東海岸側に集中している（第１図）。

西海岸側ではサウチ遺跡が知られている。サウチ遺跡からトウテツ文貝符・紡錘車・磨製石鏃や刻み文を持つ土器など，弥生文化の要素を持った遺物が多く出土した[注1]。東海岸ではイヤンヤ（ヤーヤ）洞穴遺跡，宇宿貝塚など多くの遺跡が知られている。宇宿貝塚は昭和30年に九学会による調査が行われ，宇宿下層式土器と宇宿上層式土器に大別され，奄美の土器標式名にもなっている[注2]。そして近年になって本土の弥生式土器である夜臼式土器[注3]や山ノ口式土器[注4]が出土しており，奄美の弥生文化の編年作業に大きな資料を得ている。これらの遺跡のほとんどが小規模なもので食用にされたと思われる貝も貝塚を形成するまでには至っていない。小さな貝だまり的なものである。小人数による一定期間の居住性が強い[注5]。これらの遺跡ほとんどが東海岸の砂丘上に形成されているのも注目される。

今回調査を行ったあやまる第２貝塚も東海岸側に立地しているが，この貝塚は独立砂丘である。アヤマル崎から須野にかけて海岸は北向きになり，この間に岬状に突出した岩盤がある。この岩盤で二つの砂丘に区切られており，東側の砂丘にあやまる第２貝塚があり，西側にコビロ遺跡が立地している[注6]。あやまる第２貝塚の西側は小川が流れており，砂丘が切断されている。小川で切断された西側砂丘は台地上下にあり，小遺跡が点在する。そのほとんどが半壊または消滅に近い。

あやまる第２貝塚は砂丘の一部分に遺物包含層が露出している他は完全に原形をとどめている。この露出した遺物包含層より小片の土器片が発見された。砂丘全体の標高は11ｍ程度である。砂丘後方（南側）は低湿地になり台地上へとつながる。いわゆる奄美の遺跡の代表的な立地条件[注7]を備えている貝塚である。

参考文献

注１　笠利町教育委員会『サウチ遺跡』　1978
注２　九学会連合奄美大島共同委員会『奄美－自然と文化』論文編　1959
注３　竜郷町教育委員会『ウフタ遺跡』　1982
注４　笠利町教育委員会『宇宿港遺跡』　1981
注５　中山清美「砂丘性小遺跡について」『ケジ・コビロ・辺留窪遺跡』　1983
注６　笠利町教育委員会『ケジ・コビロ・辺留窪遺跡』　1983
注７　白木原和美「奄美先史学の当面する諸問題」『琉大史学』No 6　1974

第１図　笠利半島の主要遺跡分布図

第１表　あやまる第２貝塚の周辺遺跡

番号	遺　跡　名	所　在　地	備　　考
1	用長浜遺跡	笠利町用長浜	
2	用遺跡	〃　用安良川	
3	辺留城遺跡	〃　辺留城	
4	辺留窪遺跡	〃　辺留窪	笠利町文化財報告№.6
5	コビロ遺跡	〃　須野コビロ	〃
6	あやまる第２貝塚	〃　須野大道	本報告書
7	あやまる第１貝塚	〃　須野	
8	マツノト遺跡	〃　松ノト	
9	喜子川遺跡	〃　喜子川	
10	土盛遺跡	〃　土盛	
11	宇宿港遺跡	〃　宇宿港	笠利町文化財報告№.4
12	宇宿貝塚	〃　宇宿大籠	笠利町文化財報告№.3
13	宇宿高又遺跡	〃　宇宿高又	笠利町文化財報告№.2
14	宇宿小学校遺跡	〃　宇宿	
15	万屋遺跡	〃　万屋	
16	万屋下山田遺跡	〃　万屋下山田	笠利町文化財報告№.6
17	万屋泉川遺跡	〃　万屋泉川	〃
18	ケジ遺跡	〃　万屋ケジ	〃
19	長浜金久遺跡第Ⅱ貝塚	〃　万屋長浜金久	鹿児島県教育委員会報告書作成中
20	長浜金久遺跡第Ⅰ貝塚	〃　万屋長浜金久	〃
21	ナビロ川遺跡	〃　土浜	
22	立神遺跡	〃　土浜	
23	土浜遺跡	〃　土浜	
24	イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴遺跡	〃　土浜イヤンヤ	1973年三島格・永井昌文調査
25	明神崎遺跡	〃　用安入瀬	
26	用安遺跡	〃　用安入瀬	
27	赤尾木遺跡	龍郷町赤尾木	
28	ウフタ遺跡	〃　赤尾木ウフタ	熊本大学考古学研究室活動報告12
29	赤尾木保育所遺跡	〃　赤尾木	
30	手広遺跡	〃　手広	手広遺跡発掘調査終了報告
31	鯨浜遺跡	笠利町喜瀬	
32	サウチ遺跡	〃　喜瀬サウチ	笠利町文化財報告№.1

第２章　　調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

本遺跡の認識は，1971年に遺物が採集されたことに始まるが，その後の調査によって沖縄県県立博物館の多和田コレクションの中にそれ以前に採集された資料のあることがわかった。多和田真淳氏は，1952年12月17日にあやまる岬の二地点から遺物を採集されている。すなわち，舌状に東へのびたあやまる岬の南側と北側にある二ケ所の砂浜からである。南側をあやまる第１貝塚，北側をあやまる第２貝塚として記録されている。

その後，あやまる第２貝塚の一部で砂取り工事を開始しようという動きがあったが，自然保護地域にあり，中止された。この時点で遺物包含層の一部が露出していたが，土器片が小片のためどのような時期の遺物か不明であった。同貝塚はソテツジャングルとして保護されているが，どのような性格の遺跡かの確認を行い，さらに今後埋蔵文化財として保護するために今回の調査が計画された。調査は国・県の補助を受けて1978年11月７日～12月３日まで行われた。

第２節　調査の組織

調査主体者	笠利町教育委員会	
調査責任者	笠利町教育委員会教育長	大野清延
調査担当者	鹿児島県教育委員会文化課主事	池畑耕一
	〃	牛ノ浜修
	笠利町立歴史民俗資料館	中山清美
事務担当者	笠利町教育委員会社会教育課長	前田篤夫
	笠利町立歴史民俗資料館	中山清美
発掘作業員	泉一義　豊富則　塩田武則　塩田未和　塩田秀光　萩原光義　米田光男 里山勇廣　向茂仁　平田孝　元田エミ子　池田美代子　積ナミ子　恵チヨ 今田美佐穂　原田佐和子　山下綾子　川畑直子　福知恵子　花田とし子 盛しまる　塩田キネ　塩田イトエ　城小夜子　豊田節子　森智津子	
整理作業員	門田笑子・是枝佐百合・下畠節子・鎮寺節子・宮岡雪子	

第３節　日誌抄

11月７日（月）　草刈り。はまゆうの移植。周辺の調査。第１・第３トレンチの調査開始。

８日（火）　ソテツジャングルの下刈り。ソテツ移植。グリッド設定。第２・第３トレンチ調査。第３トレンチは包含層までが深い。

９日（水）　ソテツの抜き取り。第２トレンチは包含層が４枚。第４トレンチ調査。

10日（木）　ソテツの抜き取り。第４トレンチ，第５トレンチ１区～２区の調査。レベルの移動。名瀬市の小学生220名が見学。

11月11日（金）　第４・５・６トレンチ調査。第１トレンチ下部をショベルで深掘り。

12日（土）　第５・６トレンチ調査。第５Ｔ６区に高橋Ⅱ式，９区に面縄前庭式出土。

14日（月）　第５・６トレンチ調査。第１グリッドを設定，表土はぎ。

15日（火）　第５・６トレンチ，第１グリッド調査。第６Ｔ２区に貝製品。第７～９トレンチ，第２グリッドの設定，および表土はぎ。

16日（水）　第５～９トレンチ，第１・２グリッド調査。

17日（木）　第５～９トレンチ，第１グリッド調査。第10・12トレンチ設定，下払い。

18日（金）　第１・２グリッド調査。中津野式，動物骨など出土。空白地帯，炉跡などもある。第５・６・10～13トレンチ調査。

19日（土）　第３～６・８・10～13トレンチ，第１・２グリッド調査。手花部小見学。

21日（月）　第２トレンチ拡張掘り下げ。第２グリッド，第５・６・８～11・13トレンチ調査。第３・12トレンチ埋め戻し。

22日（火）　第５～７，９～11，13トレンチ調査。第６Ｔ１区では黒曜石，２区では面縄前庭式出土。第10Ｔでは３ｍほど下にも包含層がない。各トレンチで清掃・写真実施。河口貞徳氏指導（24日まで）。

23日（水）　第２・５～９・13トレンチ調査。第10トレンチ埋め戻し。

24日（木）　第１・２グリッド，第４～６・８・９・11トレンチ調査。第５Ｔ５・６区より高橋Ⅱ式，黒曜石出土。13区に幅70㎝の溝があり，14区にかけて包含層も残っている。第８・10・13トレンチ埋め戻し。

25日（金）　第２・４～６・９トレンチ，第２グリッド調査。第２Ｔ４層に外耳土器出土。サタヤドリの跡調査。染付があり，大正時代には建物がなかったというから明治時代のものか。円形のかまどと，こね場がある。

26日（土）　第２・４～６トレンチ，第２グリッド調査。サタヤドリの清掃，写真撮影，実測。第６トレンチ付近のソテツ植え。

28日（月）　第２・５～７・９トレンチ，第２グリッド調査。高宮氏指導(30日まで)。

29日（火）　第２・５～７・９トレンチ調査。第５トレンチ３・４・９～12区埋め戻し。

30日（水）　第２・４～６・９トレンチ調査。第６トレンチ１区の嘉徳Ⅰ式土器の周辺には円礫などが集中している。第４・７・９トレンチ埋め戻し。

１日（木）　第２・５・６トレンチ調査。第１・２グリッド，第２・６トレンチ実測。

２日（金）　第１・２グリッド実測。第２・５トレンチ掘り下げ。地形測量。

３日（土）　第１・２グリッド，第２トレンチ実測，遺物取りあげ。

第１グリッド・第２グリッドの実測が残ったので，数日間，中山がこれに従事し，そのあと埋め戻しをした。

遺物は姶良郡姶良町にある県文化課収蔵庫へ運び，12月８日から水洗い，注記，復元，実測，整図，原稿作成などの作業にはいり，２月10日にすべて終了した。

第 3 章　　層　序

新砂丘上に営まれた遺跡であるから，基本的には黄白色細砂を主としている。この間に数層の腐食土・包含層を挟んでいる。これらを大きく５つの層に分けた。

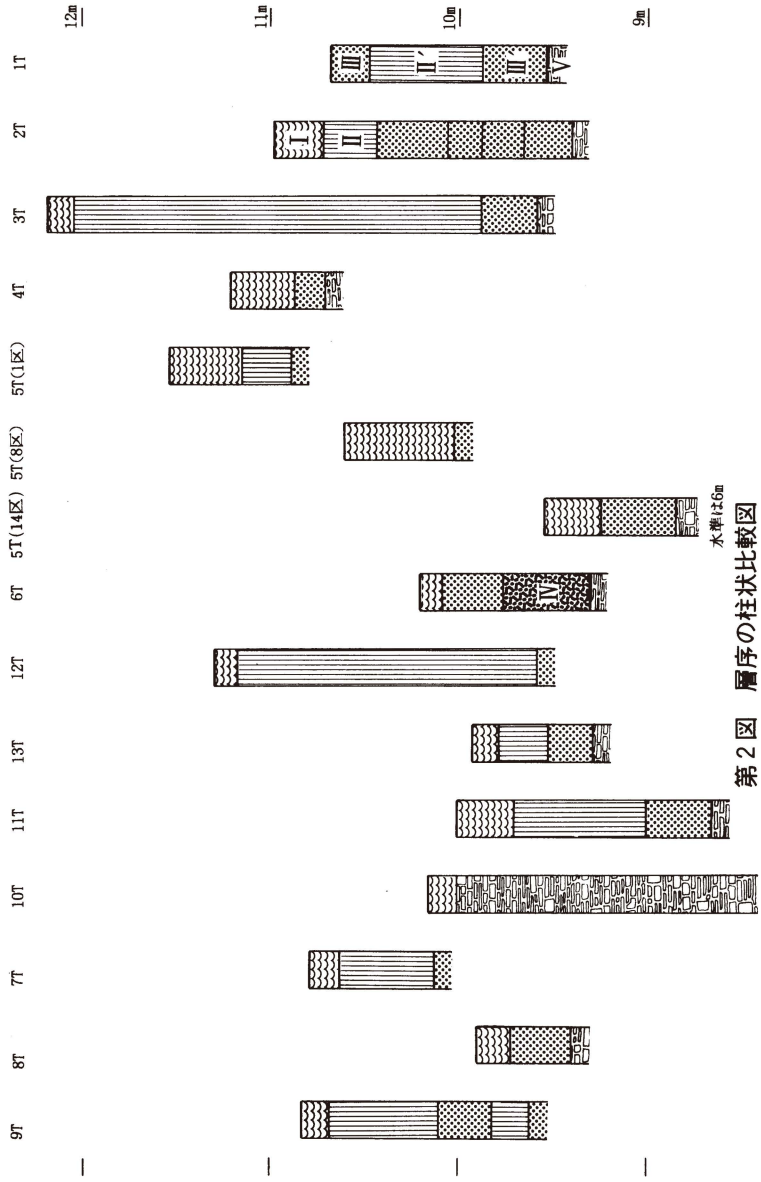
Ⅰ層：淡黒褐色をした細砂で，表土にあたる。第１トレンチでは消失している。

Ⅱ層：黄白色の細砂である。第４～６トレンチ・第８トレンチ・第10トレンチのように形成されない所，第３トレンチ・第12トレンチのように厚い所がある。

Ⅲ層：淡黒褐色をした細砂で，弥生時代前期以降の包含層にあたる。包含層はそれぞれのトレンチによって違いがみられ，１層から４層に分けることができる。また，第１トレンチや第９トレンチのようにこの間に黄白色細砂のはいっている所もみられるが，その期間は長くないものと思われる。

Ⅳ層：黄灰色をした細砂であるが，かなりち密な砂である。縄文時代後期の包含層となる。第５トレンチの７区付近と第６トレンチだけにみられる。すなわち縄文時代後期の遺物が出土する地点に限ってみられる層である。貝粉を多く混じて固くなる所もある。

Ⅴ層：黄白色の細砂で，基盤となるサンゴ礁まで続くものと思われる。人工遺物は含まないが，自然貝を含むことがある。



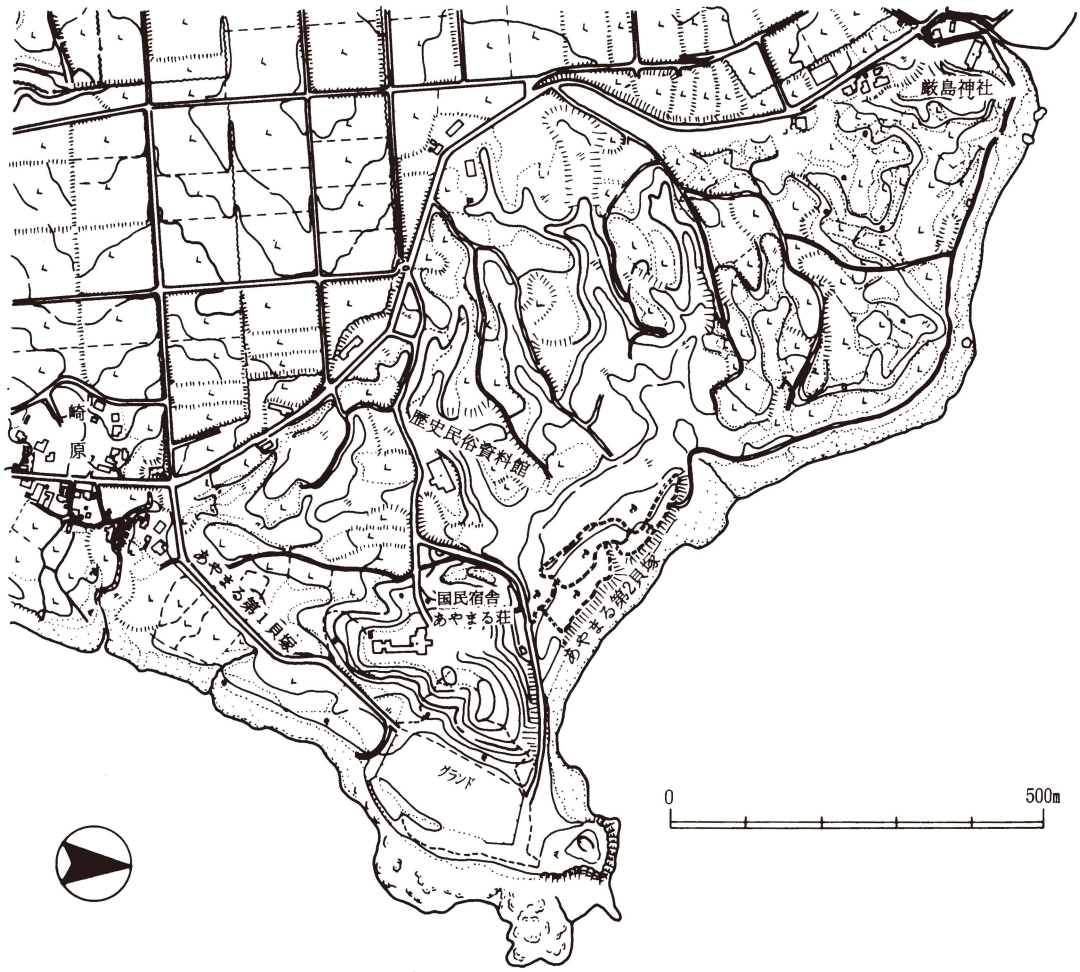
第２図　層序の柱状比較図

第４章　　発掘調査

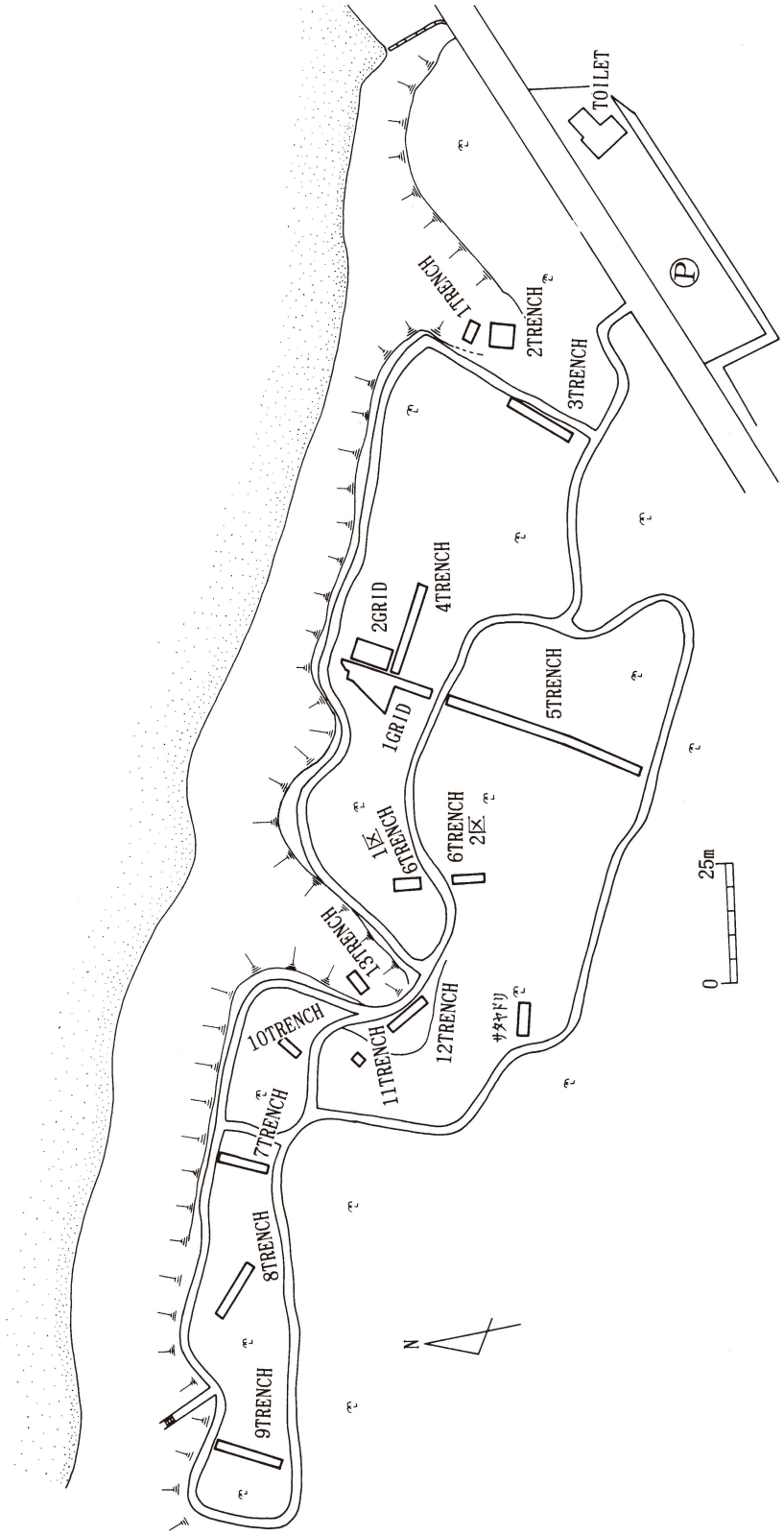
第１節　概要

遺跡のある砂丘は北西－南東に長軸をもつだ円形状の独立丘で，長軸方向が約300ｍ，短軸方向が約90ｍある。南側から西側へまわる古砂丘との間には狭い低地があり，水田の営まれていたこともあったが，現在は荒れ地になっている。この砂丘もサトウキビ等を作っていたが，現在ではソテツの群落として町指定の天然記念物になっており，町所有地である。前面に広がるサンゴ礁は奄美群島国定公園の一部を占めており，このソテツジャングルにも遊歩道が巡らされている。そしてソテツだけでなく，アダン・ハマユウ・バナナ・ハイビスカスなどが植えられ観光名所のひとつになっている。

調査はその地形から短軸に並行するトレンチを設定することを心がけたが，ソテツにじゃまされて思うような設定はできなかった。ただ２ケ所のトレンチ(第５トレンチと第６トレンチ)



第３図　周辺の地形図



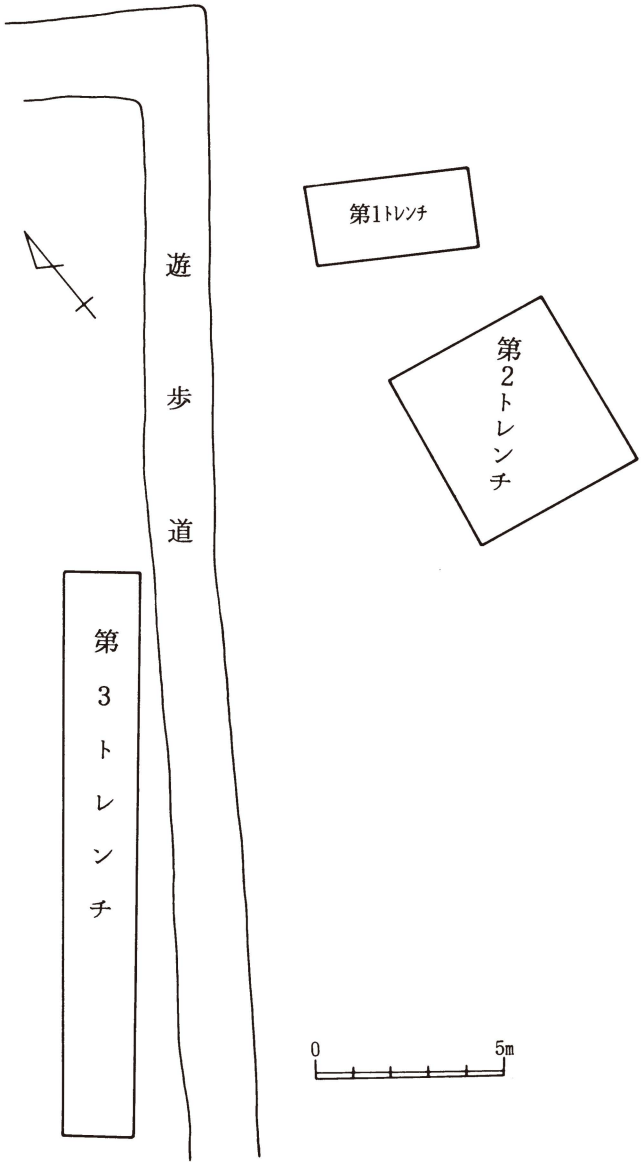
第４図　あやまる第２貝塚 TRENCH 配置図

についてはパワーショベルを用いてソテツを抜き，長く掘った。またハマユウのはえている地点については，その移植が可能であったため，一度抜き取り広い面積を調査した。その他の地点についてはソテツの希薄な所を選んでほぼ全容の把握ができるように心がけた。なお調査中に石組み遺構がバナナ園付近でみつかったため，これを調査した。第10節に記すサタヤドリの跡である。トレンチの幅は２ｍを基準とし，トレンチ名は基本的に東側から第１トレンチ・第２トレンチ……と名づけたが，調査期日の関係で若干の入れ違いがある。ハマユウのはえている所は面的に拡張したため第１グリッド・第２グリッドと称した。トレンチ数13，グリッド数２で，調査面積は約420㎡である。

遺構としては，ほぼ全域に貝殻の散布がみられ，その集中度の在り方が注目されるが，明確な形ではとらえ難い。しかし，第１グリッドでは貝殻散布の空白部分が整然と検出され，第２トレンチ，第１グリッドでは焼け貝・灰の集中個所が見られて，なんらかの遺構が予想される。第７トレンチには細かい貝殻の集中した所もある。

遺物は縄文時代後期から古代までの土器，石製品，貝製品などが出ている。

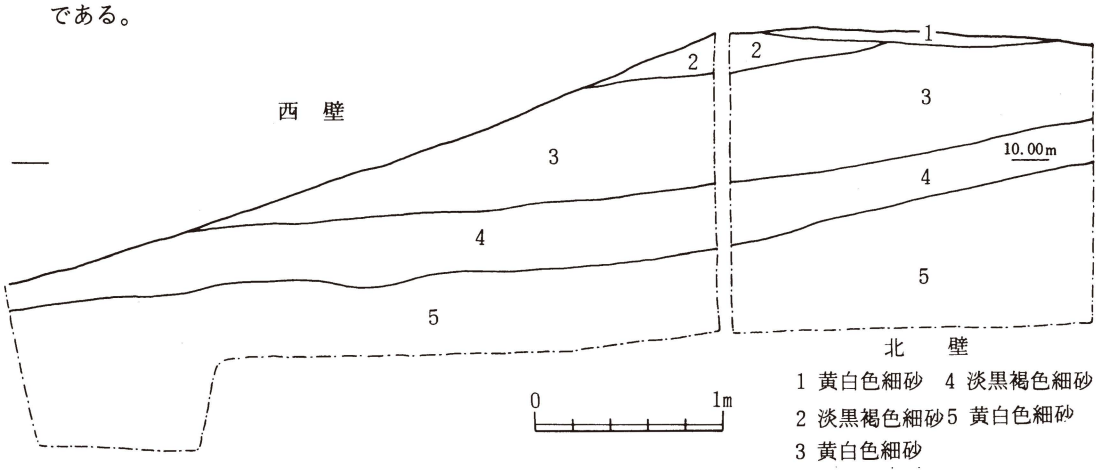
土器は大きく７種に分かれ，その他に南九州本土系統の土器（高橋２式・山ノ口式・免田式・中津野式）や，沖縄系統の土器（外耳土器・網目文土器）が出土している。Ⅰ類は面縄前庭式土器，Ⅱ類は嘉徳Ⅰ式土器でともに縄文時代後期の土器である。Ⅲ類はくの字状に外反する土器，Ⅳ類は口縁近くに凹線文のある土器，Ⅴ類は逆Ｌ字状口縁をもつ土器で，ともに弥生時



第５図　第１～第３トレンチ配置図

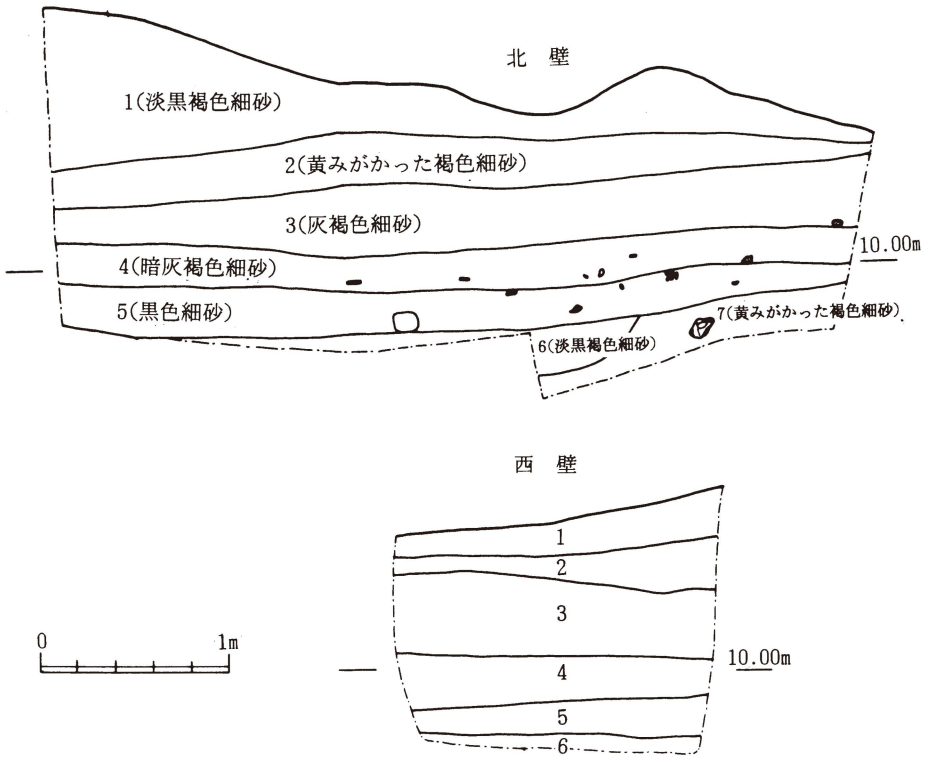
代前期の土器である。Ⅵ類はくの字状に外反する口縁で，この内外に沈線文様がみられる。形態によって細かく分けられ，弥生時代中期から古墳時代前期におよぶものである。Ⅶ類は兼久式土器で，古墳時代以降のものである。

石製品には研磨のある石器・磨製石鏃・えぐり入石製品があり，すべて弥生時代以降のものである。



第6図　第1トレンチ断面図

貝製品には貝製利器・貝匙・貝札・螺蓋製貝斧・有孔貝製品などがある。



第7図　第2トレンチ断面図

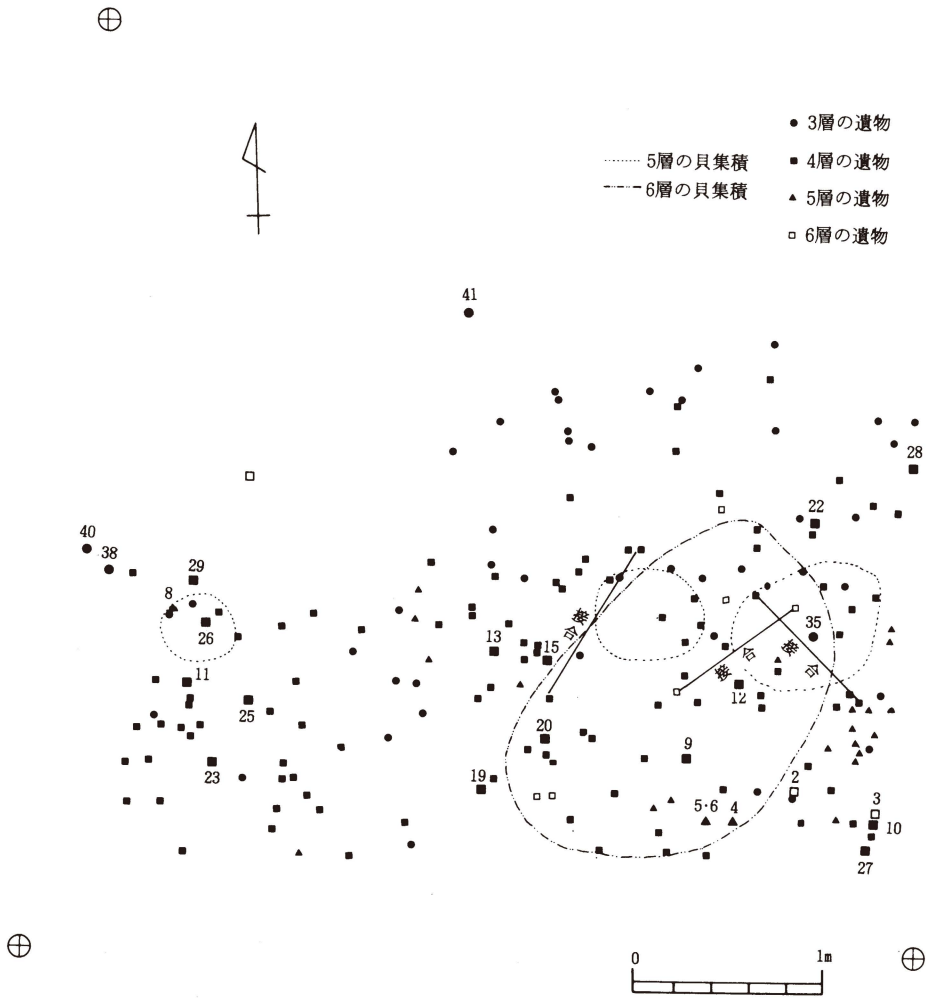
第２節　第１トレンチ～第３トレンチの調査

砂丘の東端近くにややくぼんだ所がある。かって海岸へおりる道のあった所で，しだいに砂が浸食されてきて窪地となったものである。当遺跡発見の端緒となった土器片が採集されたのもこの地点である。

まず海岸近くに第１トレンチを設定したが，すでに包含層の消失していることがわかったので，次に第３トレンチを設定したが，ここでは逆に包含層が相当に深かった。そこで，第１トレンチの南側に第２トレンチを設定した。調査面積は合わせて約65㎡である。

１．第１トレンチ

海岸と並行して4.5ｍ×２ｍのトレンチを設定した。層序は次のとおりである。表層の植生が少ないため表土はない。最上の１層には黄白色細砂が北西側にのみ10㎝位の厚さに堆積して



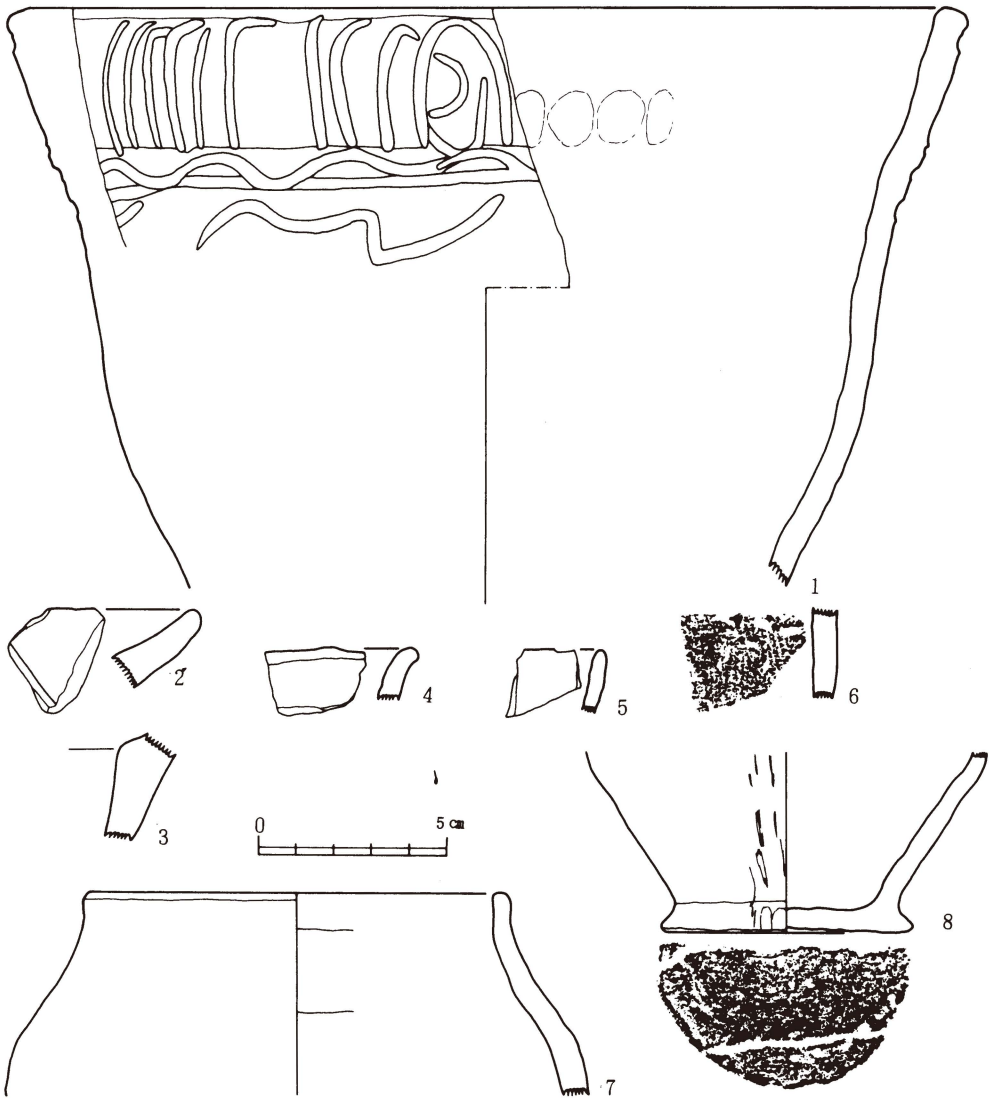
第８図　第２トレンチの土器分布図

いる。これは基本層序のⅡ層に該当する。2層と4層は淡黒褐色細砂で，この地点では遺物をあまり包含していないが，基本層序のⅢ層（包含層）に該当する。なお，この間（3層）に黄白色細砂がある。5層も黄白色細砂で，部分的にパワーショベルで掘り下げたところ4m以上掘り下げても同じような色調，砂質であった。これらは内陸へ向かって，また東へ向かってやや下降している。

2層中に数片の土器片を含んでいるが，時期の判別はし難い。

2．第2トレンチ

第1トレンチの隣接部に当初5m×5mのトレンチを設定したが，包含層の残りが良好であったため，さらに拡張し最終的には10m×10mとなった。層序は次のとおりである。1層の



第9図　第2トレンチ出土の遺物(1)

第10図　第２トレンチ出土の遺物(2)

表土は淡黒褐色細砂で，2層は黄みがかった褐色細砂である。これらは基本層序のⅠ層・Ⅱ層に該当する。3層は灰褐色細砂，4層は暗灰褐色細砂，5層は黒色細砂，6層は淡黒褐色細砂で，ともに遺物を包含しており，基本層序のⅢ層にあたる。7層は黄みがかった褐色細砂で，基本層序のⅤ層にあたる。これらの層はほぼ平坦である。

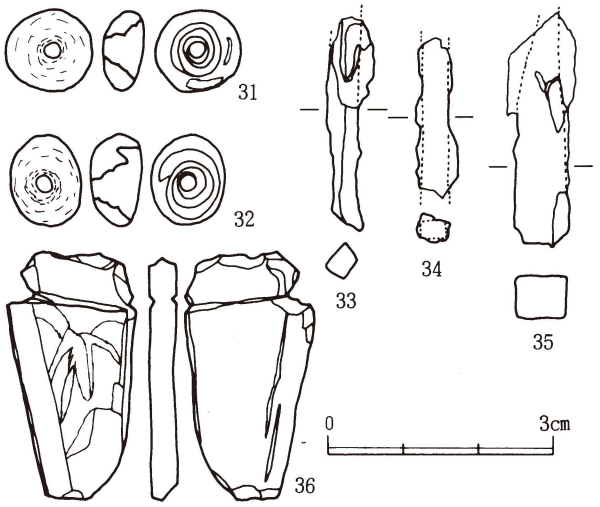
(1)6層

西側に向かって下っており，トレンチ内の南側のみに残っている。調査期日のつごうで，トレンチ内の完掘はできなかった。南側に貝の砕片の集中した所があった。

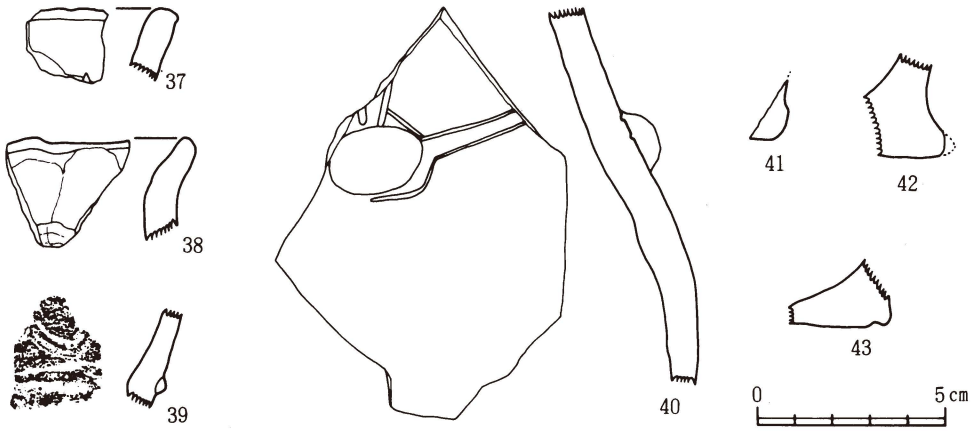
1はやや外反するもののほぼまっすぐ外へ開きながら口縁へ向かう器形をしている甕形土器で，口縁直径25.5cmを測る。口縁端部は矩形をしている。口縁下部には2段の波状文がみられ，下の波状文は短かい波状文のくり返しとなる。口縁部には右へ曲がる三日月状の文様が繰り返され，途中で逆U字状の文様等で変化をもたせている。内外ともヘラによる右下がりナデ整形で仕上げるが，内面は剝脱が目立ち，指押し痕も残っている。2・3はくの字状に折れる口縁部をもち，2は内面に斜方向のヘラ凹線がある。これらは茶褐色あるいは明茶褐色を呈し，焼成度は良い。1が石英などの割と粗い土を用いるのに対し，2・3はこまかい土を使用している。Ⅵ類である。

(2)5層

西側に焼貝・灰の集中した所が1ケ所，東側に細かく砕かれた貝の集中した所が2ケ所ある。東側



第11図　第2トレンチ出土の遺物(3)



第12図　第2トレンチ出土の遺物(4)

の溜りから有孔貝製品２個と，棒状鉄器が出土した。

４は端部が外へ折れ，５はまっすぐのびる甕形土器の口縁である。６は外面にヘラによる綾杉文と爪形文がある胴部である。７は口縁が細くなる無頸壺で，内面・外面ともヘラナデの上にせんい状ハケナデを施している。８は端部が外へ突出する底部で，木の葉２枚分の圧痕が付いている。いずれも石英・白色石粒などの細かい土を使用しており，貝粉を含むものもある。Ⅶ類である。

31・32はイモ貝の螺塔部に穴をあけた玉である。33・34は棒状をした鉄製品である。

(3)４層

９～15は口縁部が外反するもので，ほとんどが無文だが，10・11は外面に凹線がある。17はまっすぐのび，18は鉢形となる。19・20は口縁が内弯するもので19には突帯が貼り付けられる。21～23は三角突帯が貼り付けられるが，21はたて方向になる。24は巻貝螺塔部による連続刺突文がある。25～29は端部が外へ張り出す底部で，いずれも木の葉圧痕が付く。これらはⅦ類である。

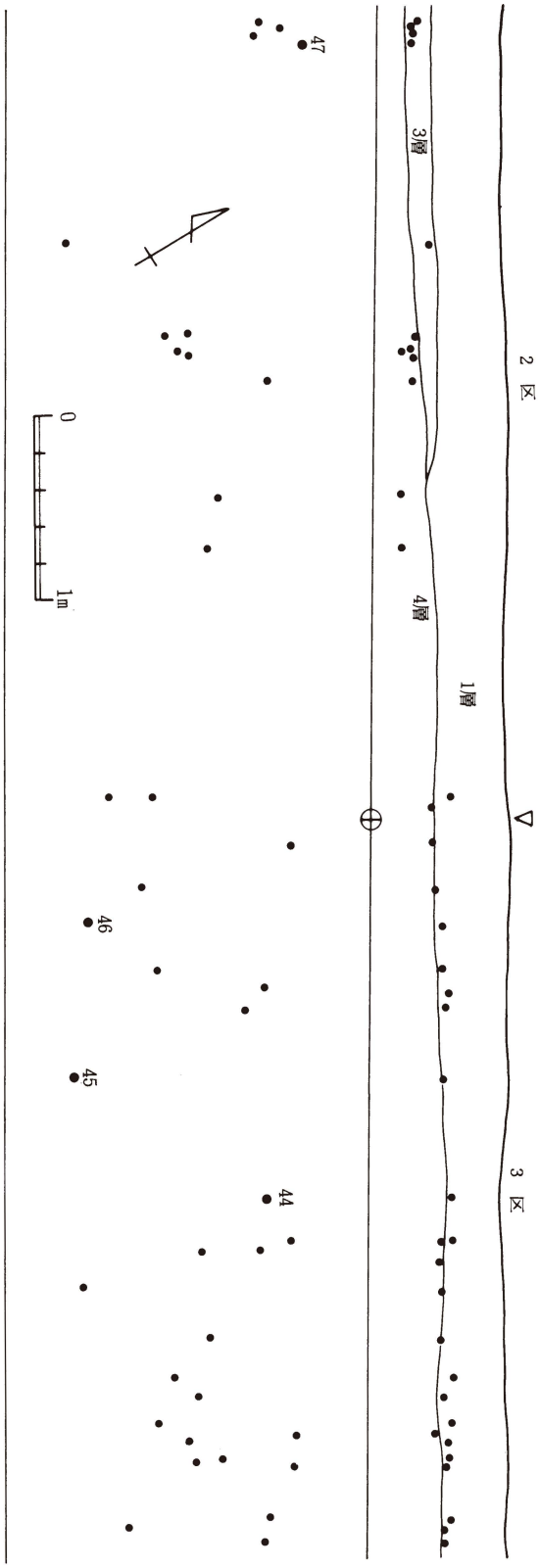
30は夜光貝の蓋を利用した螺蓋製貝斧で，約1／3を刃部としている。

36は扁平な粘板岩の周辺を磨き，逆台形につくり，浅いひもかけ状のえぐり込みをつくった石製品である。

(4)３層

遺物の包含量は少ない。

37・38は口縁がやや外反する甕形土



第13図　第４トレンチ２区・３区遺物出土状況

器で37は外面に沈線がみられる。38の外面は指でナデられる。39も外反する口縁で，頸部に突帯が貼り付けられ，外面に4条の波状文が付される。40は胴のあまり張らない壺形土器で肩部にこぶ状の突起が付く。こぶ状突起の周辺にはヘラ描きの沈線が引かれる。淡茶褐色を呈し，焼成はふつうである。外面はていねいなナデ仕上げであるが，内面は凹凸が目立つ。3層の他の土器の胎土が石英・赤色礫・黄白色土などの多い土なのに対し，これは石英・貝粉が多いやや異質なものである。41～43は端部がやや外に張り出す底部で，木の葉の圧痕が付く。これらはⅦ類である。

3．第3トレンチ

第1トレンチ・第2トレンチとは遊歩道を間に挟んだ北西側にあり，2m×15mを調査した。ところが表土20cmの下には厚い黄白色細砂が堆積しており，崩壊の危険もあったので，東端部と西端部のみを包含層を確認するまで掘り下げた。東端部では2.1mで，西端部では2.3mで包含層（Ⅲ層）に到達した。第1トレンチ・第2トレンチと比較すれば，包含層は内陸部へ向かってやや下降しているものの，ほぼ平坦に近いことがわかる。

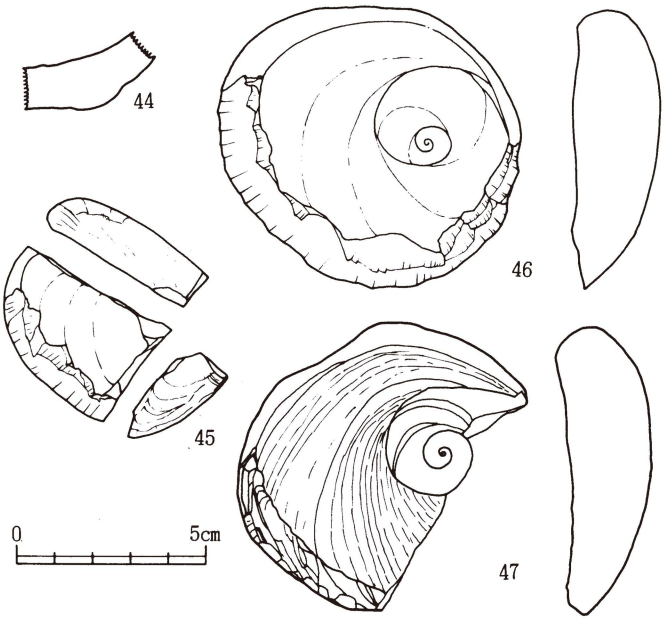
第3節　第4トレンチ，第1グリッド，第2グリッドの調査

遊歩道入口から約70mほどはいった所にはまゆう園がある。ここへ海岸線と並行して設定したのが第4トレンチである。このトレンチと直交して第5トレンチを設定したが，ここに良好な貝の堆積がみられたため拡張したのが第1グリッド・第2グリッドである。

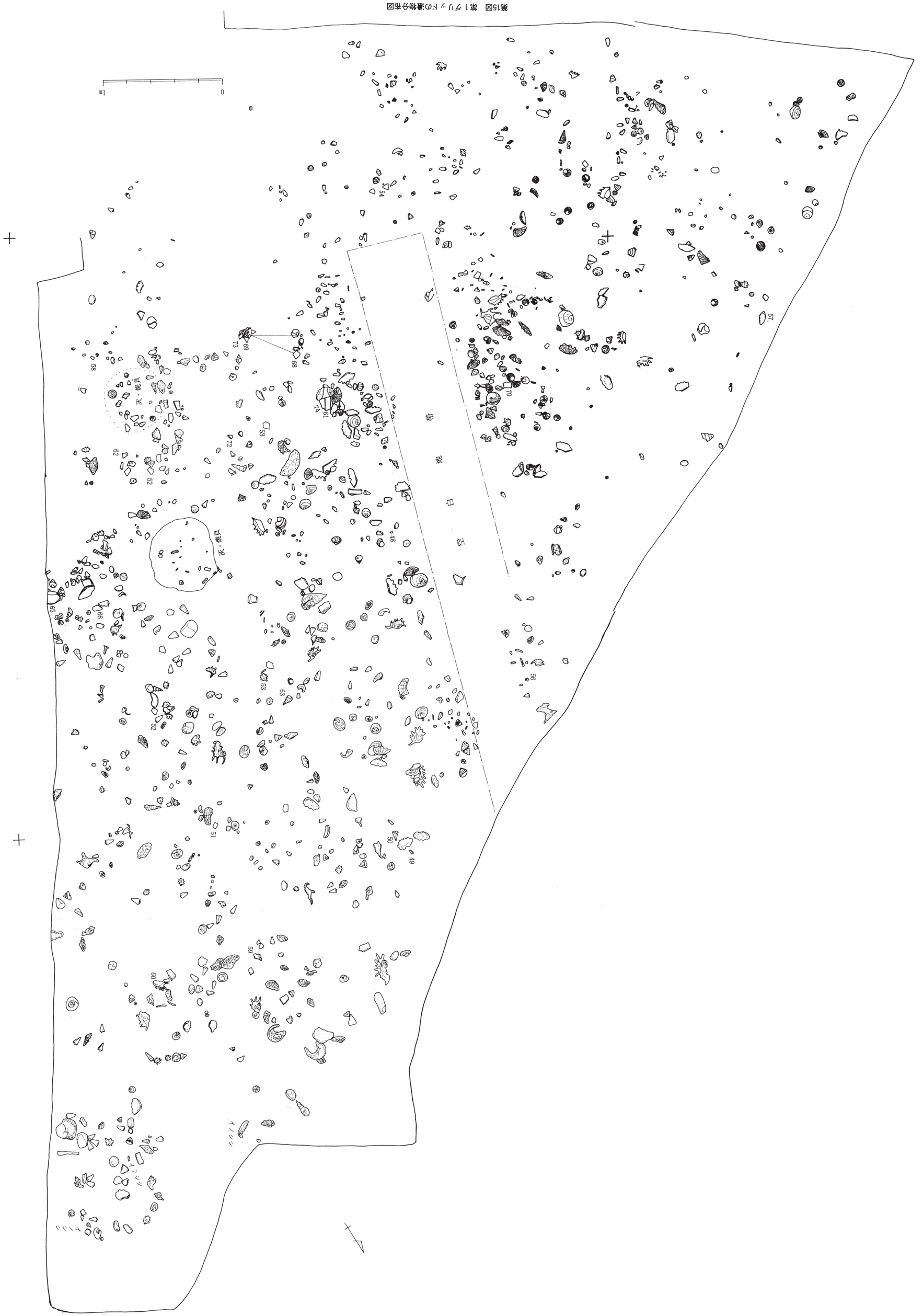
1．第4トレンチ

2m×25mのトレンチで調査を始めたが，第1グリッドとの関係でさらに西へ2.2m拡張した。5mごとに区を分け，西から1区・2区……5区とし，西端区は0区とした。層序は次のとおりである。表土層は30～50cmである。2層の黄白色細砂は0区・1区あたりに薄く残っている。3層が淡黒褐色細砂で，遺物包含層である。西側では残りがいいが東側（3区・4区付近）では残っておらず，わずかに5区に残っている。4層の黄白色細砂は深く，少なくとも2m以上ある。

出土遺物は多いが，0区・1区は第1グリッドに含める。44は3区で出土した壺形土器の底部で，安定し

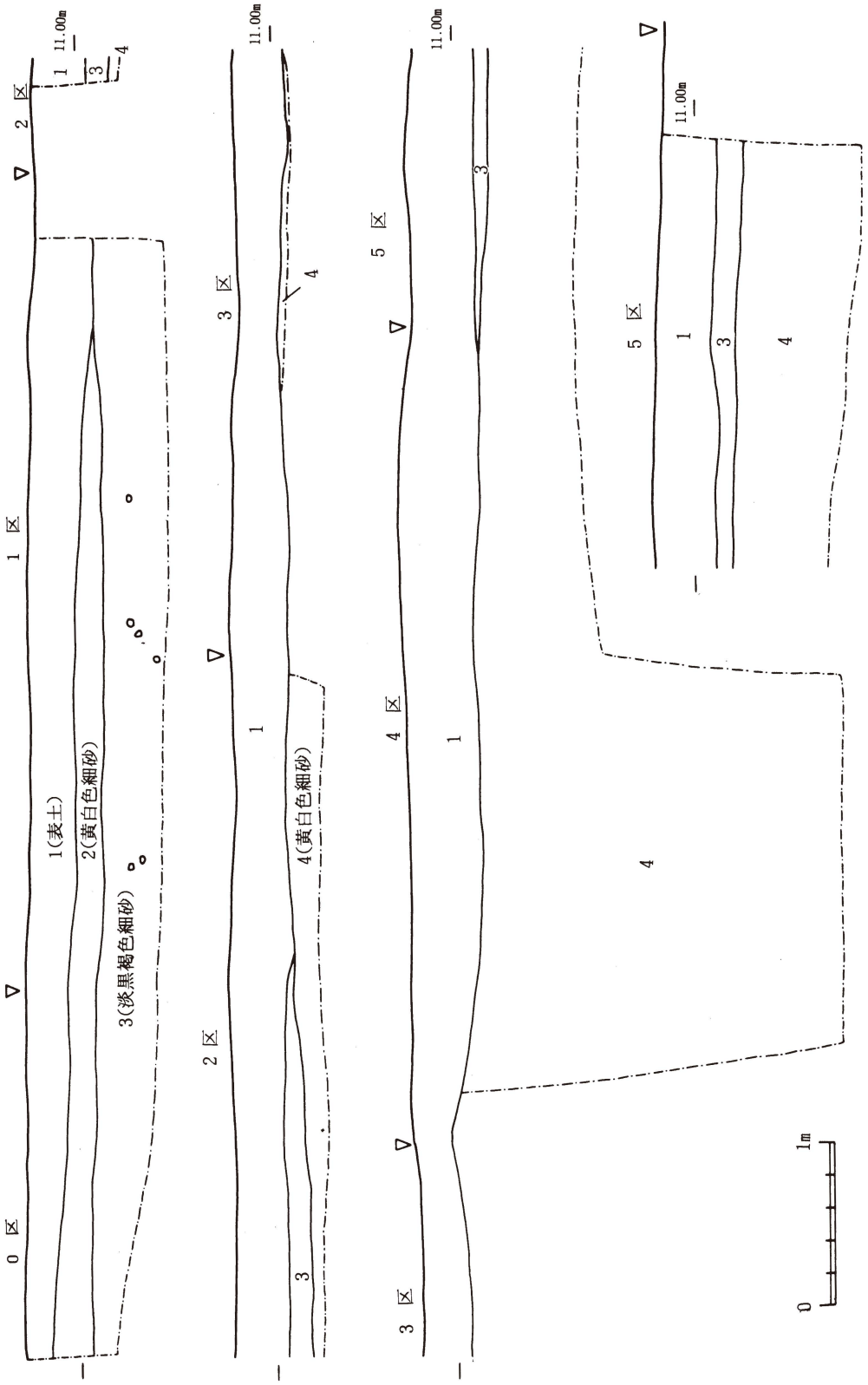


第14図　第4トレンチ出土の遺物



第15図　第1グリッドの遺物分布図

第16図　第２グリッドの遺物分布図



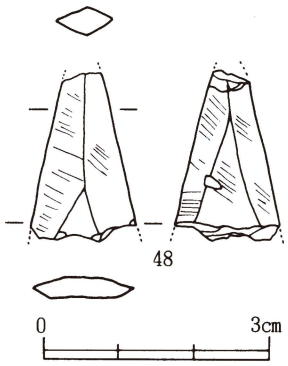
第17図　第４トレンチ断面図

た平底であり，中期後半のものであろう。胎土にサンゴ粒を多く含み，茶褐色を呈する。螺蓋製貝斧は6点出土している。$\frac{2}{3}$ほどを打ち欠いている。

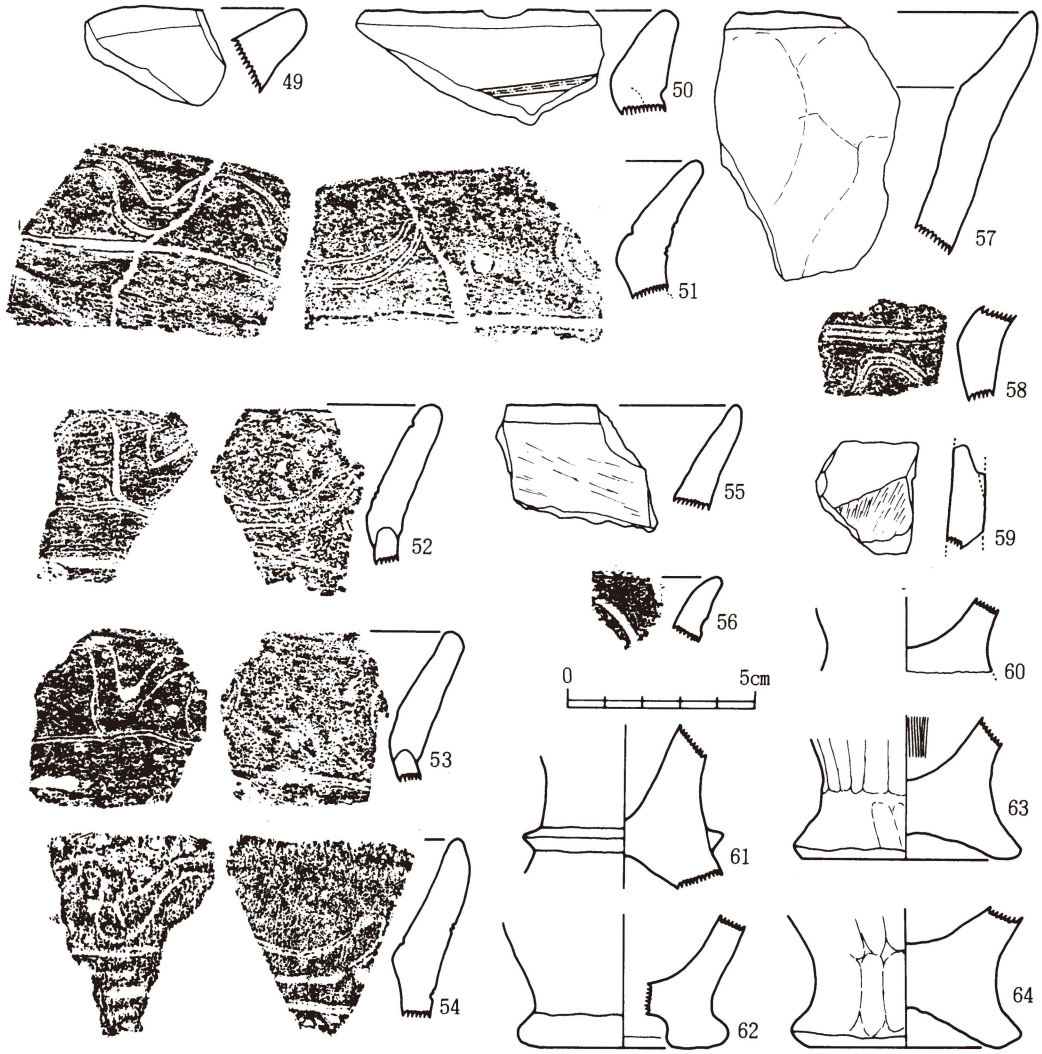
2．第1グリッド

第4トレンチ0区・1区の北側，第5トレンチ1区・2区の西側に囲まれた三角地帯で，調査面積約40㎡である。

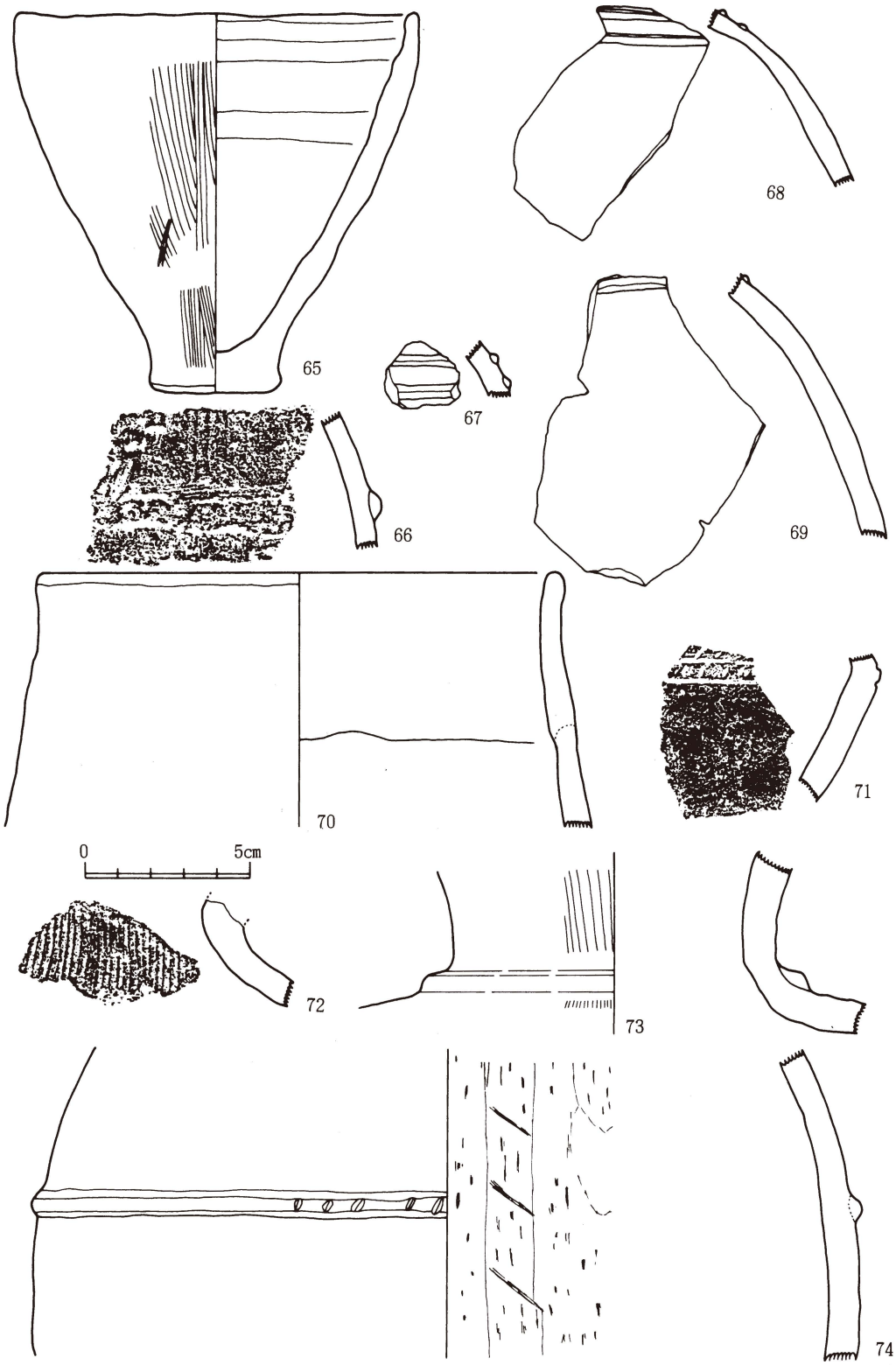
調査は表土約40㎝をはいだあと包含層の貝を検出し，その図化のあと埋めもどした。それは中央部あたりに幅約70㎝，長さ4.5m以上にわたる空白地を見いだし，それを遺構と認めたからである。いくらかの出入りはあるものの，ほぼ一直線になっ



第18図　第1グリッド出土の遺物(1)



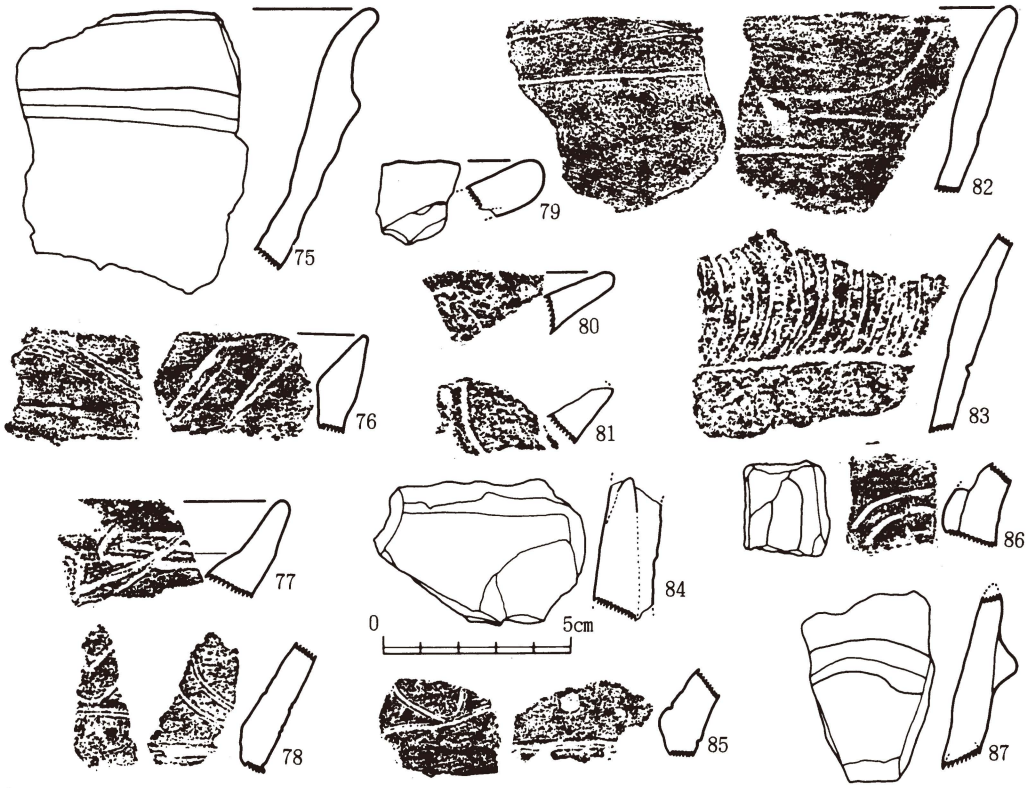
第19図　第1グリッド出土の遺物(2)



第20図　第１グリッド出土の遺物(3)

ており，南端もまたきちんと切れている。この空白地の東側では2ケ所に灰・焼貝などが直径約60cmほどの間に集中した所がある。炉かと思われる。この範囲にはシャコ貝・夜光貝などの大型貝が多くみられた。

48は粘板岩製磨製石鏃で尖端部と基部を欠いている。鎬は途中から2分される。49～58は口縁部がくの字状に外反する甕形土器である。49・50は逆L字状に近く外反する。51～54，56，58は内面・外面にヘラ描きの横線・波状文，凹点文がみられる。52・53でみられるように口縁付近は積みあげられる。55は内外とも無文である。57も内外とも無文であるが，これは外面に屈曲部がみられない。59は胴部で，積みあげの痕跡を残している。60～64は台脚部で，61は屈折部に三角突帯が付く。62の未端は丸くなっている。65は口径12cm，高さ11.5cmを測る小型の鉢形土器で，輪積み整形である。外はハケナデのあとをヘラナデで仕上げる。66～74は壺形土器である。66は外面を縦方向のハケナデで仕あげ，胴部に突帯が貼り付けられる。67～69は肩部に小さい貼り付け突帯がある。68・69は同一個体と思われる。70は口縁がやや狭くなる無頸壺で輪づみ整形である。71は茶褐色を呈し，外面をていねいにナデるもので，胴部は強く屈曲し，ここに2本以上の横方向凹線とその間にヘラ刻みがある。免田式かと思われる。72は肩部で，外にハケナデがある。73は頸部に突帯があり，口縁は外へ開く。これも外はハケナデである。74は内面がたて方向のナデに近いヘラケズリのあるもので，胴部にヘラキザミのある突帯



第21図　第2グリッド出土の遺物(1)

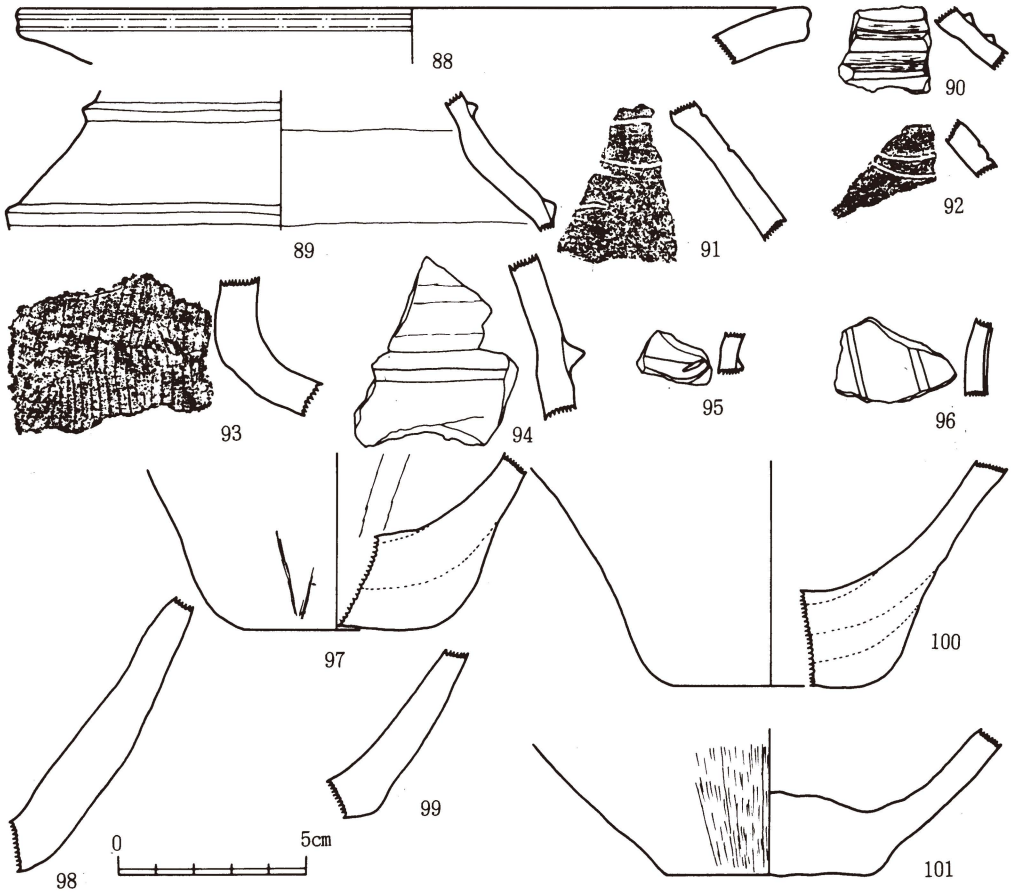
が付けられる。73・74は黄褐色を呈し，南九州本土系のものと思われる。これらは弥生時代後期のものと思われる。

３．第２グリッド

第４トレンチ２区・３区の北側，第５トレンチ１区・２区の東側にある拡張区で，調査面積約40㎡である。

貝は北西側に集中しており，その流れは第１グリッドに続いている。この集中部分にはシャコ貝などの大型貝が多い。南西側では貝が少なく，土器の多い所もあった。ここの貝も取りあげず埋没した。

75は外反する口縁部をもち頸部に三角突帯の貼り付けられる甕形土器で，茶褐色を呈し，胎土にサンゴ粒を多く含む。76は内面がくの字状に屈曲する口縁で，外側に左下がり斜線と列点文，内側に３条の波状文がある。77は内面が逆くの字状に屈曲する口縁で，外側に曲線と直線を交えた文様がある。78もくの字状口縁で，内面・外面とも波状文と横線が描かれる。79は口縁外面に粘土を貼り付けて肥厚させた土器である。こうしたつくりは81にもみられ，81は外面に波状文がある。80は内面に波状文がみられる。82はくの字状に曲がらずまっすぐ外へ開く器



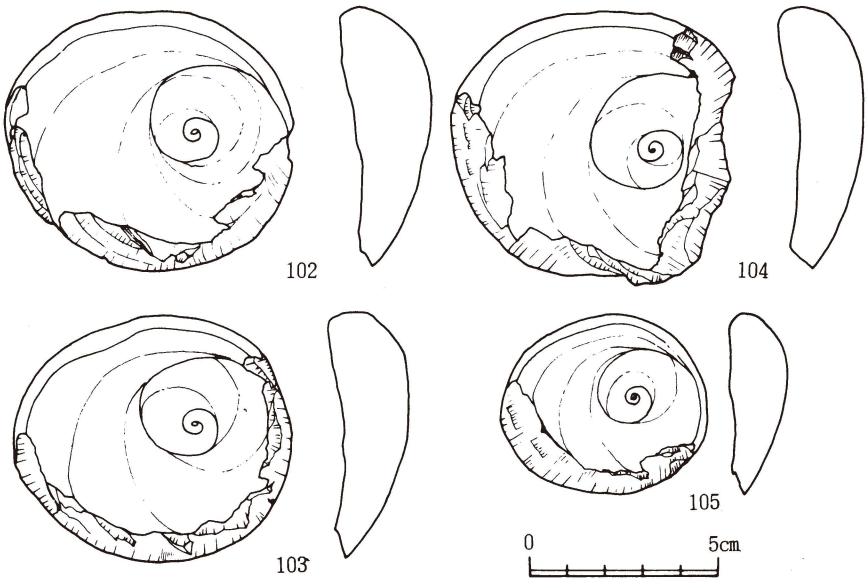
第22図　第２グリッド出土の遺物(2)

形で，内面・外面とも波状文十横線の文様がある。83も同じような器形をしており，外面は横方向の凹線の上に縦方向の孤線が割と密にかかれる。84は積み上げ手法をよく残している破片で，積みあげの際，外のみでなく内側にも粘土を加えている。85はくの字状口縁で，外側に横線と凹点文，内側に凹線と波状文がみられる。86は内側にこぶ状の縦に長い突起が貼り付けられ，外には波状文がみられる。87は外側に波状を呈する三角形突帯の付く土器で，いわゆる外耳土器である。88～101は壺形土器である。88は口縁直径21cmを測る広口壺で，内面は研磨に近いヘラ横ナデ，外面はヘラ横ナデで仕上げる。89は肩部に二本の三角突帯が貼り付けられる小型の壺である。90は肩部に小さい三角突帯が二条付いている。91・92は肩部に浅いヘラ描き沈線があるもので薄手のつくりである。93は肩の張る器形をしている。肩部は縦方向のハケナデで仕上げる。94は胴部に三角突帯が貼り付けられ，内外ともヘラによる横ナデで仕上げる。95・96も薄手のつくりで，95は横方向の，96は縦方向の小さい突帯が貼り付けられる。97～101は底部である。97～100は平底であるが，丸みをもった底部である。97・100の断面をみると胴部と同じ厚さで底まできて，底は粘土を積みあげることによって厚く仕上げているようである。101は安定した平底で，内底部が厚く盛られている。外面はヘラナデである。

以上の土器のうち，88・90・93・94・98あたりは南九州本土あたりからの搬入品である可能性が強い。在地系統の土器が石英・白色石粒あるいは角閃石を多く含むのに対し，南九州本土系統のものは赤色粘土などが含まれている。90は金雲母を含んでいる。75・101はサンゴ粒を多く含んでおり，在地系統の土器の中でも一種変っている。これらの土器はおおむねⅥ類を主とし，弥生時代後期あたりの時期であろう。

なお，第1グリッドの土器にもいえることだが，上面を向いた方は磨滅が激しく，整形の不明なものも少なくない。このことは，露出した状態が長く続き，土器の反転することもほとんどなかったことを物語っている。

螺蓋製貝斧（102～105）は4点出土しており，$\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$に加工痕がある。全て取りあげなかったから，もう少し多かろう。



第23図　第2グリッド出土の遺物(3)

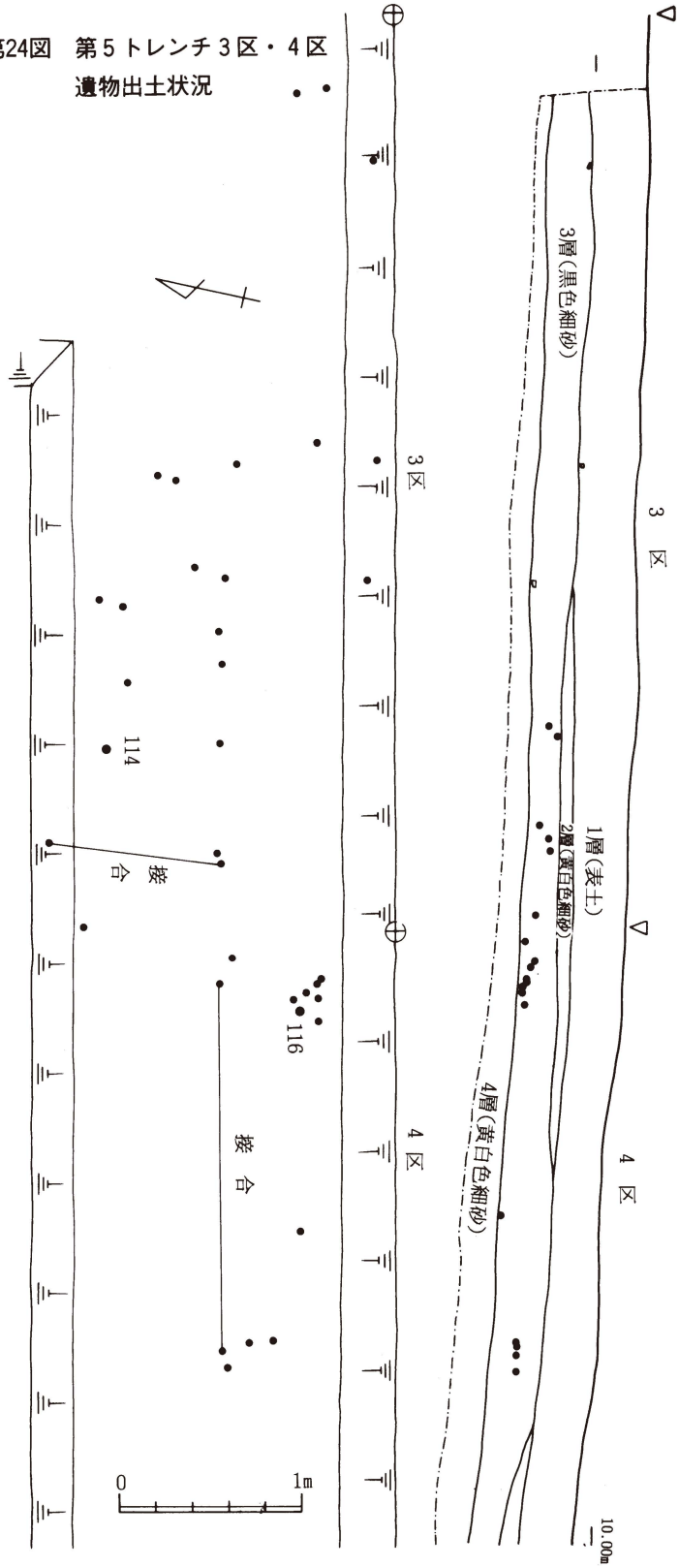
第４節　第５トレンチの調査

はまゆう園から，海岸線に直交した方位で，砂丘の段となって落ちた地点，遊歩道まで続く幅２ｍのトレンチである。はまゆう園をすぎ，遊歩道の南側はソテツジャングルになっているため，これを除去して調査した。この都合で，端までまっすぐトレンチを設定するのは不可能となったため途中11区からは方位がやや西へ傾いている。区は海岸のほうから５ｍおきに１区・２区……と名づけ14区まである。長さ約62ｍで，調査面積125㎡となる。

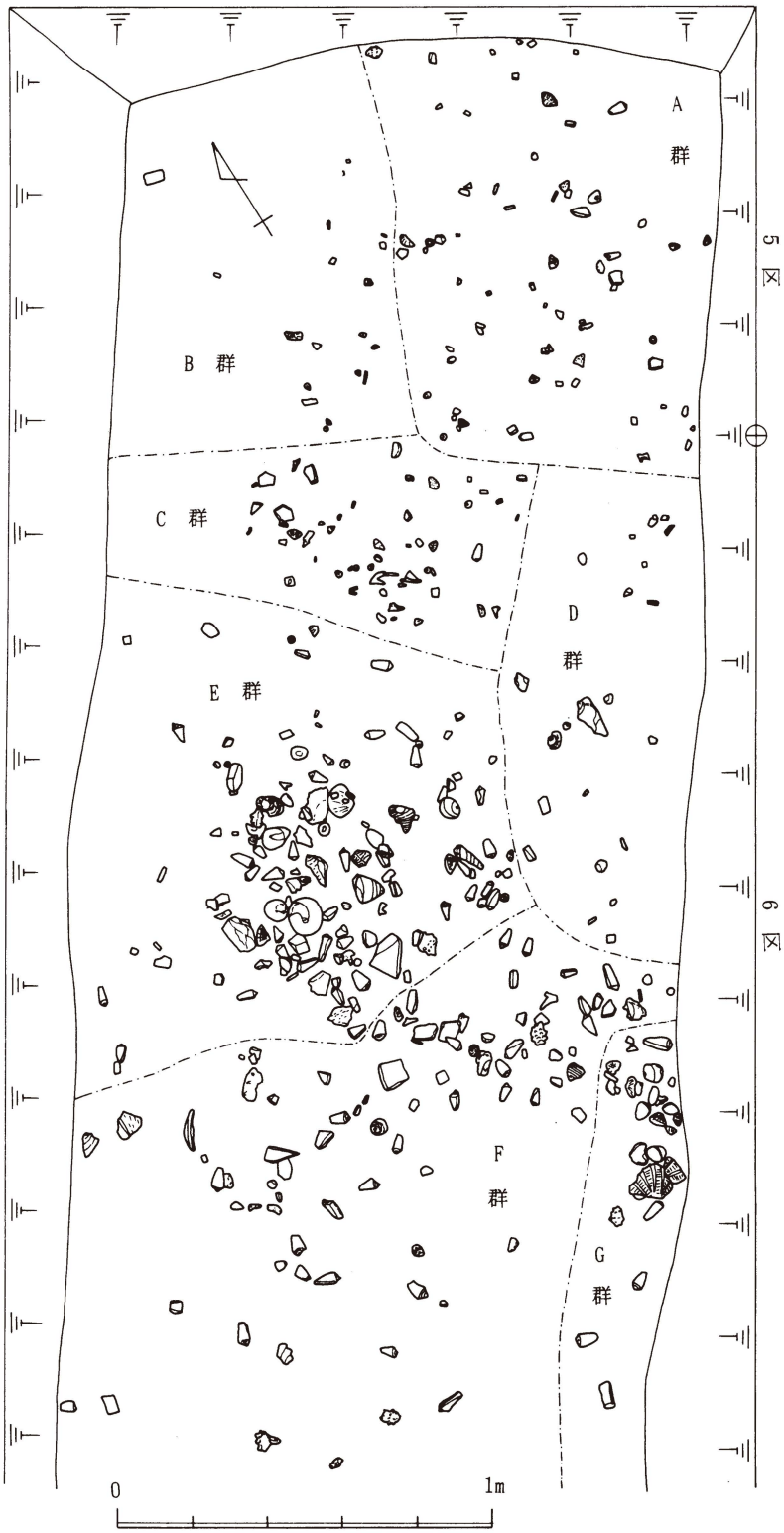
なお１区・２区については東西へ拡張して第１グリッド，第２グリッドとしたので，遺物等もここでは扱わない。

１．３区・４区

４区の西端30㎝ほどは遊歩道にかかり調査できなかった。２層の黄白色細砂は部分的にしか残っていない。３層の黒色細砂が遺物包含層で約25㎝幅ある。土器のほとんどはこの包含層にはいって



第24図　第５トレンチ３区・４区遺物出土状況



第25図　第5トレンチ5区・6区遺物出土状況

いる。包含層中にはマガキガイなど少量の貝を含むが，その量は少ない。高橋Ⅱ式土器など弥生時代前期の土器が含まれる。基盤層は黄白色細砂である。層の傾きは内陸部に向かって下降している。

2．5区・6区

5区の北側は遊歩道になっており，3mほどは調査できなかった。

当地区には貝や土器などが集中しており，貝種や分布状況によって7群に分かれる。

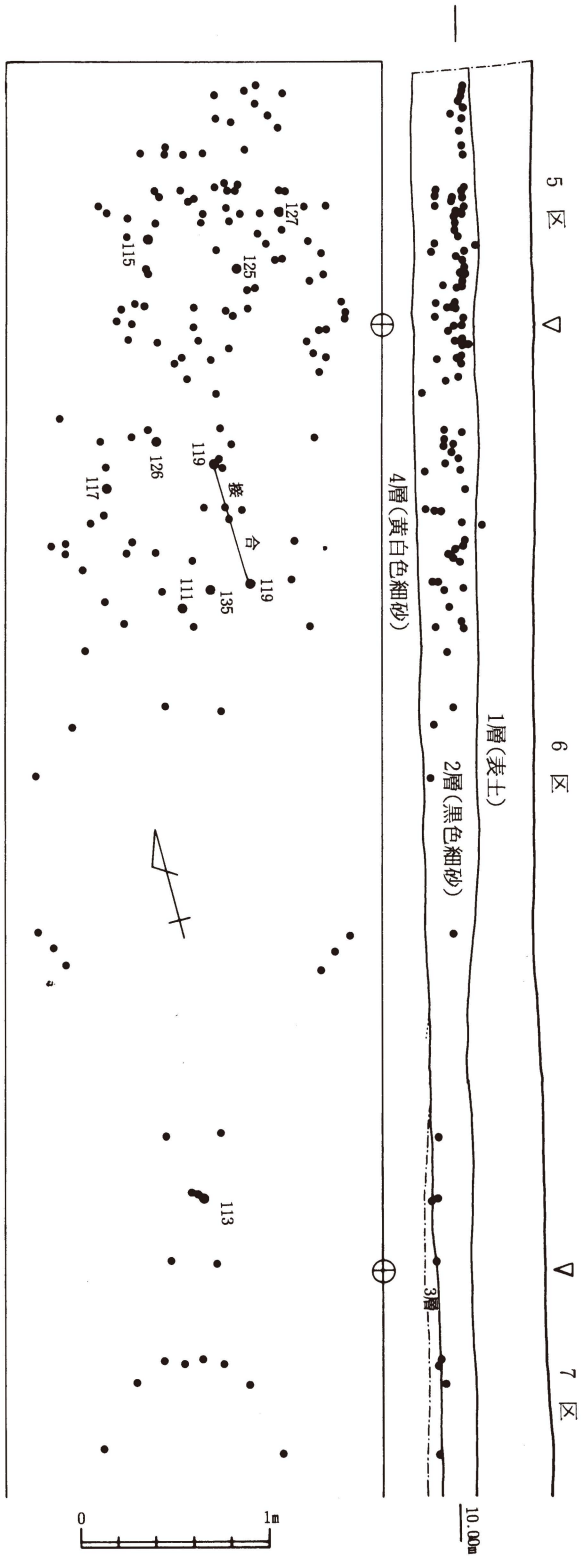
A群には土器の小破片が多くみられ，貝種としてはイソハマグリが44％を占めている。

B群にも土器の小破片があり，貝は少ない。陸産貝が半数を占めている。

C群にはサンゴ片が若干みられ，貝は多い。アマオブネが35％，マガキガイが21％と多い。

D群には土器・貝ともあまり多くない。

E群の中でも南側には直径60cmの範囲に貝の集中場所がある。ここではマガキ貝が48％



第26図　第５トレンチ５区・６区遺物出土状況

と過半数を占めている。

Ｆ群は散在した状況にあるが，マガキガイが多い。

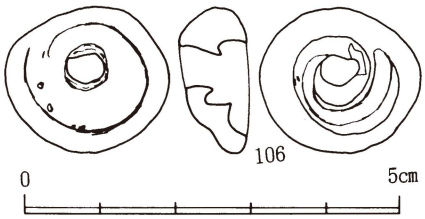
Ｇ群では北側にリュウキューマスオガイが集中して堆積している。

土器も貝の集中に比して存在しており，特に５区と６区の境付近に集中している。そして，６区南半から７区にかけては，まばらな状況が続くが，これは貝の散布状況とも比例する。この付近には弥生時代前期の土器が多いが，古墳時代前期の土器もはいっている。

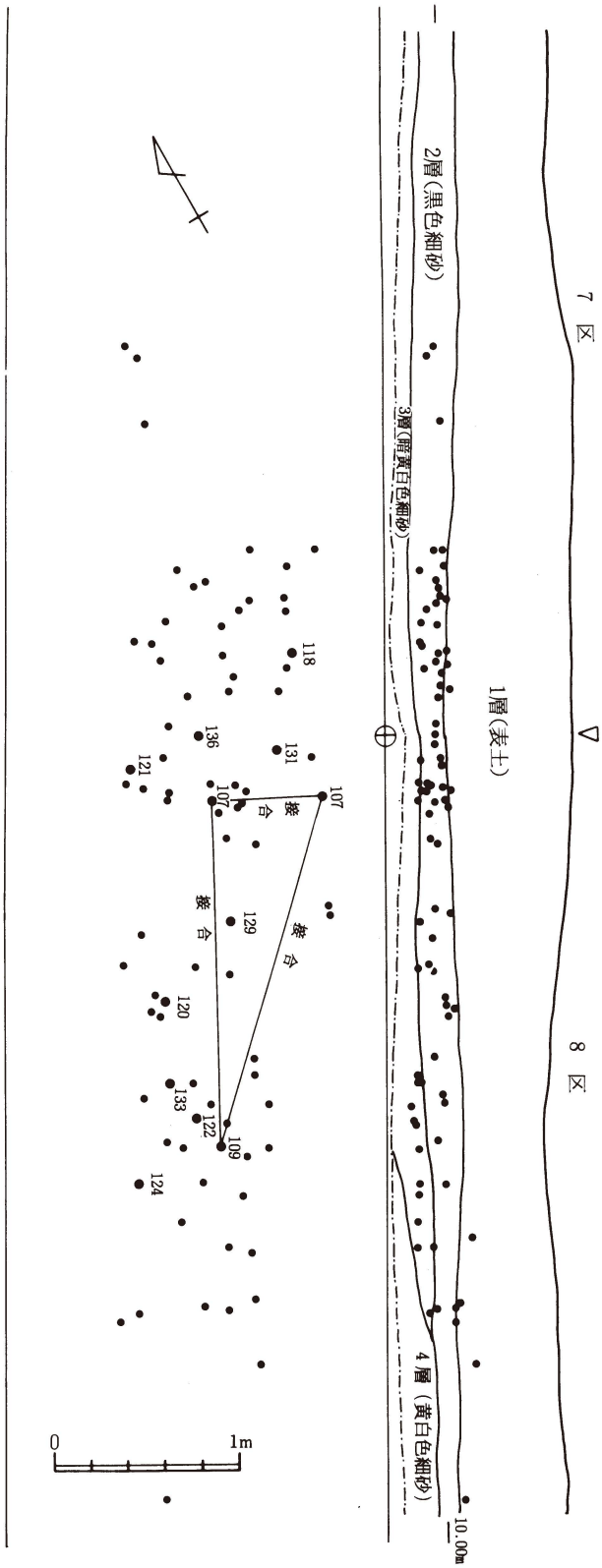
３．７区・８区

７区南端付近から８区北半にかけて再び土器の集中する所が出てくる。

７区から８区にかけても，５区・６区と同様層序は安定している。１層の表土は40cm～60cmと割と厚い。２層は黒色細砂で，もっとも多く遺物の包含されている層である。この付近でも地層の撹乱は少なく，土器はほとんど包含層のみに集中している。この層は８区でなくなり，同時に貝・土器の出土もなくなる。３層は暗黄白色細砂で，貝粉を多く含んでいるためひじょうに固く致密になっている。この層にも土器が含まれており，その中に面縄前庭式土器が含まれていることから基本層序のⅣ層に該当するものと思わ



第27図　第５トレンチ出土の遺物(1)



第28図　第５トレンチ７区・８区遺物出土状況

れる。この層も８区南半でおわっている。第５トレンチの包含層は，１区から４区あたりまでは南へ向かってやや下降しているが，５区あたりから８区までは平坦になっている。

４．９区～11区

９区～11区は砂丘の南端部に位置している。９区の南端は畑の段となって，一段落ちている。10区から11区へはゆるやかに下降している。20㎝～30㎝の厚さを測る表土の下は黄白色砂（基本層序のⅤ層にあたる）があり，遺物包含層はないが，９区北側では黄白色砂上面から面縄前庭式土器が出土している。

５．12区～14区

12区は傾斜地となっており，13区・14区は砂丘後背地にあたる。

１層の表土は30㎝～50㎝を測る。２層は黒色細砂で，13区の安定した付近から始まる。この層は20㎝～40㎝の厚さで堆積しており，少量の土器・貝・動物骨が出土している。土器は小破片のため時期等が不明である。３層は黄白色砂で，基本層序のⅤ層に該当する。13区北側には３層に掘り込まれた幅70㎝，深さ30㎝の溝状遺構がトレンチと直交する方向で検出された。溝の中には人工遺物がないため，時期の決定はできないが，包含層の下部から検出されており，包含層と同時期ないしは古い時期であろう。

砂丘後背地の調査はこの地点のみであったが，包含層が確認されたこ

とから，後背地にも遺跡の広がりがあることが推測できる。

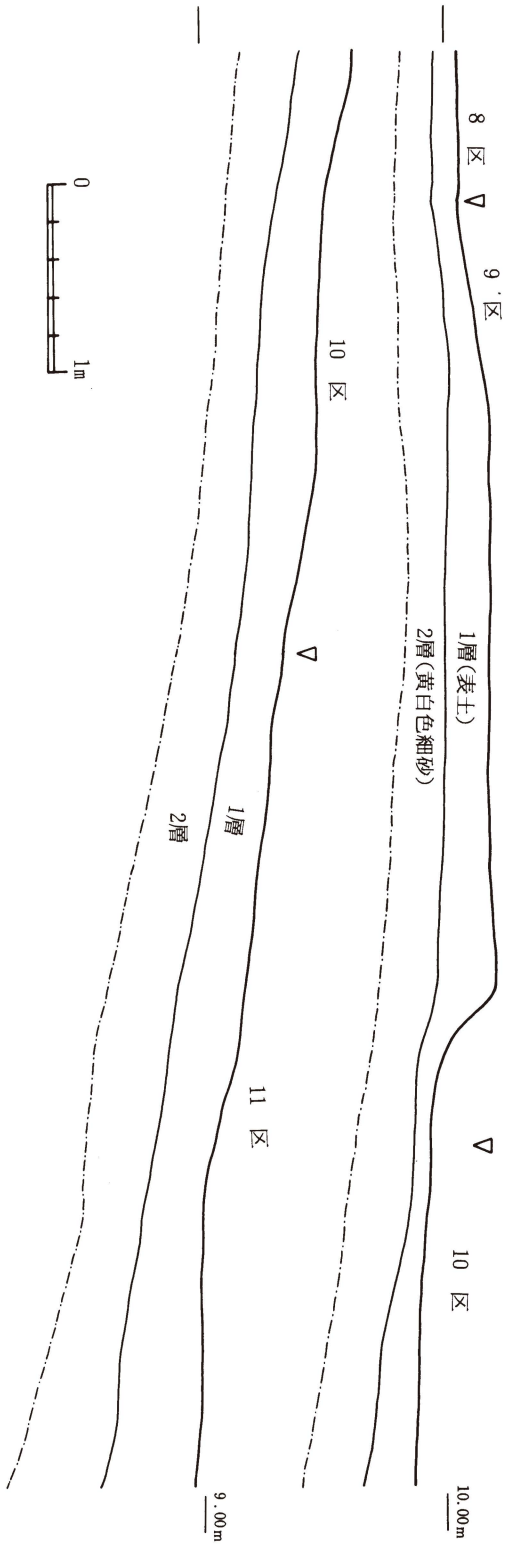
６．第５トレンチ出土の遺物

第５トレンチからは土器・貝製品の他に，黒曜石の剝片も出土している。

①土器（107～136）

107～110は口縁部が外反する甕形土器である。107と109は同一個体である。口縁直径30cmを測り，口縁端部は薄くなって外へ屈曲している。口縁下部に一条の三角突帯が貼り付けられる。白色石粒とサンゴ粒を多く含む砂質土を用い，焼成度はふつうである。表面は磨耗が激しく，調整痕等が不明である。茶褐色を呈す。108は口縁端部にヘラ刻みのあるもので，外面にはヘラにより連続した逆くの字状文がくり返される。その間に１本の曲線がある。内面はナデ仕上げで，暗茶褐色を呈している。茶色粘土・石英などの多い胎土で，焼成度はふつうである。110も口縁下部に三角突帯が貼り付けられる。器面調整は外面が磨耗して不明であるが，内面はナデ整形で，下部はケズリに近い粗い横ナデ整形である。石英やサンゴ粒を多く含む砂質土を用い，茶褐色を呈する。

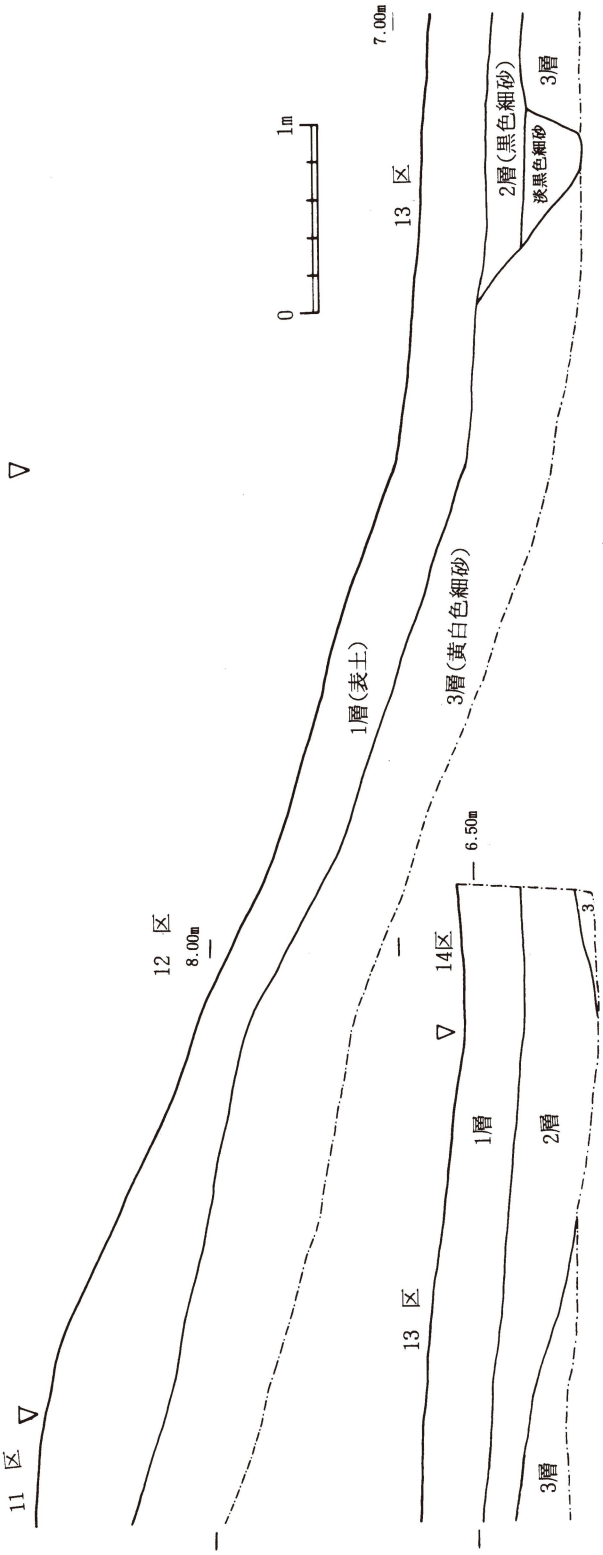
111～118は逆Ｌ字状口縁をもつ甕形土器である。111は口縁直径23cmを測り，口縁下部に三角突帯を貼り付ける。口縁端部に縦方向のきざみが付される。表面整形は磨耗のため不明である。112・114も口縁端部に縦方向のきざみが付される。111～114は表面が磨耗して整形痕跡の不明なものもあるが，ヘラによる横ナデのされたものが多い。焼成度は普通で，茶褐色あるいは明茶褐色を呈する。胎土には石英・白色石粒・角閃石などの砂質土を用いる。



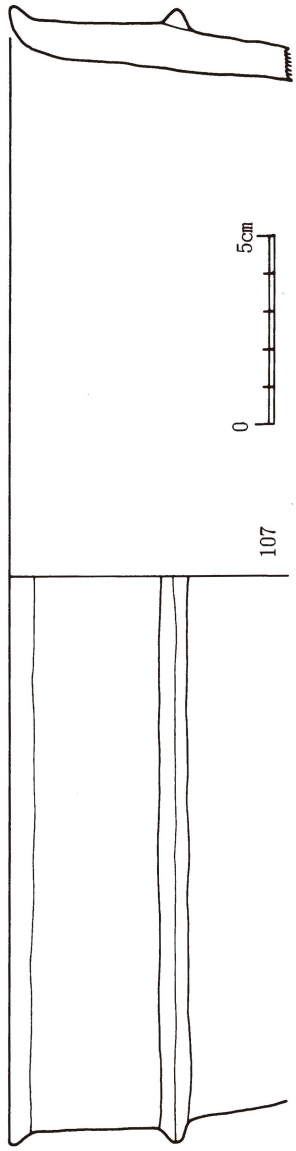
第29図　第５トレンチ８区～11区断面図

115は逆L字状に口縁部が肥厚した甕形土器で，黄白色細砂を多く含む土を使用している。外面はナデ整形で茶褐色を呈している。

116・118は口縁端が肥厚する甕形土器で，118は外面に三角突帯が貼り付けられ，内面には一条の浅い沈



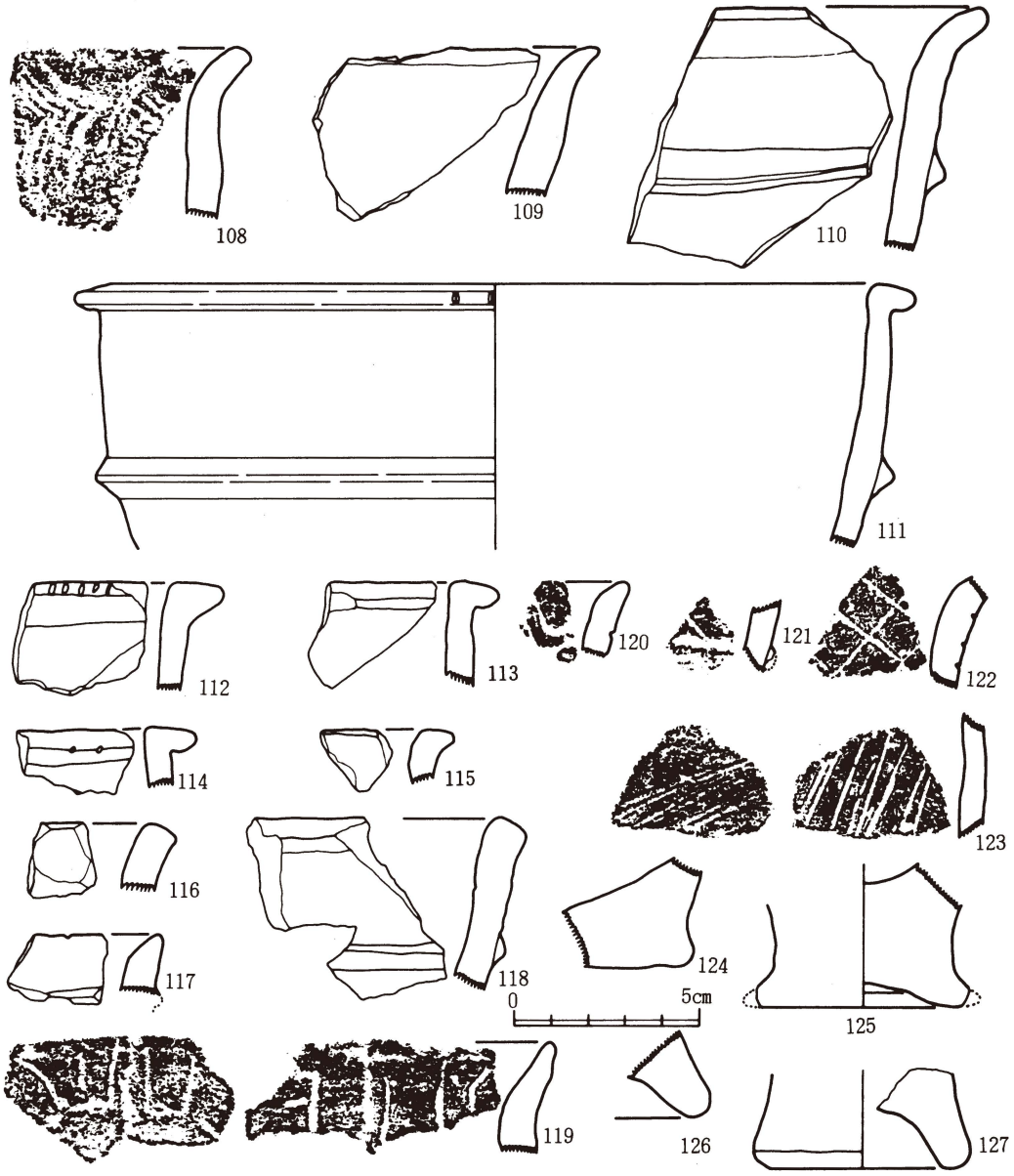
第30図　第5トレンチ11区～14区断面図



第31図 第5トレンチの出土遺物(2)

線がある。116は内外とも横ナデの整形である。石英，白色あるいは茶色の石粒，角閃石などのはいった胎土を用い，茶褐色を呈する。

119～123はヘラ描き凹線のある甕形土器である。119はくの字状口縁となるもので，内面・外面に直線を用いた格子文がみられる。120は外面に波状の沈線文が，121は突帯の上に直線文がある。122は外面に網目文がみられる。これらは石英・白色石粒・黄白色石粒などを含む胎土で，茶褐色あるいは暗茶褐色を呈する。123は外面に斜方向凹線のあるもので，内面はせんい状ハケナデで仕上げる。９区３層から出土したもので，金雲母を多く含む。



第32図　第５トレンチ出土の遺物(3)

124～127は甕形土器の底部である。124は端部がやや外に張り出す平底である。125～127は脚台であるが，125は端部が外へ強く張り出し，浅くくぼんでいる。石英・白色石粒・角閃石の多い土を用いている。

128は面縄前庭式土器の口縁部で，口縁近くに低い突帯が貼り付けられる。この突帯にはヘラ刻みが付けられ，外面にもヘラ描き凹線がみられる。茶褐色を呈し，砂質土を用いる。

129は壺の肩部で，外面に細い沈線が2条巡る。淡茶褐色を呈し，外面はヘラナデである。

130は口縁が内反し，波状を呈する壺形土器で外面に横あるいは波状，斜方向の三角突帯が貼り付けられる。内外ともナデ整形で，焼成度は良い。

131・132は胴部に突帯の貼り付けられる壺形土器で，132は小型の器形である。

133～135は底部で，133・134は平底，135は丸底である。135は黄みがかった色である。

136はやや内反する鉢形土器である。

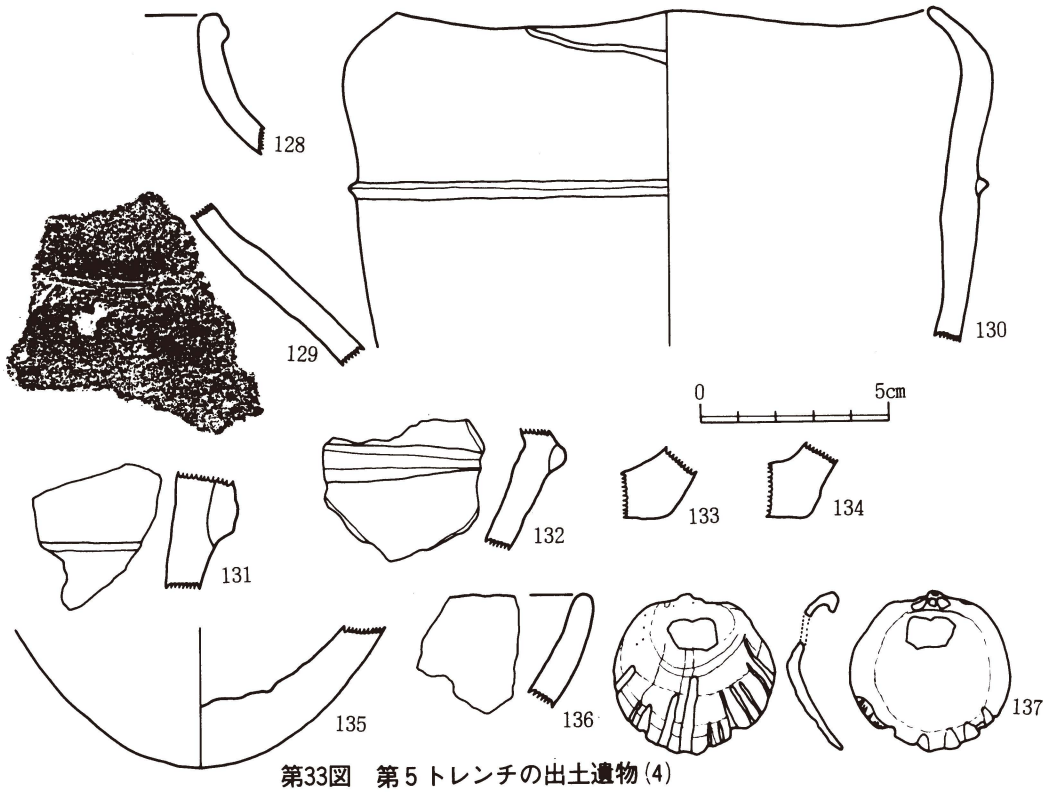
以上のように，ここではⅠ類・Ⅲ類・Ⅴ類・Ⅵ類の土器の他に南九州本土系の土器が出土している。

②貝製品（106・137）

イモ貝の螺塔部に孔をあけたものと，メン貝類に孔をあけたものがある。

1区	137	4区	112・114・116
5区	110・115・117・125・127		
6区	108・111・113・119・126・130・132・135		
7区	118・134・136		
8区	107・109・120～122・124・129・131・133		
9区	123・128	14区	106

第2表　第5トレンチ出土の遺物の出土区



第33図　第5トレンチの出土遺物(4)

第５節　第６トレンチの調査

第６トレンチは，第５トレンチの西約35ｍのソテツ林の中に遊歩道に直交して，2.5ｍ×６ｍと２ｍ×７ｍの２本の南北に長いトレンチを設定し，北より１区，２区と名称した。１区と２区には若干の遺物・層位の違いがあり，１区と２区に分けて記す。

１区

層位

第Ⅰ層　表土（淡黒褐色細砂）で30～40cmの厚さを有している。

第Ⅱ層　黄白色細砂で40～50cmの厚さを有し南側に傾斜している。無遺物層である。

第Ⅲ層　淡黒褐色細砂で40cmの厚さを有し弥生時代の遺物が包含されている。

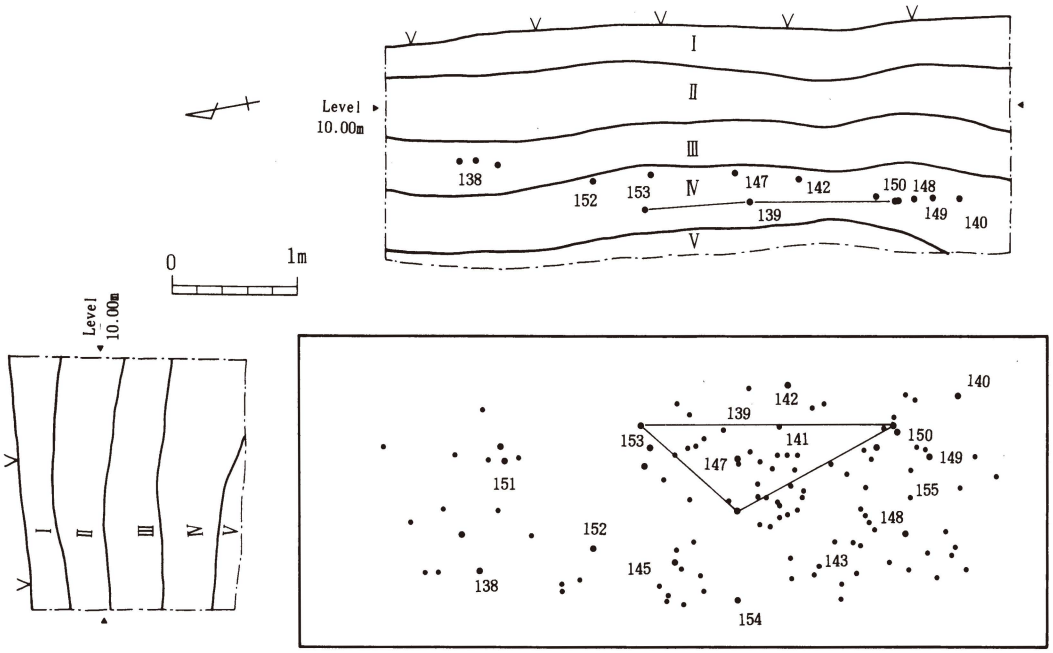
第Ⅳ層　黄灰色細砂で下部は砂粒が密である。上部には弥生時代の遺物が包含されているが下部には，第Ⅱ類土器が出土した。50cmの厚さを有し，東側へ傾斜している。

第Ⅴ層　黄白色砂で砂粒は粗である。無遺物層である。

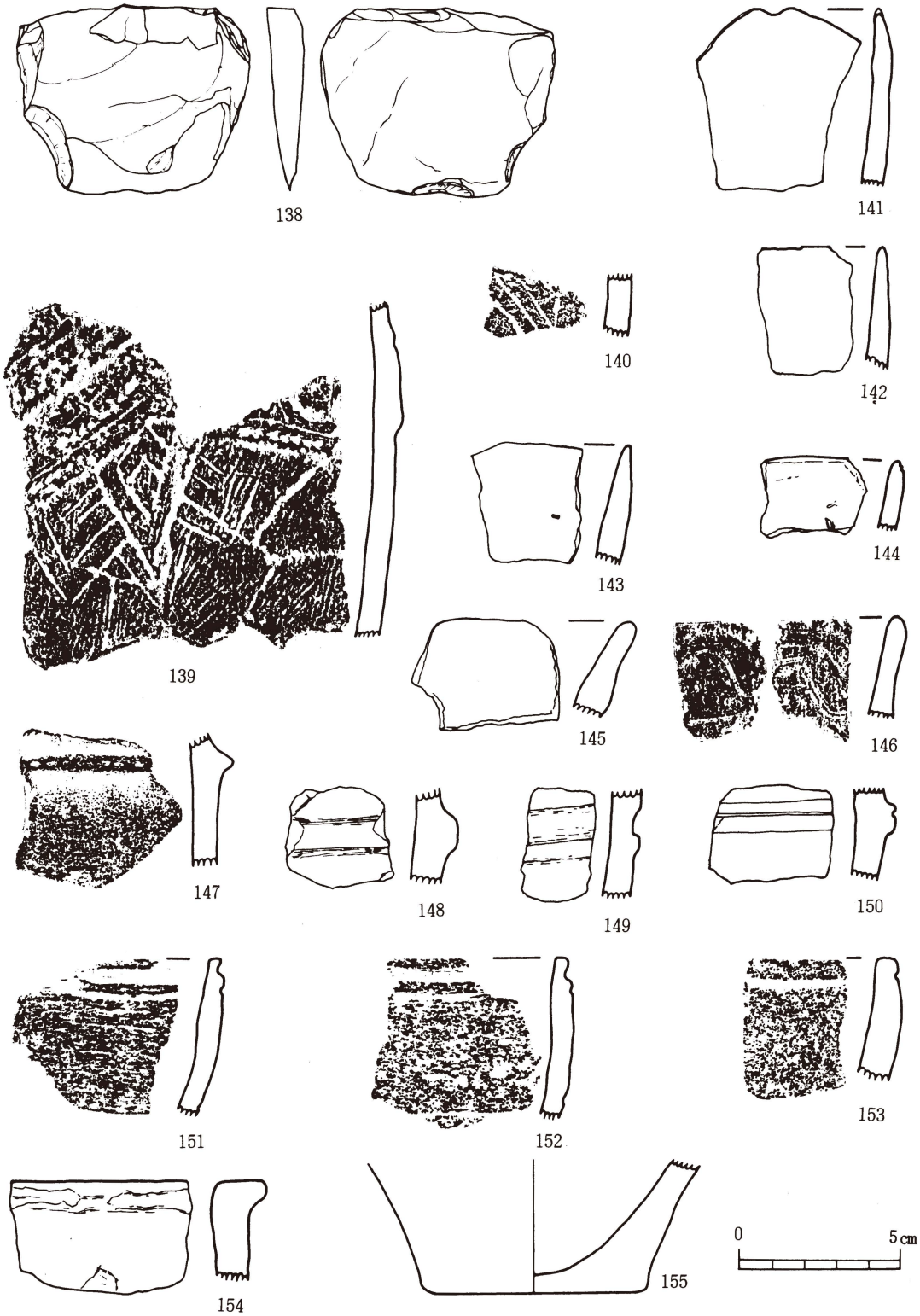
遺物

第６トレンチ１区の出土遺物は総数118点である。第Ⅲ層中より奄美諸島では産出しない黒曜石の破片２点が出土した。

138は粘板岩を石材として用いた石器である。長径7.2cm，短径5.7cm，厚さ1.0cm，重さ62ｇである。扁平な剝片を利用し，一縁辺部を研磨により整正し刃部を形成している。扁平な磨製石器と思われる。139は，第Ⅱ類土器である。第Ⅳ層下部より出土し，３点が接合した。距離は離れるが高低差はなかった。直口する口縁部で，山形隆起部をもつ。口唇部は平坦であり，



第34図　第６トレンチ１区遺物分布図と断面図



第35図　第６トレンチ１区出土遺物

篦による刺突文を連続して施文している。頸部は肥厚し，頸部から口縁にかけて篦描き平行沈線を横位に描き，その間に連続刺突文を施こしている。その下位には，平行沈線が鋸歯状に描かれている。嘉徳ＩＡ式土器と思われる。その分布等については後述する。140は，茶褐色を呈し焼成は普通で石英を含んでいる。ヘラ状の鋭い沈線が斜状に３本走っている。141は，波状口縁で突出部は２ケ所あり直口する。141～143は，ほぼ直口する口縁をもち，茶褐色を呈し胎土は石英・赤粘土を含み細かである。144は，濃茶褐色を呈し，横ナデの胎土に貝粉を混ぜた土器でやや内弯する口縁である。146は，第Ⅵ類の土器で，口唇部に刻目を有し，外面に沈線による曲線文を描くキャリパー形の口縁に特徴づけられる土器である。茶褐色を呈し，雲母石英が含まれている。147は胴部に断面三角形の刻目突帯を貼付したものである。弥生時代前期相当に該当すると思われる。148は貼付突帯で，胎土に赤粘土，石英を含んだ茶褐色を呈する。149は凹線を胴部に施こしてある。150は，貼付突帯の中央に横位に一条の沈線をいれ，突帯を二条にしてある。茶褐色を呈し，石英を含んでいる。151～153は，第Ⅳ類の土器である。茶褐色で石英を含み，やや内弯する口縁をもち，口唇部の外縁に凹線を横位に施し，その直下にやはり横位に篦状で沈線を施す。やや胴部が張り，そこにも沈線を横位に一条描く。154は，第Ⅴ類土器で，石英を含み淡茶褐色を呈するものである。155は，角セン石，石英を含み茶褐色を呈する平底である。張り出しはみられない。

２区

層位

１層　表土（淡黒褐色細砂）である。

２層　黄白色細砂で40cmの厚さを有しているが南では削平されている。

３層　淡黒褐色細砂で20～40cmの厚さを有している。基本層位の第Ⅲ層に該当する。

４層　淡黒褐色で砂粒が密である。自然貝と共に第Ⅰ類土器が包含されている。

５層　黄白色細砂である。無遺物であり第Ⅴ層に該当する。

遺物

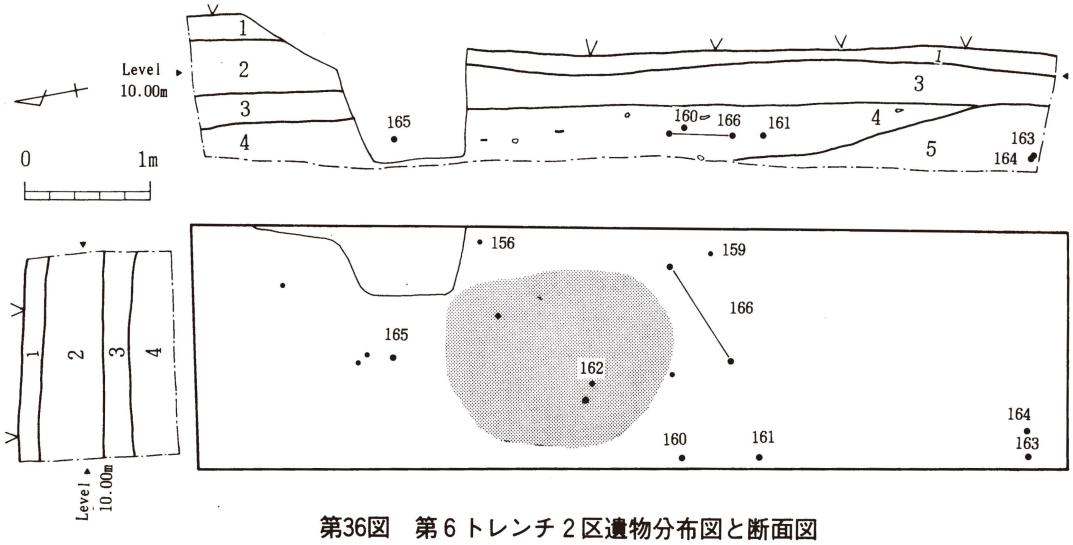
第６トレンチ２区の出土遺物は総数15点である。

156は螺蓋製貝斧であり，数回の打撃により，全周縁の約５分の２に付刃している。長径8.2cm，短径7.3cm，重さ171ｇである。157，158はイモガイの螺塔部を横位に切断し，研磨によって整形し，中央部に孔を穿っている貝玉である。用途としては全体の研磨等より装飾品と考えられる。４層から出土し，第Ⅰ類土器と共伴している。157は，0.5cmの孔を穿ち，長径2.2cm，短径2.0cm，重さ4.5ｇである。158は，0.6cmの孔を穿ち，長径1.9cm，短径1.7cm，重さ3.0ｇである。159は，棒状の貝製品で，一見のみ状石斧に形態的類似するものである。先端部は，片面よりの研磨により刃部を付している。刃縁部には使用痕と思われる刃こぼれがみられる。稜が７あり研磨面には粗い擦痕が図のように走っている。基部には横に穿孔をした痕跡がある。欠損してはいるが研磨面が横位に走っていることから，完形に近い長さである。貝種名は，全

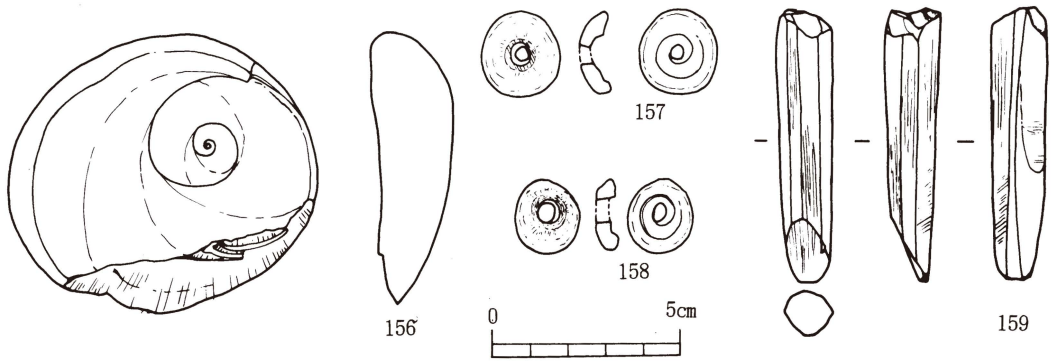
体を研磨している為，定かではないがゴボウラの外唇部を使用すると製作が可能と思われる。長さ7.2cm，幅1.4cm，重さ22.5gである。

160～166は第Ⅰ類土器である。頸部がしまり，口縁部がやや外反した丸底の土器である。口縁部と肩部に突帯を貼付し，底部まで沈線を施している。器壁は比較的薄く，濃茶褐色を呈している。165は無文であるが焼成等より第Ⅱ類土器の底部付近と思われる。面縄前庭式土器である。面縄前庭式土器は，面縄西洞式土器の後に編年されていたが，1982年～1983年にかけての鹿児島大学と沖縄国際大学の合同調査で行われた神野貝塚において，嘉徳Ⅰ式土器の下層，室川下層式土器の上層より出土していること①から，現在の編年より古くなる可能性がある。

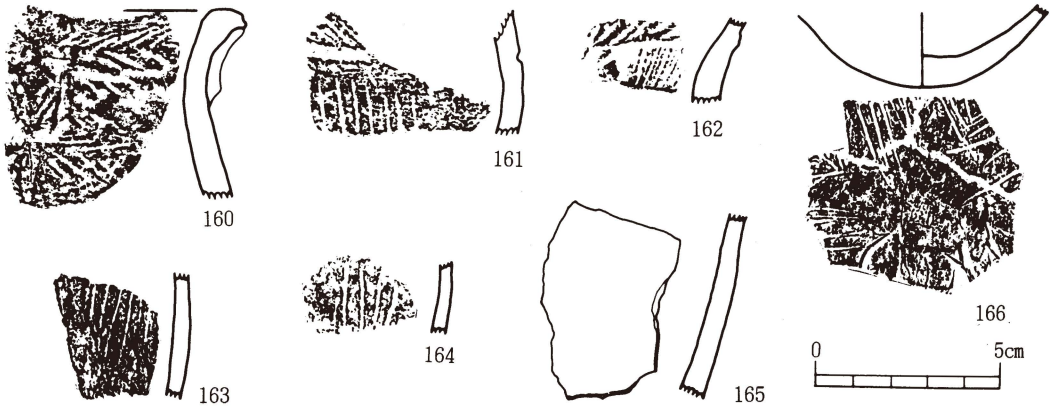
①鹿児島大学上村俊雄助教授教示による。



第36図　第6トレンチ2区遺物分布図と断面図



第37図　第6トレンチ2区出土貝製品



第38図　第６トレンチ２区出土土器

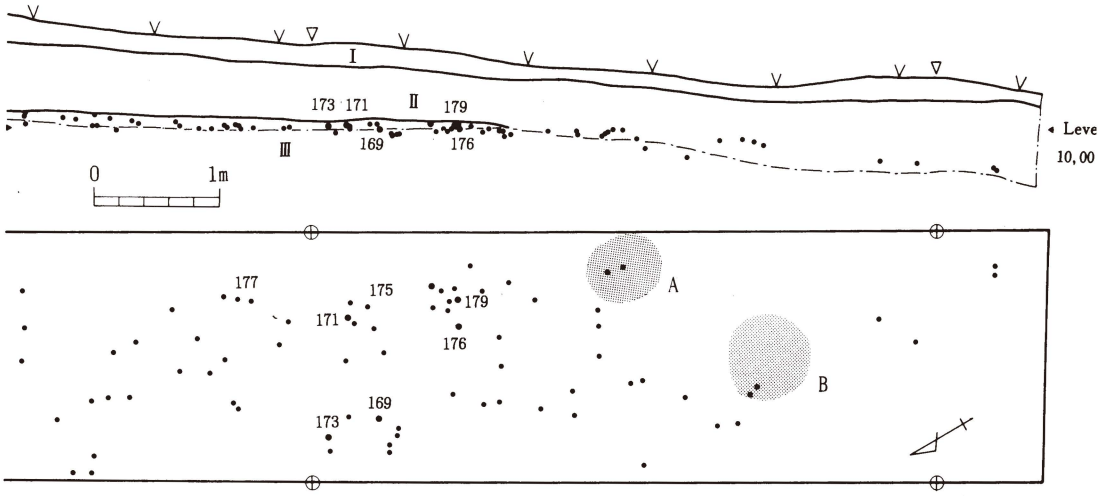
第６節　第７トレンチの調査

第７トレンチは，第６トレンチの北側約65ｍの遊歩道間に南北に長い２ｍ×13ｍのトレンチを設定し，北より５ｍ間隔で区割し，１～３区と名称した。尚，第７トレンチは，確認調査の性格上第Ⅲ層で遺物の有無を確認した時点で調査を終了した。

第Ⅰ層　表土（淡黒褐色細砂）で10～30㎝の厚さを有し南側へ傾斜している。

第Ⅱ層　黄白色細砂で約30～60㎝の厚さを有しやはり南へ傾斜している。

第Ⅲ層　淡黒褐色細砂で弥生時代相当の遺物包含層である。

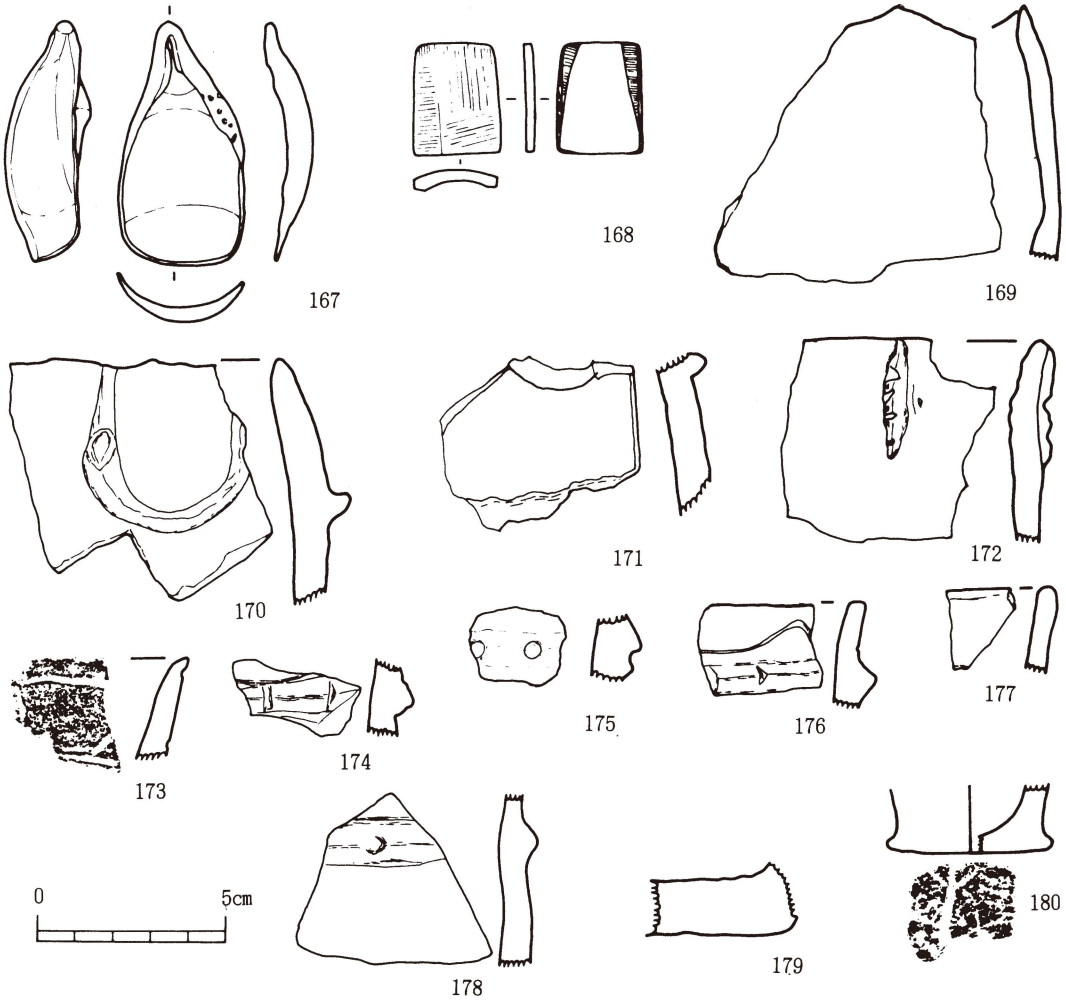


第39図　第７トレンチ遺物分布図と断面図

遺物

第7トレンチの出土遺物は総数80点である。

167は，貝匙である。タカラガイの腹部を取り入れて匙状にしたもので，器面はなめらかで，貝厚は平均化し完成品である。2区Ⅲ層の出土で，長径6.4cm，短径3.4cm，重さ20.7gである。168はイモガイの体層部を方形状に切り取り，研磨を施こしてある。全体に研磨時の擦痕がみられる。長径3.0cm，短径2.3cm，厚さ0.3cm，重さ5.7gで2区の貝枠片の集中Ⓐから出土した。貝札であるが，線刻等はみられず，広田遺跡①，喜念貝塚②出土の貝札に類似するが小型である。169は，淡茶褐色を呈し，胎土は細かで焼成もよく，雲母，貝粉を含んでいる。第Ⅶ類である。



第40図　第7トレンチ出土遺物

170，171は，外耳土器である。いずれも第Ⅲ層出土で，口縁部に開口する半円形をなす外耳を有す。胴部が著しく張り出して最大径が口縁部の径を越えるものである。外耳は断面三角形であり，刺突文がある。胎土は粒子が細かで，焼成は良く，濃茶褐色ないし茶褐色を呈し，裏面には縦，横にヘラナデされている。胎土に貝粉を混ぜてある。別掲に詳細は記載されているが大島本島では類例は少く，発掘資料としては，半円形の向きが逆であるがサウチ遺跡③のものに類似している。サウチ遺跡では弥生時代中期中葉に位置づけられている。172は，やや外反する口縁をもつ甕で，口縁と直行する刻目のある外耳をもつものである。粒子は細かで焼成はよく，胎土に雲母，角セン石がみられる。173は，第Ⅵ類の土器で沈線文様がみられる。175，178は，貼付突帯に連点文を施こしてある土器片である。胎土は，石英，貝粉が多く混入されて色調は茶褐色を呈す。やはり第Ⅵ類に分類される。174，176は第Ⅶ類に分類されるものである。頸部から口縁部へ移行する位置に断面の三角形の刻目を有する突帯を一条めぐらす。突帯の上部には，一条の鋸歯文をめぐらしている。胎土は細かで焼成は良く，石英，貝粉を混入している。179は，平底である。木の葉文様がわずかに見える。180は，木の葉圧痕文を有する張り出しのある平底である。奄美の土器では，土器の製作に木の葉を敷く方法は，兼久式土器に限られ，これらの底部は兼久式土器と思われる。

①国分直一，盛園尚孝「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」『考古学雑誌』第43巻３号　1958
②伊仙町喜念浜の折田三郎氏が以前喜念貝塚で採集されたものを見せてもらった。
③河口貞徳，出口浩，本田道輝『サウチ遺跡』笠利町教育委員会　1978

第７節　第８トレンチの調査

第８トレンチは，第７トレンチの西約20ｍのソテツ林の中に，東西に長い２ｍ×13ｍのトレンチを設定し，東より１～３区と名称した。

層位

第Ⅰ層　表土（淡黒褐色細砂）で10～20cmの厚さを有している。
第Ⅱ層　削平され検出されなかった。
第Ⅲ層　淡黒褐色細砂で約30～40cmの厚さを有している。
第Ⅳ層　黄灰色細砂で砂粒が密である。上部に遺物が出土する。

遺物は，総数42点出土した。181は，螺蓋製貝斧である。夜光貝の蓋の薄い縁部を数回の打撃によって全周縁の約５分の３に付刃している。長径8.1cm，短径7.0cm，重さ163.5ｇである。螺蓋製貝斧は三島格氏の提案①された名称を使用した。

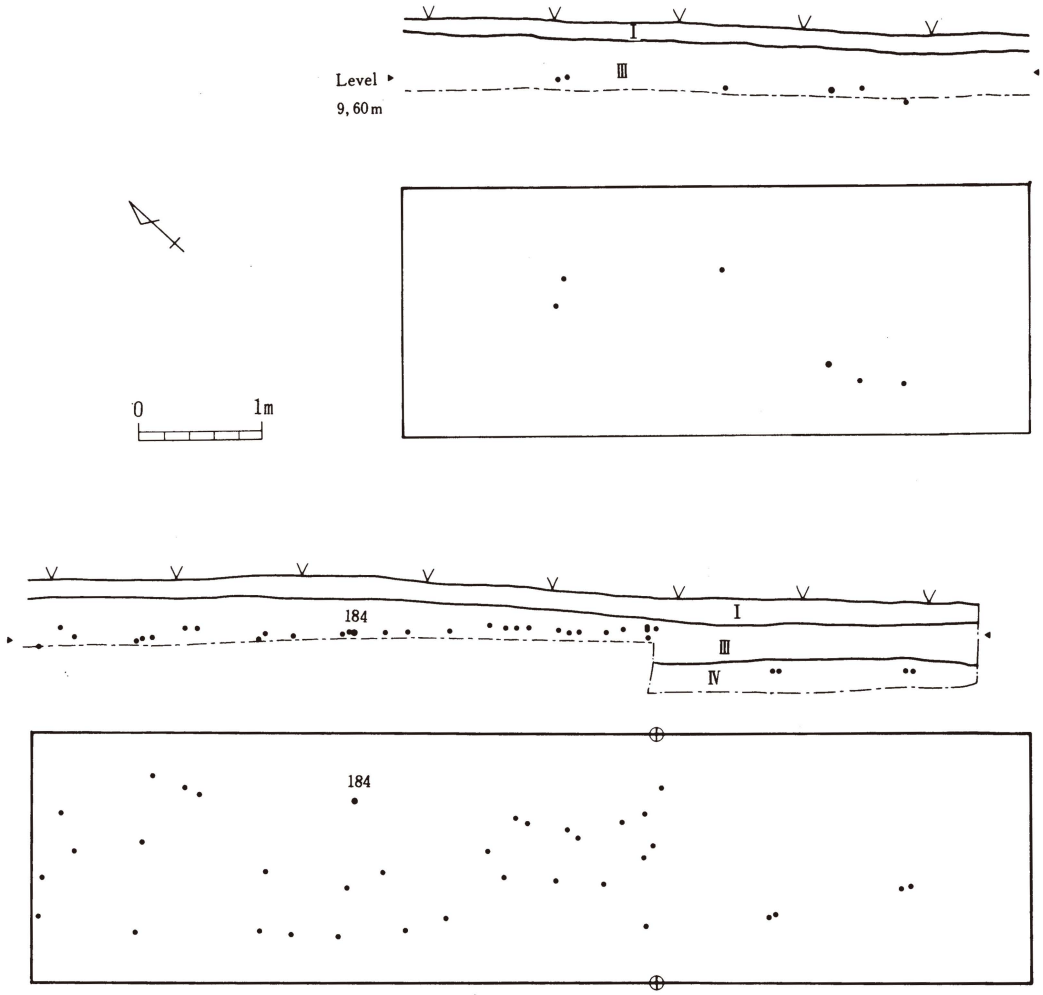
182，183は第Ⅴ類である。口縁部は逆Ｌ字状に屈曲し，厚い口唇部をもつものである。胎土は，石英，赤粘土を含み，濃茶褐色を呈している。裏面は茶褐色で横ヘラナデである。184は，中空の脚台である。色調は赤褐色を呈し，胎土は，石英，砂粒を含み底部は厚くなっている。２区，第Ⅲ層の出土である。185は，底が充実した底部で，端部が丸味を帯びた小さい平底であり，色調は赤褐色を呈し，胎土は石英を含んだ細かなもので焼成は良い。表層である。

第8トレンチは，第Ⅱ層が削平されていて，表土から浅く細片が多かった。第Ⅳ層上部の遺物と第Ⅲ層の遺物は細片であるが変化はみられなかった。

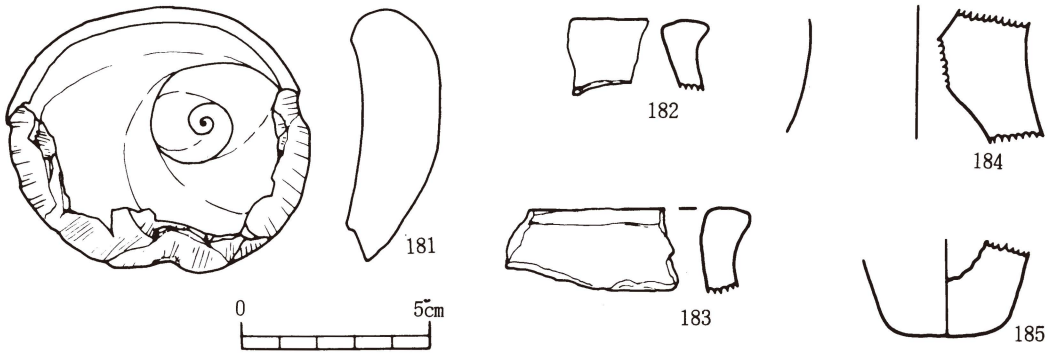
①三島格「螺蓋製貝斧」『賀川光夫先生還暦記念論集』　1982

第8節　第9トレンチの調査

第9トレンチは，第8トレンチの西約30mの遊歩道に南北に長い2m×15mのトレンチを設定し，北より1～3区と名称した。



第41図　第8トレンチ遺物分布図と断面図



第42図　第８トレンチ出土遺物

層位

１層　表土（淡黒褐色細砂）で南へ傾斜している。

２層　黄白色細砂で50～100cmの厚さを有し，やはり南へ傾斜している。無遺物層である。

３層　淡黒褐色細砂で20～30cmの厚さを有している。遺物包含層である。

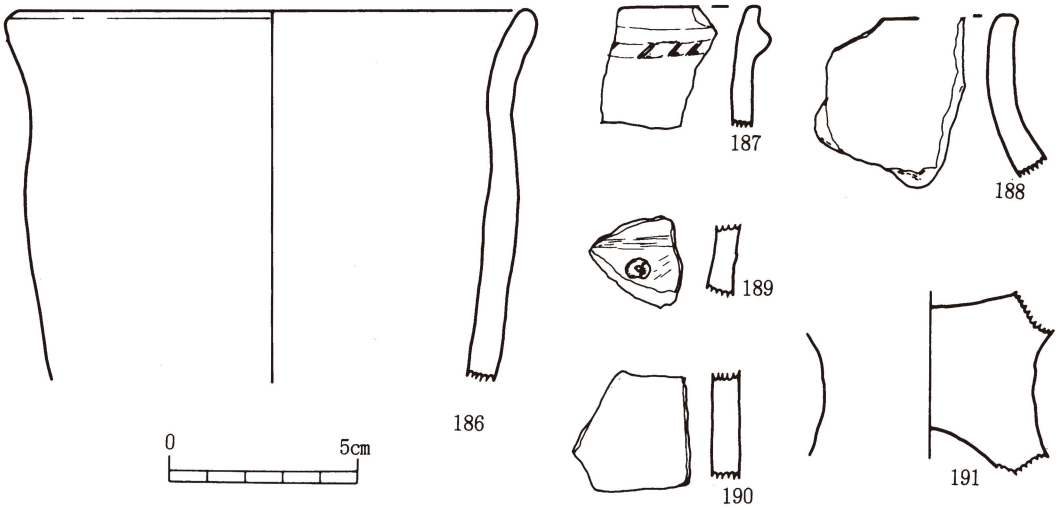
４層　黄白色細砂である。基準層位の第Ⅳ層に該当する。

５層　淡黒褐色細砂である。遺物は出土しなかったが一番類似するのは，第６トレンチ２区の第４層がある。

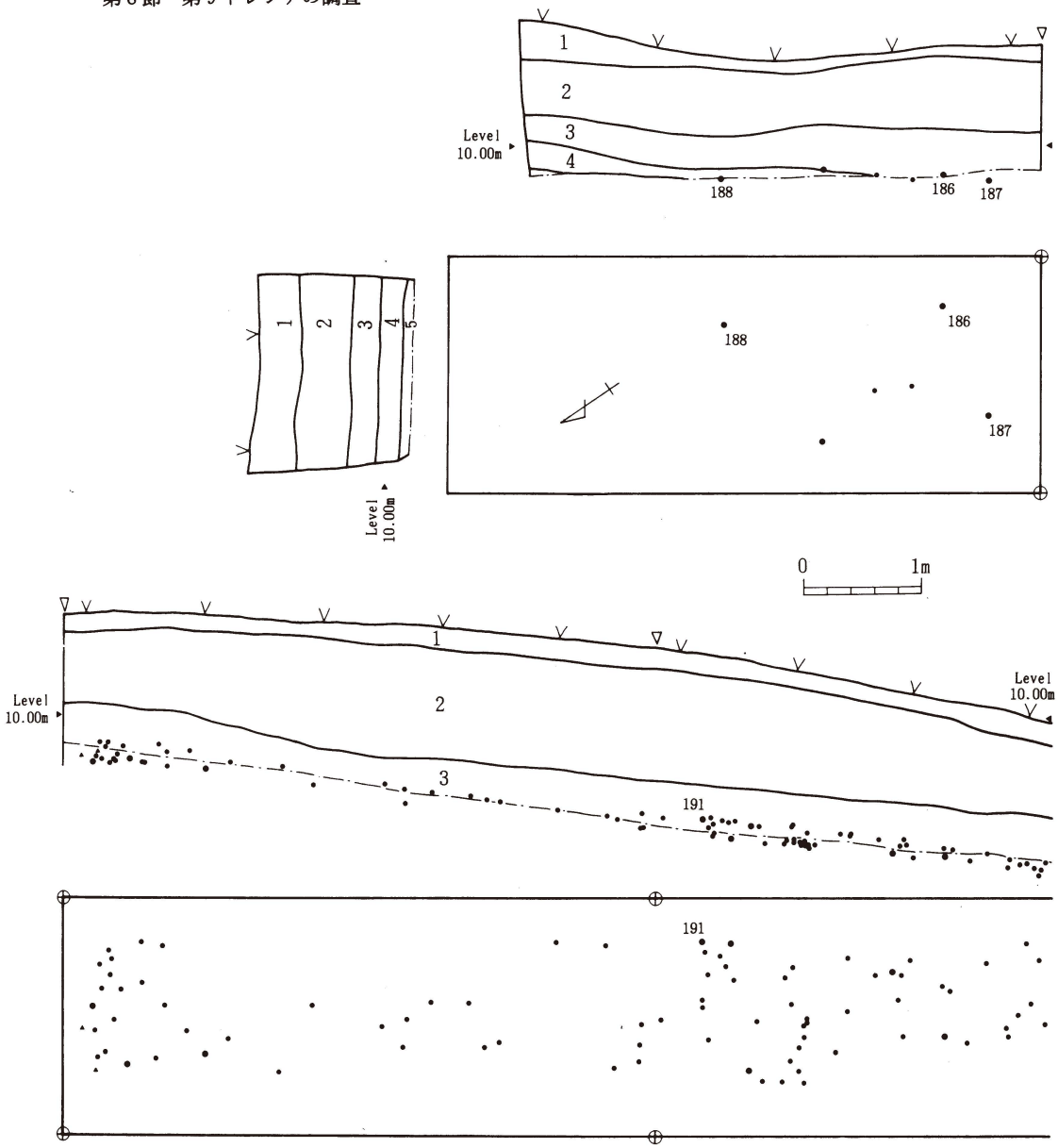
遺物

遺物は，総数104点出土した。

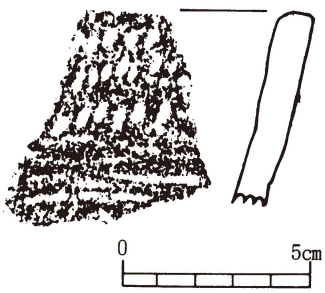
186，188は，第Ⅶ類の土器である。わずかに張った胴部から口縁部へやや外反した，甕形土器である。187も第Ⅶ類の土器で，刻目突帯を貼付したものであるが，沈線文様はみられず突帯も口縁部の上位にある。189は，第Ⅵ類で，竹管による刺突文を施し，浅い条痕がみられる。190は，須恵器である。出土層位は表層と思われる。土層断面の清掃終了後，表層，第Ⅱ層のくずれ落ちたところより出土した。第Ⅲ層と間層があり，第Ⅶ類との間には時間差があるものと思われる。191は，中空の脚台である。底部は厚く胎土は石英，砂粒を含んでいる。指圧痕もみられる。



第43図　第９トレンチ出土土器



第44図　第９トレンチ遺物分布図と断面図



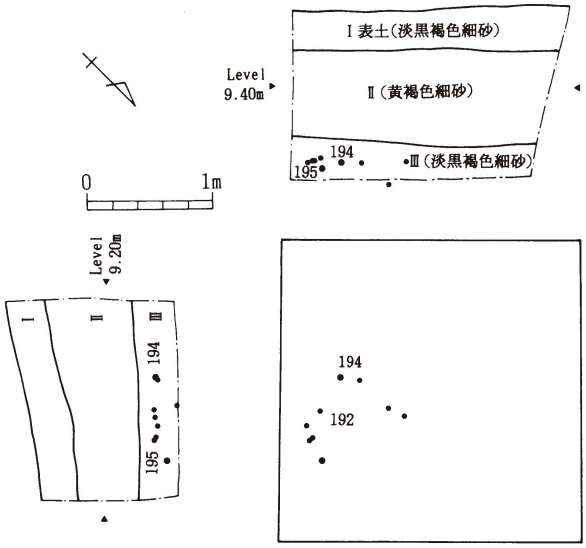
第45図　周辺採集の土器

周辺採集の土器

第45図は、第９トレンチの北側，あやまる第２貝塚の北端にあたる，雨期のみ水の流れる川の河口で表採したものである。口縁は外反し，キャリパー状になる。爪形文を三条施し，その下部には条痕を横位に施こしてある。川の上流より流されたものとみなされ，砂丘地帯だけでなく，古砂丘の内陸部にも遺跡のある可能性が強い。

第９節　第10トレンチ～第13トレンチの調査

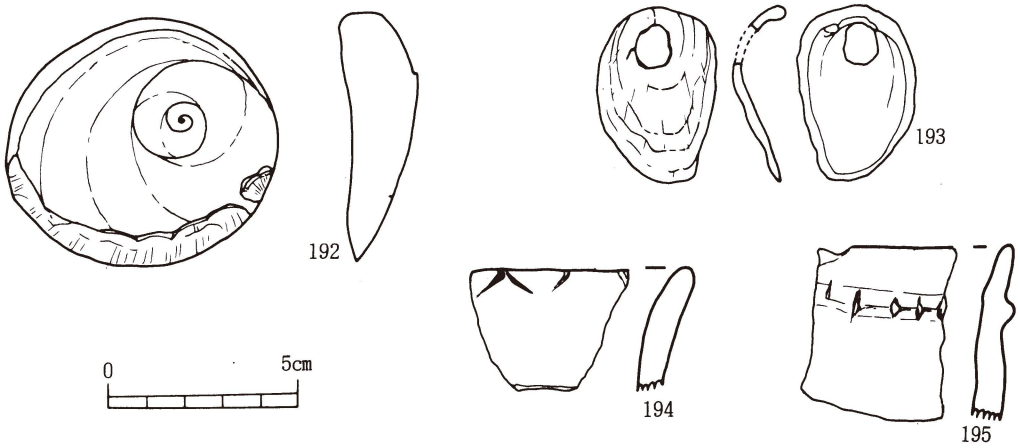
第10トレンチは，第７トレンチの東約25ｍの遊歩道に囲まれたソテツ林の中にあり，南北に長い２ｍ×５ｍのトレンチを設定し掘り下げたが第Ⅱ層の黄灰色細砂が厚く３ｍ程掘り下げたが，第Ⅲ層の淡黒褐色細砂は確認出来なかった。そのため遊歩道をはさみ15ｍ南に２ｍ×1.5ｍのトレンチを設定し，第11トレンチと名称した。第12トレンチは，遺跡のほぼ中央にある以前海へ出る道として利用していたくびれ部の降り口付近に遊歩道に平行して２ｍ×15ｍのトレンチを設定し掘り下げた結果第Ⅲ層の淡黒褐色細砂が深さ３ｍで確認された。そこで，第12トレンチは終了し遊歩道の北側のくぼち部に南北に長い２ｍ×５ｍのトレンチを設定し第13トレンチと名称した。



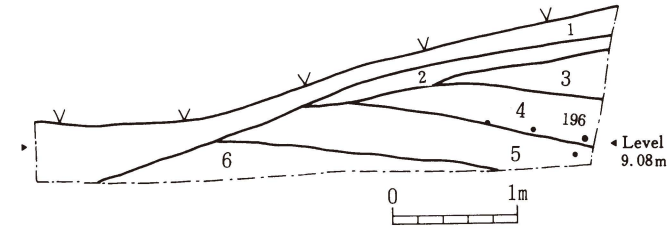
第46図　第11トレンチ遺物分布図と断面図

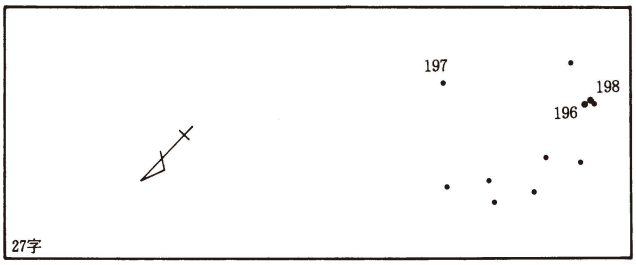
第11トレンチ

第Ⅰ層　表土は淡黒褐色細砂で東へ傾斜している。第Ⅱ層は黄褐色細砂で70～80cmの厚さを有している。第Ⅲ層は淡黒褐色細砂で遺物は全てこの層に包含されていた。遺物は総数８点である。192は，螺蓋製貝斧であり，数回の打撃により全周縁の約$\frac{1}{2}$に付刃している。長径7.2cm，短径6.5cm，重さ106ｇである。193はメンガイを利用した有孔貝製品で，メンガイの殻頂近くに，１cm内外の粗孔を有するもので，他に加工痕は認められない。長径4.6cm，短径3.1cm，重さ8.2ｇである。194は，外反する口縁をもち，口唇部外縁に刻目を施している。第Ⅵ類である。195は，第Ⅶ類であり，やや外反する口縁をもち，刻目突帯を貼付している。裏面には指圧痕がみられる。



第47図　第11トレンチ出土遺物





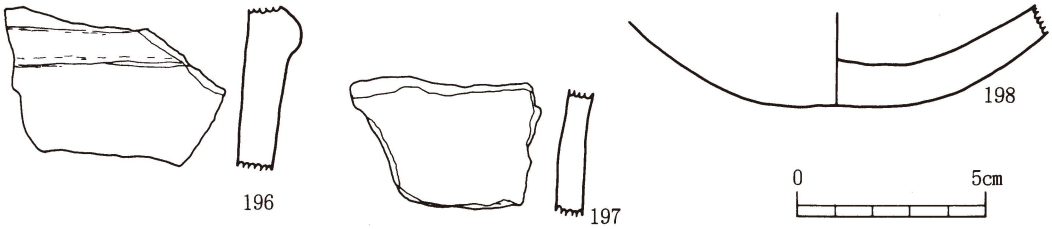
第48図　第13トレンチ遺物分布図と断面図

第13トレンチ

第13トレンチは，以前，海へ行く道として利用されていた場所であり，第Ⅱ層の堆積状態が薄いだろうとの予想のもとにトレンチを設定した。その結果，北側では表土の削除後すぐ下層が検出され断面観察がよく出来た。

層位

くぼち部にトレンチを設定したため北側には層位はみられなく，全体的に南西部へ傾斜している。



第49図　第13トレンチ出土土器

1層　表土（淡黒褐色細砂）で北東部へ傾斜している。

2層　黄灰色細砂で10～20cmの厚さを有し北東部へ傾斜している。くぼちが出来た時点での表層であろう。

3層　黄白色細砂で約40cmの厚さを有し，標準層位の第Ⅱ層に該当する。

4層　淡黒褐色細砂で包含層である。30～40cmの厚さを有する。

5層　黄灰色細砂で砂粒が密である。上部には遺物が出土する。第Ⅳ層に該当する。

6層　黄白色細砂である。無遺物層である。

遺物

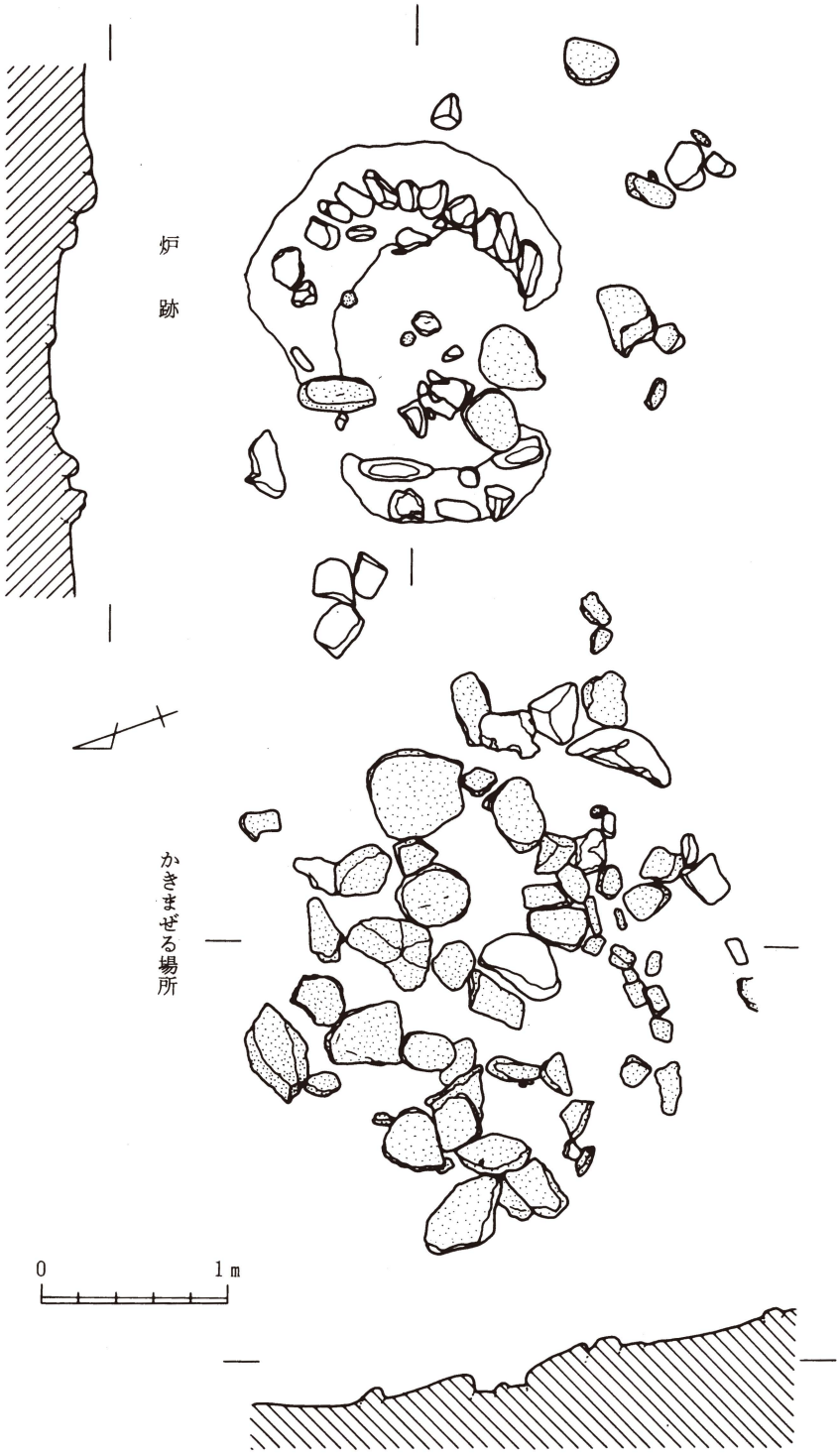
第13トレンチの出土遺物は総数12点である。

196は，胴部に貼付突帯を施した土器で，胎土は細かく焼成は良い。雲母，石英，赤粘土を含み，外面は茶褐色であるが内面は黒褐色である。197は赤褐色を呈し，外内面ともハケナデである。198は，平底であり，淡褐色を呈し，胎土は角セン石，石英を含み焼成は普通である。一部にはスス痕もみられる。

第10節　サタヤドリ（黒糖製造跡）

奄美大島においてサトウキビは二大産業のひとつになっており，その歴史は江戸時代に始まっているとされる。奄美各地にはいく人かのグループ，あるいは地域ぐるみでこのような“サタヤドリ”を所有し，昭和の初期まで使用されていたとされる。しかし現在ではそのほとんどが記録されぬまま姿を消してしまった。その意味では唯一の資料となる。民俗学の資料の一助にでもなれば幸いである。

本遺跡から炉跡１基の出土である。



第50図　サタヤドリ

第５章　自 然 貝

本貝塚出土の自然貝類の内訳，出土状況等については，第３～６表に示したとおりで，各トレンチ，各区，各層ごとに集計した。個体数の算出は，巻貝は螺塔部の確認出来るものを１個体とし，二枚貝は殻頂部を有し，左右の数量の多い方を個体数とした。

貝の鑑定については，鹿児島大学水産学部　平田国雄名誉教授にお願いした。尚，科名分類は，吉良哲明著『原色日本貝類図鑑』，波部忠重著『続原色日本貝類図鑑』保育社，1982年を参考にし，平田国雄教授に指導をうけた。

その結果，46科83種の貝が認められ，その内訳は，陸産貝３科３種，海産貝43科80種である。それらを棲息地別に出土頻度を示したのが，第７表である。

ここでは，それらの表の分析結果について簡単に述べる。各区，各層の時代的背景等については先述したとおりで，本項では省略する。

各区での出土量の相違は，発掘面積等の関係の他，確認調査の性格上，遺物取り上げ後，貝の分布を遺構とみなしそのまま埋め戻したものもあり，一概に時期差等云々といえない。

各区とも海産貝が圧倒的であり，陸産貝のヤマタニシ，ウスカワマイマイ，キセルガイ等は，食料残滓なのか，ちりだめに集まった生貝の遺骸なのか不明である。

第２トレンチでは，第３層，第４層とも大きな差はないが，第５層において，ウスカワマイマイ，イソハマグリ，イシダタミ，アマオブネの出土量が極端に多くなってきている。これは，第５層において，イソハマグリ，イシダタミ，アマオブネの小貝の集中部が４個所みられることによる現象と思われる。第６層は個体数は少くなるが，斧足綱（二枚貝）のリュウキュウマスオガイが多くなり，マガキガイが第３，４層と同率を占めるようになる。

第６トレンチで，第Ⅲ層と第Ⅳ層を比較すると，各時期においては大きな差が見られず，また，同時期においても大差はないが，わずか５ｍ程離れた地点で出土に差異がみられた。１区では，マガキガイが多くなり，２区で出土するホソスイジナミガイ，アマオブネは少くなっている。

第７トレンチ～第13トレンチは，個体数によって変化は認められるが，大局的に相違はみられない。シラクモガイ，マガキガイを多く食していたようである。

これら貝類の構成については，各区（各時期）ともそれほど大きな相違はみられない。このことは，現在の海の状況との関係でも考えられることで，これらの貝はあやまる第２貝塚の前の海で容易に採れるものがほとんどである。ここ，3000年程は，環境の変化がなかったことがうかがえる。小さい貝の類（イソハマグリ，アマオブネ等）が大量に出土する地点が，これは食料残滓の破棄個所（砕片等の集中個所）の調査例であり，その意味では，遺跡全体から考えると現在の貝とほとんど同様のものが採集されている。

尚，第３～６表の整理番号と第７表の番号は同じである。

第3表　貝類遺存体集計表（その1）

2トレンチ

番号	科目	種目	3層 個数	3層 重量	4層 個数	4層 重量	5層 個数	5層 重量	6層 個数	6層 重量	小計 個数	小計 重量
	陸産貝											
1	やまたにし	ヤマタニシ			7	6	12	7.7	2	1.7	21	154
2	おなじまいまい	ウスカワマイマイ					71	33.8	12	8.5	83	42.3
3	きせるがい	キセルガイ					2	( )			2	( )
	小計				7		85		14		106	
	海産貝											
	A．潮間帯砂地砂泥地											
4	まるすだれ	ヌノメガイ										
5		アラヌノメガイ			1	215.5					1	215.5
6		ヨロイガイ？										
7		ホソスイジナミガイ										
8	ざるがい	カワラガイ										
9	ちどりますお	イソハマグリ	4	8.5	31	294.6	86	215.5			121	518.6
10	りゅうきゅうますお	リュウキュウマスオガイ	1	3.5			1	( )	6	59	8	(62.5)
11	たまがい	リスガイ					13	6			13	6
12	にっこうがい	サメザラ										
13	ばかがい	リュウキュウバカガイ			1	15					1	15
	小計		5		33		100		6		144	
	B．潮間帯岩場											
14	みみがい	ヒラアナゴ										
15	ゆきのかさ	リュウキュウウノアシ										
16		カサガイ	2	3.7	1	3					3	6.7
17	つたのはがい	トラフザラ(オオベッコウカサ)										
18	にしきうず	イシダタミ	1	3.5	4	5	31	12.8			36	21.3
19	あまおぶね	マルアマオブネ					57	14.6			60	17.6
20		アマオブネ	6	6.2	3	3	62	132.5			68	138.7
21		ニシキアマオブネ										
22	りゅうてん	カンギク										
23		コシダカサザエ										
24	あっきがい	ガンセキボラ			2	79.2					2	79.2
25		シラクモガイ	2	35.2			2	114	2	141	6	290.2
26		ツノレイシ	1	20	25	410.4	8	113.7	1	( )	35	(544.1)
27		ツノテツレイシ										
28		テツレイシ			1	11	2	16.7			3	27.7
29		ヒメヨウラク					3	1			3	1
30		アカイガレイシ			5	63.2					5	63.2
31		ムラサキイガレイシ			13	208.9	2	42	2	( )	17	(250.9)
32	おにこぶし	コオニコブシ	4	100.5	43	1122.4	6	248.2	2	38	55	1509.1
33	ふねがい	エガイ										
34		カリガネエガイ			1	5	1	9			2	14
35		ベニエガイ										
36	きくざるがい	カネツケザル										
37	おにのつのがい	コオニノツノガイ					5	0.2			5	0.2
38	えぞばい	シマベッコウバイ					4	2			4	2
39	とまやがい	クロフトマヤ										
40	からまつがい	コウダカカラマツ	1	( )			2	3.2			3	(3.2)
41	たまきび	ホソスジウズラタマキビ					2	0.4			2	0.4
42		タマキビ					3	0.2			3	0.2
43		コウダカタマキビ					1	( )			1	( )
44	うみにな	イボウミニナ			2	21.7	10	6.1			12	27.8

4トレンチ

番号	科目	種目	0・1区 3層 個数	0・1区 3層 重量	2区 3層 個数	2区 3層 重量	3区 表層 個数	3区 表層 重量	3区 3層 個数	3区 3層 重量	小計 個数	小計 重量
	陸産貝											
1	やまたにし	ヤマタニシ	1	0.5	10	13					11	13.5
2	おなじまいまい	ウスカワマイマイ	1	0.2	23	28.4	1	0.2			25	28.8
3	きせるがい	キセルガイ										
	小計		2		33		1				36	
	海産貝											
	A．潮間帯砂地砂泥地											
4	まるすだれ	ヌノメガイ										
5		アラヌノメガイ										
6		ヨロイガイ？										
7		ホソスイジナミガイ										
8	ざるがい	カワラガイ					1	16			1	16
9	ちどりますお	イソハマグリ	4	17.7	1	4.7	3	17	1	2.7	9	42.1
10	りゅうきゅうますお	リュウキュウマスオガイ	2	53.2					1	3.2	3	56.4
11	たまがい	リスガイ			1	3.2					1	3.2
12	にっこうがい	サメザラ										
13	ばかがい	リュウキュウバカガイ			1	3.7					1	3.7
	小計		6		3		4		2		15	
	B．潮間帯岩場											
14	みみがい	ヒラアナゴ										
15	ゆきのかさ	リュウキュウウノアシ										
16		カサガイ										
17	つたのはがい	トラフザラ(オオベッコウカサ)										
18	にしきうず	イシダタミ					1	2			1	2
19	あまおぶね	マルアマオブネ	1	24.5	1	2					2	26.5
20		アマオブネ	4	10.5	5	12					9	22.5
21		ニシキアマオブネ										
22	りゅうてん	カンギク										
23		コシダカサザエ							1	2.5	1	2.5
24	あっきがい	ガンセキボラ	2	115.4			1	48			3	163.4
25		シラクモガイ	7	388	5	193.2	2	90	1	77.5	15	748.7
26		ツノレイシ							1	19	1	19
27		ツノテツレイシ										
28		テツレイシ										
29		ヒメヨウラク										
30		アカイガレイシ	6	32	2	43.5					8	75.5
31		ムラサキイガレイシ										
32	おにこぶし	コオニコブシ	3	182	1	31.5					4	213.5
33	ふねがい	エガイ										
34		カリガネエガイ										
35		ベニエガイ										
36	きくざるがい	カネツケザル										
37	おにのつのがい	コオニノツノガイ										
38	えぞばい	シマベッコウバイ										
39	とまやがい	クロフトマヤ			1	( )					1	( )
40	からまつがい	コウダカカラマツ										
41	たまきび	ホソスジウズラタマキビ										
42		タマキビ										
43		コウダカタマキビ										
44	うみにな	イボウミニナ										

5トレンチ（1）

番号	科目	種目	1区 表層 個数	1区 表層 重量	1区 3層 個数	1区 3層 重量	2区 3層 個数	2区 3層 重量	3区 3層 個数	3区 3層 重量	4区 3層 個数	4区 3層 重量	5区 3層 個数	5区 3層 重量	6区 3層 個数	6区 3層 重量	7区 表層 個数	7区 表層 重量	7区 3層 個数	7区 3層 重量
	陸産貝																			
1	やまたにし	ヤマタニシ																	5	4.2
2	おなじまいまい	ウスカワマイマイ			19	17			1	2.9			1	12	16	23.7	1	5.5	20	37.4
3	きせるがい	キセルガイ																		
	小計				19				1				1		16		1		25	
	海産貝																			
	A．潮間帯砂地砂泥地																			
4	まるすだれ	ヌノメガイ																		
5		アラヌノメガイ											1	17						
6		ヨロイガイ？																		
7		ホソスイジナミガイ							1	8.7										
8	ざるがい	カワラガイ																		
9	ちどりますお	イソハマグリ			3	13.5			2	4.7	2	5.7	1	1.7	6	16.7			5	24.5
10	りゅうきゅうますお	リュウキュウマスオガイ			3	58.7	3	43	2	8.7			1	3	5	68	2	20.5	6	69.9
11	たまがい	リスガイ																		
12	にっこうがい	サメザラ																		
13	ばかがい	リュウキュウバカガイ																	1	( )
	小計				6		3		5		2		3		11		2		12	
	B．潮間帯岩場																			
14	みみがい	ヒラアナゴ																		
15	ゆきのかさ	リュウキュウウノアシ																		
16		カサガイ																		
17	つたのはがい	トラフザラ(オオベッコウカサ)													1	( )				
18	にしきうず	イシダタミ													3	4.2			1	2
19	あまおぶね	マルアマオブネ																		
20		アマオブネ			5	12.5			8	30.5	3	10	5	18.5	20	55.9	1	5.5	40	75
21		ニシキアマオブネ											1	5.2						
22	りゅうてん	カンギク			1	2.5														
23		コシダカサザエ																	1	1.5
24	あっきがい	ガンセキボラ					1	44												
25		シラクモガイ	5	297	3	153	7	377.5	4	164	3	87.2	2	165	2	10.2			1	141.7
26		ツノレイシ	1	23.5	1	14	1	28.5							1	9			4	39
27		ツノテツレイシ																		
28		テツレイシ																	1	3.5
29		ヒメヨウラク																	1	0.5
30		アカイガレイシ							1	17.5			1	22	1	17.7			3	89.2
31		ムラサキイガレイシ																		
32	おにこぶし	コオニコブシ	1	48			1	47	2	88										
33	ふねがい	エガイ																		
34		カリガネエガイ													2	4.5			3	8.5
35		ベニエガイ																		
36	きくざるがい	カネツケザル			1	4.7													1	5.5
37	おにのつのがい	コオニノツノガイ																		
38	えぞばい	シマベッコウバイ													1	1			1	2
39	とまやがい	クロフトマヤ																		
40	からまつがい	コウダカカラマツ													1	0.5				
41	たまきび	ホソスジウズラタマキビ																		
42		タマキビ																		
43		コウダカタマキビ																		
44	うみにな	イボウミニナ			1	4.2			4	8.5									2	0.7

5トレンチ（2）

番号	科目	種目	7区 4層 個数	7区 4層 重量	8区 3層 個数	8区 3層 重量	9区 3層 個数	9区 3層 重量	9区 4層 個数	9区 4層 重量	14区 表層 個数	14区 表層 重量	14区 2層 個数	14区 2層 重量	14区 3層 個数	14区 3層 重量	Ⓐ 個数	Ⓐ 重量	Ⓑ 個数	Ⓑ 重量	Ⓒ 個数	Ⓒ 重量	Ⓓ 個数	Ⓓ 重量	Ⓔ 個数	Ⓔ 重量	Ⓕ 個数	Ⓕ 重量	Ⓖ 個数	Ⓖ 重量	小計 個数	小計 重量
	陸産貝																															
1	やまたにし	ヤマタニシ			2	2			1	2									1	0.7	1	2.5			4	3.9	3	1.7			17	17
2	おなじまいまい	ウスカワマイマイ			14	26.2	5	16.7	49	( )	5	12	3	3.5			2	1.5	4	5.7	1	1.5	1	0.2	7	8.5	4	4			153	(167.5)
3	きせるがい	キセルガイ																														
	小計				16		5		50		5		3				2		5		2		1		11		7				170	
	海産貝																															
	A．潮間帯砂地砂泥地																															
4	まるすだれ	ヌノメガイ											1	( )																	1	( )
5		アラヌノメガイ															1	10							2	77					4	104
6		ヨロイガイ？																														
7		ホソスイジナミガイ			2	18	2	10.5																							5	37.2
8	ざるがい	カワラガイ																														
9	ちどりますお	イソハマグリ			7	33.7			1	2	1	4	1	2			8	50.7			3	5.2	1	6	4	5.7	1	3.5			46	179.6
10	りゅうきゅうますお	リュウキュウマスオガイ	1	10	8	95.7	1	12.7	1	27	1	11.7	1	8			2	22	1	13	2	27.2			4	43.2	2	15	10	54	56	611.3
11	たまがい	リスガイ			1	9																	1	1.5	1	3.7	2	5.7			5	19.9
12	にっこうがい	サメザラ																														
13	ばかがい	リュウキュウバカガイ			2	35																									3	(35)
	小計		1		20		3		2		2		3				11		1		5		2		11		5		10		120	
	B．潮間帯岩場																															
14	みみがい	ヒラアナゴ																														
15	ゆきのかさ	リュウキュウウノアシ																														
16		カサガイ							1	1.2			1	1.2											1	4					3	6.4
17	つたのはがい	トラフザラ(オオベッコウカサ)			3	18																									4	(18)
18	にしきうず	イシダタミ			2	1															2	1			1	4	3	2			12	14.2
19	あまおぶね	マルアマオブネ															1	2							1	0.7	1	( )			3	(2.7)
20		アマオブネ	3	5.5	44	129	5	14.5	18	43.5	6	21	5	15.5			2	4.5	1	1.7	12	24	1	1	13	35.9	2	3	2	4	196	511
21		ニシキアマオブネ			1	3.5																									2	8.7
22	りゅうてん	カンギク													1	63.7															2	66.2
23		コシダカサザエ							1	0.7			1	1.5																	3	3.7
24	あっきがい	ガンセキボラ			1	3.7	1	13																	1	27					4	87.7
25		シラクモガイ			8	538	2	60	1	100	5	179.5	1	42.5	2	122.5			1	38	2	88			4	203	2	126	1	22	56	2915.1
26		ツノレイシ			5	37			2	( )			1	11.5													4	60.7			20	(252.2)
27		ツノテツレイシ			1	( )	1	8											1	2											3	(10)
28		テツレイシ			1	9			1	4																					3	16.5
29		ヒメヨウラク																													1	0.5
30		アカイガレイシ	1	53	4	77	1	38.5	2	35.5	3	97.2			1	45							1	52.5	3	72.5	1	68			23	685.6
31		ムラサキイガレイシ																														
32	おにこぶし	コオニコブシ							2	110			1	11											1	40					8	344
33	ふねがい	エガイ																														
34		カリガネエガイ			4	22.7	1	1.5	1	9															1	8.5					12	54.7
35		ベニエガイ																														
36	きくざるがい	カネツケザル																							1	9.7					3	19.9
37	おにのつのがい	コオニノツノガイ																														
38	えぞばい	シマベッコウバイ									1	3.7																			3	6.7
39	とまやがい	クロフトマヤ																														
40	からまつがい	コウダカカラマツ			1	1.2			1	( )											1	1.5									4	(3.2)
41	たまきび	ホソスジウズラタマキビ																														
42		タマキビ																														
43		コウダカタマキビ																														
44	うみにな	イボウミニナ			1	1.2	2	1.5																							10	16.1

第４表　貝類遺存体集計表（その２）

陸産貝			6トレンチ												7トレンチ										8トレンチ																9トレンチ												11トレンチ				13トレンチ			
			1区						2区						1区		2区								1区		2区				3区								1区				2区				3区													
			3層		3層下部		4層		3層		4層		小計		3層		3層		Ⓐ		Ⓑ		小計		表層		3層		表層		3層		表層		3層		4層		小計		表層		3層		4層		3層上部		3層		3層		小計		表層		3層		3層		総計	
番号	科目	種目	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重要	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
1	やまたにし	ヤマタニシ	5	3.5	1	0.7			2	3.5	6	2.2	14	9.9			1	( )					1	( )													3	2.7	3	2.7																					67	(58.5)
2	おなじまいまい	ウスカワマイマイ	6	12.9	8	19.7	1	1.5	27	50	18	23.7	60	107.8			18	13.5			1	3.5	19	17	5	8.5					5	0.5					10	6.5	20	15.5	52	11.5			1	0.5	2	3.5					55	15.5							415	(394.4)
3	きせるがい	キセルガイ																																																											2	( )
小計			11		9		1		29		24		74				19				1		20		5						5						13		23		52				1		2						55								484	
海産貝																																																														
A．潮間帯砂地砂泥地																																																														
4	まるすだれ	ヌノメガイ	1	19.7			2	65					3	84.7																													1	37									1	37							5	121.7
5		アラヌノメガイ					2	( )					2	( )																																																	7	(319.5)
6		ヨロイガイ？													1	5.5							1	5.5																																								1	5.5
7		ホソスイジナミガイ	6	49					20	164	30	251.2	56	464.2																	1	4.5							1	4.5																							62	505.9
8	ざるがい	カワラガイ	1	6.7									1	6.7																													1	15.5									1	15.5							3	38.2
9	ちどりますお	イソハマグリ	8	17.4			4	16	15	58.9	13	64.5	40	156.8	4	11.7	39	135	1	4.7	4	10.5	48	161.9	1	2	3	12			13	64.7					4	9.2	21	87.9	3	5.2	1	2	3	15			5	18.2			12	40.4			1	2.5			298	1,189.8
10	りゅうきゅうますお	リュウキュウマスオガイ	6	66					13	132	23	274.4	42	472.4	2	22	2	30					4	52											1	7	1	5	2	12					1	14.5			5	99.5	1	20	7	134					4	45	126	(1,445.6)
11	たまがい	リスガイ									2	3.7	2	3.7			1	1.2					1	1.2	1	2					1	1							2	3											1	9	1	9	1	2	1	21			27	69.0
12	にっとうがい	サメザラ					1	4			1	15.5	2	19.5																																																1	9	3	28.5
13	ばかがい	リュウキュウバカガイ									1	2.5	1	2.5																																			1	77			1	77							7	(133.2)
小計			22				9		48		70		149		7		42		1		4		54		2		3				15				1		5		26		3		3		4				11		2		23		1		2		5		539	
B．潮間帯岩場																																																														
14	みみがい	ヒラアナゴ	1	21					2	1.5	4	41.2	7	63.7																																																7	63.7
15	ゆきのかさ	リュウキュウウノアシ					1	1.7					1	1.7			1	1.7					1	1.7																																							2	3.4
16		カサガイ									10	14.1	10	14.1	1	1.5							1	1.5																																							17	28.7
17	つたのはがい	トラフザラ(ホオベニコウカガ)							5	4			5	4																																			1	22			1	22							10	(44.0)
18	にしきうず	イシダタミ	2	1.7			5	5.2	5	9	9	15.2	21	31.1	1	4	2	2.5					3	6.5	1	1	1	4.5			2	2.2					2	4.5	6	12.2	1	1.2									1	( )	2	(1.2)	2	3	2	1			85	(92.5)
19	あまおぶね	マルアマオブネ	1	1.2									1	1.2			3	0.7			1	1	4	1.7													1	2	1	2																							71	(51.7)
20		アマオブネ	13	37.4	10	23	2	6	60	176	77	184.2	162	426.6			22	174					22	174	1	15					4	6					8	16.7	13	24.2	1	1	1	4	1	2.5	1	3.5	4	6			8	17	1	2.5	2	3.5			481	1,320.0
21		ニシキアマオブネ																																																													2	8.7
22	りゅうてん	カンギク							3	4	1	1	4	5																																																	6	71.2
23		コシダカサザエ															1	0.5					1	0.5																																							5	6.7
24	あっきがい	ガンセキボラ	1	46							1	16	2	62	2	88	1	62					3	150	2	87													2	87	1	32	1	17.5									2	49.5	1	65					19	743.8
25		シラクモガイ	7	420					7	295.5	2	11.7	16	727.2	9	174.5	17	245	6	91	1	33	33	543.5	7	325	2	101	3	121	8	239	2	111.5	1	77			23	974.5			2	181.5	4	203	2	68.5	18	819	5	201	31	1473	1	80	2	54	2	54	185	7,860.2
26		ツノレイシ	7	112			6	81.5			1	29	14	222.5	1	11	7	107					8	118	3	64									3	9			6	73	7	98	4	76	5	88			7	135	1	15.5	24	412.5	2	37	1	10	4	42	115	(1,730.3)
27		ツノテツレイシ	1	6.2					1	( )	2	16	4	22.2	1	8			1	9.5			2	17.5																					1	4.2			1	2	1	4	3	10.2							12	(59.9)
28		テツレイシ					1	2.5	2	5.5	3	19	6	27			1	8					1	8																					1	10							1	10					1	8	15	97.2
29		ヒメヨウラク			1	1							1	1			1	1.5					1	1.5																																							6	4.0
30		アカイガレイシ	4	65	2	24			5	108	6	116.5	17	313.5			6	55					6	55			3	144.5			3	103	2	28					8	275.5									4	141			4	141							71	1,609.3
31		ムラサキイガレイシ	1	16.5			1	38.5			3	22	5	77			4	128	1	20			5	148	1	18.7											1	29	2	47.7																	1	24			30	(547.6)
32	おにこぶし	コオニコブシ	4	114			2	70.5	1	20.7	3	150.5	10	355.7	2	38	7	128					9	166	1	64			1	27									2	91	1	32.5			4	192.7			2	84	1	19.7	8	328.9							96	3,008.2
33	ふねがい	エガイ					1	44					1	44																																																1	44.0
34		カリガネエガイ	2	11.7	1	5	1	1.5	6	37.2	7	48.4	17	103.8			1	1.5					1	1.5																																							32	174.0
35		ベニエガイ					1	5					1	5																																																	1	5.0
36	きくざるがい	カネツケザル							2	11.2	1	9.5	3	121.5			5	( )					5	( )																																							11	141.4
37	おにのつのがい	コオニノツノガイ																																																													5	0.2
38	えぞばい	シマベッコウバイ	2	2.5					3	5	1	0.7	6	8.2																							1	2.7	1	2.7															1	1					15	20.6
39	とまやがい	クロフトマヤ					1	( )					1	( )																																																	2	( )
40	からまつがい	コウダカカラマツ	1	2					10	6.2	5	4.1	16	12.3	1	3	14	21.5					15	24.5																									1	1.5			1	1.5							39	(44.7)
41	たまきび	ホソスジウズラタマキビ																																																													2	0.4
42		タマキビ																																																													3	0.2
43		コウダカタマキビ																																																													1	( )
44	うみにな	イボウミニナ	2	( )	1	4.2			1	1.5	3	5.4	7	(11.1)			1	66.2					1	66.2													2	4.5	2	4.5			1	4									1	4							33	129.7

第５表　貝類遺存体集計表（その３）

番号	科目	種目	2トレンチ 3層 個数	重量	4層 個数	重量	5層 個数	重量	6層 個数	重量	小計 個数	重量	4トレンチ 0・1区 3層 個数	重量	2区 3層 個数	重量	3区 表層 個数	重量	3区 3層 個数	重量	小計 個数	重量
45	いがい	リュウキュウヒバリガイ	3	( )	47	111.7	12	26			62	(137.7)										
46	むかでがい	フタモチヘビガイ					1	7.5			1	7.5										
47	たからがい	ハナマルユキ			8	158.9	2	10.5			10	169.4			1	10.2					1	10.2
48	いたぼがき	オハグロガキ					1	7.7			1	7.7	1	16.5							1	16.5
49	いもがい	マダライモ					1	30			1	30										
	小計		20		155		218		7		400		24		16		4		3		47	
	C．潮間帯下砂地																					
50	しゃてがい	ヒレジャコ			2	354.2	1	56.2			3	410.4	2	281.5	1	92					3	373.5
51	すいしょうがい	クモガイ			1	139					1	139							1	43	1	43
52		マガキガイ	20	505.5	122	3,313	23	234.7	16	141.2	181	4,194.4	44	1,120	17	427	5	138	4	123.5	70	1,808.5
53		スイショウガイ																				
54		ラクダガイ																				
55		ムカシタ.モト			14	193	1	2.5			15	195.5										
56		フドロガイ					8	( )			8	( )										
57	いもがい	フデイモガイ			1	( )					1	( )										
58		サヤガタイモ	1	( )			4	22	2	22	7	(44)										
59		キヌカツギイモ	1	6.5	3	49.5	3	31.7			7	87.7			1	19.2			1	15	2	34.2
60	たからがい	ホシダカラ			1	28.5					1	28.5										
61	おりいれようばい	アツムシロガイ																				
62	たけのこがい	ウシノツノガイ																				
63		キバタケ																				
64	やっしろがい	ウズラガイ																				
			22		144		40		18		224		46		19		5		6		76	
	D．潮間帯下岩場																					
65	しゃてがい	シラナミ			3	343.7					3	343.7	1	7.2	1	22.2			1	87	3	116.4
66	いとまきぼら	ツノキガイ																				
67		チトセボラ			1	49			1	( )	2	(49)										
68		リュウキュウツノマタ			4	173.9					4	173.9			1	14					1	14
69	りゅうてん	チョウセンサザエ					2	145.4			2	145.4	5	54	2	20.5	2	19	1	15	10	108.5
70		ヤコウガイ			1	117	1	450			2	567					1	12	1	27	2	39
71		リュウテン																				
72	にしきうず	ムラサキウズ																				
73		ニシキウズ			2	48					2	48										
74		サラサバティ	3	20	12	606.5	1	181			16	807.5	2	84.5	1	67.7			1	35.7	4	187.9
75		ギンタカハマ																				
76	たけのこかにもり	オニノツノガイ			4	88.4	6	12.9	1	( )	11	(101.3)										
77	ふじつがい	シオボラ			1	13.5					1	13.5										
78		ホラガイ											1	93							1	93
79		シノマキ			3	34.5	1	0.7			4	35.2										
80	おきにし	オキニシ			12	606.7	3	131.7	2	52	17	1,975.7	2	50.5							2	50.5
			3		43		14		4		64		11		5		3		4		23	
81	パイプウニ																					
82	ムラサキウニ						4				4											
83	フジツボ																					
	計		50		382		461		49		942		89		76		17		15		197	

番号	科目	種目	5トレンチ 1区 表層 個数	重量	1区 3層 個数	重量	2区 3層 個数	重量	3区 3層 個数	重量	4区 3層 個数	重量	5区 3層 個数	重量	6区 3層 個数	重量	7区 表層 個数	重量	7区 3層 個数	重量	8区 4層 個数	重量	8区 3層 個数	重量	9区 3層 個数	重量	9区 4層 個数	重量	14区 表層 個数	重量	14区 2層 個数	重量	14区 3層 個数	重量	Ⓐ 個数	重量	Ⓑ 個数	重量	Ⓒ 個数	重量	Ⓓ 個数	重量	Ⓔ 個数	重量	Ⓕ 個数	重量	Ⓖ 個数	重量	小計 個数	重量
45	いがい	リュウキュウヒバリガイ																																																		
46	むかでがい	フタモチヘビガイ																																																		
47	たからがい	ハナマルユキ													1	8.5			1	18.5																															2	27
48	いたぼがき	オハグロガキ							2	5													2	2			1	6																							5	13
49	いもがい	マダライモ													1	6.5																																			1	6.5
	小計		7		12		10		21		6		9		34		1		60		4		78		13		31		15		10		4		3		3		17		2		27		13		3		383	
	C．潮間帯下砂地																																																			
50	しゃてがい	ヒレジャコ	1	61.5	1	75.2	2	356					1	278.5					1	72.2			2	165.5	2	132.5	2	100.5	1	299.5									1	72									14	1,613.4
51	すいしょうがい	クモガイ	1	186			1	175													1	76.5	2	129			1	( )															1	62					7	(628.5)
52		マガキガイ	2	52	31	879	25	709	14	245			5	22	30	679			43	995.7	4	79	39	1091	1	25.5	17	191.5	2	53			1	39.7	1	18	1	12.5	7	185	1	4	49	1,249.5	43	960	3	95	319	7,585.4
53		スイショウガイ																																																		
54		ラクダガイ					1	361																																											1	361
55		ムカシタ.モト																																																		
56		フドロガイ																																																		
57	いもがい	フデイモガイ																																																		
58		サヤガタイモ																	1	3.2																															1	3.2
59		キヌカツギイモ			2	14	2	52.5	2	10.7					8	138.5			2	46			3	19			2	20							1	30			1	24.5			1	24	1	4			25	383.2
60	たからがい	ホシダカラ																																																		
61	おりいれようばい	アツムシロガイ																																																		
62	たけのこがい	ウシノツノガイ																																																		
63		キバタケ																																																		
64	やっしろがい	ウズラガイ																	1	12.5																															1	12.5
			4		34		31		16		6		38						48		5		46		3		22		3				1		2		1		9		1		51		44		3		368	
	D．潮間帯下岩場																																																			
65	しゃてがい	シラナミ					3	491.5	2	147			1	112	3	162			3	416.2			1	16					1	82															3	202.5	1	29			18	1,658.2
66	いとまきぼら	ツノキガイ																													1	14.5																			1	14.5
67		チトセボラ																																																			
68		リュウキュウツノマタ							2	22			1	227.5									1	141.5	1	17	1	24	2	30.2	1	( )									1	34			2	386					12	(882.2)
69	りゅうてん	チョウセンサザエ	1	113	6	93.2	3	217.5	3	43.5					11	74.2	9	( )	7	89.7			10	123.7	3	91.5			3	241.7												1	12	6	321.5	2	38			65	(1,459.5)
70		ヤコウガイ					1	650																			1	177	2	772.5			2	1,098.5											1	185.5					7	2,883.5
71		リュウテン																					1	1.5																											1	1.5
72	にしきうず	ムラサキウズ																																																		
73		ニシキウズ																	1	42.7			1	28																			3	28					5	98.7
74		サラサバティ	7	433	2	86	12	1147.5			2	105.7	2	123					1	38			2	79					1	26.7													5	473.5	1	38			35	2,550.4
75		ギンタカハマ					1	6	1	12.5									1	6			1	88.2																			3	37.5	5	167			9	317.2
76	たけのこかにもり	オニノツノガイ																																									1	70					1	70
77	ふじつがい	シオボラ			1	110			1	13																																									2	123
78		ホラガイ																																																		
79		シノマキ																																																		
80	おきにし	オキニシ			2	65	1	56.5	2	41.5									2	46			8	292	7	105			1	21	1	32	1	29															25	(688)
			8		11		21		11		4		16				9		15				25		11		2		10		3		3						1		1		24		6				181	
81	パイプウニ																																																			
82	ムラサキウニ																																																			
83	フジツボ																																																			
	計		19		82		65		54		8		23		115		13		160		10		185		35		107		35		19		8		18		10		34		7		124		75		16		1,222	

第6表　貝類遺存体集計表（その4）

番号	科目	種目	6トレンチ 1区 3層 個数	重量	3層下部 個数	重量	4層 個数	重量	2区 3層 個数	重量	4層 個数	重量	小計 個数	重量
45	いがい	リュウキュウヒバリガイ												
46	むかでがい	フタモチヘビガイ	2	107									2	107
47	たからがい	ハナマルユキ	1	2					1	1.5	1	8.5	3	12
48	いたぼがき	オハグロガキ	5	28.9	3	14	2	14	38	114	16	68.4	64	239.3
49	いもがい	マダライモ	1	6.2			2	37.4			1	8	4	51.6
小計			58		18		26		152		157		411	
C. 潮間帯下砂地														
50	しゃてがい	ヒレジャコ	3	219			1	1690	2	27	2	89	8	202.5
51	すいしょうがい	クモガイ	4	451.7	1	21							5	472.7
52		マガキガイ	44	656	37	1198	18	408.5	8	283.2	23	578	130	3123.7
53		スイショウガイ					1	14					1	14
54		ラクダガイ												
55		ムカシタモト					6	49.2			2	11.5	8	60.7
56		フドロガイ												
57	いもがい	フデイモガイ												
58		サヤガタイモ									4	19.5	4	19.5
59		キヌカツギイモ					1	( )	2	34.7	1	13	4	(47.7)
60	たからがい	ホシダカラ	1	( )									1	( )
61	おりいれようばい	アツムシロガイ												
62	たけのこがい	ウシノツノガイ							1	( )			1	( )
63		キバタケ												
64	やっしろがい	ウズラガイ	1	10.7									1	10.7
			53		38		27		13		32		163	
D. 潮間帯下岩場														
65	しゃてがい	シラナミ	3	302			1	65			3	196	7	563
66	いとまきぼら	ツノキガイ												
67		チトセボラ	1	8.5									1	8.5
68		リュウキュウツノマタ	2	( )	1	118			4	53	1	12.5	8	(183.5)
69	りゅうてん	チョウセンサザエ	12	171	5	136	5	99	5	103.7	7	211.7	34	721.4
70		ヤコウガイ	2	600					1	195			3	795
71		リュウテン												
72	にしきうず	ムラサキウズ					2	3					2	3
73		ニシキウズ			1	21.5			2	445	1	28	4	94
74		サラサバティ	4	401.5	1	55.5							5	457
75		ギンタカハマ	1	19			1	35					2	54
76	たけのこかにもり	オニノツノガイ	2	69.7					1	7.5	1	48	4	125.2
77	ふじつがい	シオボラ	1	2.5			2	7					3	9.5
78		ホラガイ												
79		シノマキ												
80	おきにし	オキニシ	4	73					6	114	6	120	16	307
			32		8		11		19		19		89	
81	パイプウニ						1	4					1	4
82	ムラサキウニ													
83	フジツボ		2	13			3	32.7			5	23	10	68.7
計			178		73		78		261		307		897	

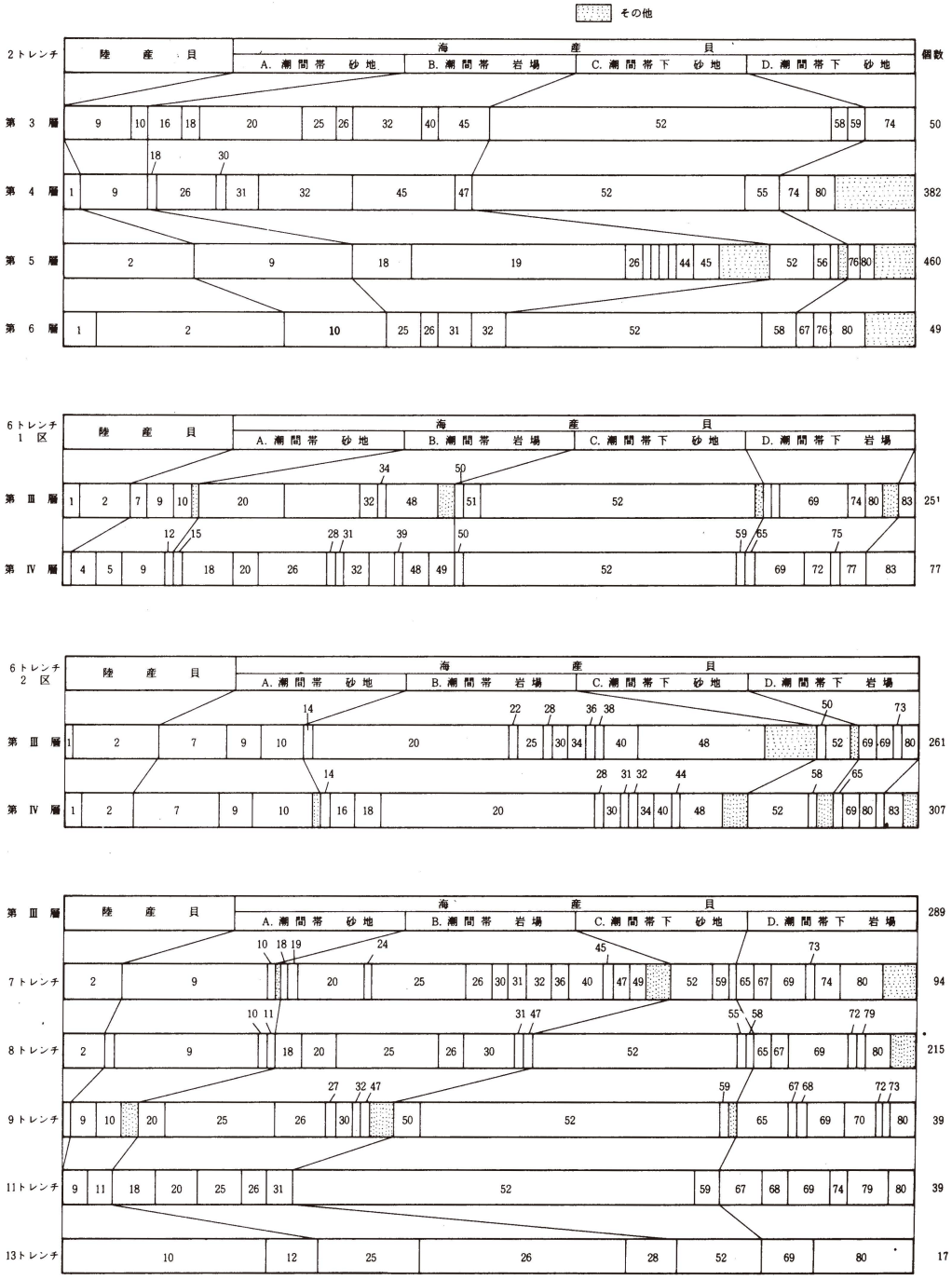
番号	7トレンチ 1区 3層 個数	重量	2区 3層 個数	重量	Ⓐ 個数	重量	Ⓑ 個数	重量	小計 個数	重量
45	1	1.5	3	4					4	5.5
46										
47	1	10	5	21.2	1	7			7	38.2
48										
49			6	43.5					6	43.5
小計	20		108		9		2		139	
C. 潮間帯下砂地										
50			1	38					1	38
51										
52	2	56	11	146.5			1	35.5	14	238
53										
54										
55										
56										
57										
58			1	13			1	8.5	2	21.5
59			7	154.5					7	154.5
60										
61										
62										
63										
64										
	2		20				2		24	
D. 潮間帯下岩場										
65	1	17	3	176					4	193
66										
67										
68			5	102					5	102
69	2	118.5	6	272.5	2	115	1	14	11	520
70										
71										
72										
73			4	54					4	54
74	3	97	5	148.5			1	26	9	271.5
75					1	33			1	33
76										
77										
78										
79			1	26					1	26
80	4	90	7	108	4	90			15	288
	10		31		7		2		50	
81										
82										
83										
計	39		220		17		11		287	

番号	8トレンチ 1区 表層 個数	重量	3層 個数	重量	2区 表層 個数	重量	3層 個数	重量	3区 表層 個数	重量	3層 個数	重量	4層 個数	重量	小計 個数	重量
45																
46																
47							1	9							1	9
48																
49	1	7.7													1	7.7
小計	17		6		4		18		4		4		15		68	
C. 潮間帯下砂地																
50					1	96			1	17.5					2	113.5
51																
52	13	359	6	156	5	114	17	410	3	67.5			6	132	50	1238.5
53																
54																
55							1	8							1	8
56																
57																
58	1	14									1	13			2	27
59	2	53.5					1	8							3	61.5
60																
61																
62																
63																
64																
	16		6		6		19		4		1		6		58	
D. 潮間帯下岩場																
65					3	95	1	65			1	58.7			5	218.7
66																
67			1	31			1	18							2	49
68					1	23			1	66.5			1	36	3	125.5
69	6	72	1	14.7	1	21	5	59.5			1	24.5	1	13	15	204.7
70	1	127													1	127
71																
72							1	9							1	9
73																
74	4	145													4	145
75																
76	1	70													1	70
77																
78																
79			1	5											1	5
80							2	68	1	43	1	20			4	131
	12		3		5		10		2		3		2		37	
81																
82																
83																
計	52		18		15		67		10		9		41		212	

番号	9トレンチ 1区 表層 個数	重量	3層 個数	重量	4層 個数	重量	2区 3層上部 個数	重量	3層 個数	重量	3区 3層 個数	重量	小計 個数	重量
45	2	5											2	5
46	1	7							1	88			2	95
47							1	7.5	1	8	1	11	3	26.5
48					1	5.5							1	5.5
49														
小計	14		9		17		4		40		10		94	
C. 潮間帯下砂地														
50					2	242	1	156	3	429	2	36.5	8	863.5
51					1	( )			1	130			2	(130)
52	3	77	8	226	31	87.1	1	15.5	49	1,426.2	18	507	110	2338.8
53														
54									1	109.5			1	109.5
55														
56														
57														
58														
59	1	13			1	25	1	13	1	18	1	34	5	103
60														
61	1	1											1	1
62														
63														
64														
	5		8		35		3		55		21		127	
D. 潮間帯下岩場														
65			3	352					6	900.5	3	194	12	1446.5
66														
67									1	59	1	( )	2	(59)
68					1	14.5			2	218			3	232.5
69	1	13	3	199	6	84			4	206	4	112.5	18	614.5
70			3	412	1	28			1	180			5	620
71														
72														
73									1	23	2	17.5	3	40.5
74	2	108	2	( )					1	38			5	(146)
75							1	51					1	51
76	1	64	1	73									2	137
77											1	18	1	18
78														
79														
80	1	17.5	2	35	1	18			4	136	1	44.5	9	251
	5		14		9		1		20		12		61	
81														
82														
83														
計	79		34		66		10		126		45		360	

番号	11トレンチ 表層 個数	重量	3層 個数	重量	13トレンチ 3層 個数	重量	総計 個数	重量
45							68	(148.2)
46							5	209.5
47							27	292.3
48							72	282.0
49							13	139.3
小計	8		8		7		1565	
C. 潮間帯下砂地								
50							39	5,437.3
51							16	(1,413.2)
52	2	48	19	525	2	65	897	21,165.3
53							1	14.0
54							2	470.5
55							24	264.2
56							8	( )
57							1	( )
58							16	116.2
59			1	7			54	(878.8)
60							2	(28.5)
61							1	1.0
62							1	( )
63							1	( )
64							2	23.2
	2		20		2		1064	
D. 潮間帯下岩場								
65							52	4,539.5
66							1	14.5
67			2	110			9	(275.5)
68			1	69			37	(1,782.6)
69			2	223	1	43	158	4,040.0)
70							20	5,031.5
71							1	1.5
72							3	12.0
73							18	335.2
74	1	42	1	48			80	(4,655.3)
75							13	455.2
76							19	(503.5)
77							7	164.0
78							1	93.0
79			2	37			8	103.2
80			1	28	2	56	91	3,775.2
	1		9		3		518	
81							1	4.0
82							4	0.2
83							10	68.7
計	12		39		17		4,186	

第7表　棲息地別出土状況



グラフ中の数字は第3～6表の種目番号と同じである。

第6章　あやまる第2貝塚出土の動物骨について

鹿児島大学農学部　　西中川　　駿

1．はじめに

あやまる第2貝塚は，鹿児島県大島郡笠利町須野字大道にあり，昭和58年11月～12月に，笠利町教育委員会が，鹿児島県文化課の池畑，牛ノ浜両氏の指導の下に発掘し，縄文後期から奈良時代までの人工遺物の出土した遺跡である。今回調査した自然遺物は，大部分が弥生時代を中心としたものである。

2．出土動物種と出土骨量

本貝塚出土の自然遺物は，総重量672.9g（貝類を除く）で，それらは哺乳類525.3g，爬虫類41.5g，魚類92.1gおよび甲殻類1.4gで，哺乳類が全体の78%を占めている。また，細骨片のために動物種を同定出来ないものが，12.6gある。各動物別およびトレンチ別出土骨量は，第8表に示した。

哺乳類は，イノシシとジュゴンと推定されるものの

			哺乳類 イノシシ	哺乳類 海獣（ジュゴン）	爬※虫類	魚類	甲※殻類	不明骨	出土骨量 トレンチ別	時代区分
2 T		5層				0.4 (1)			7.1	古墳以降
		6層	5.8 (1)					0.9		古　墳
4 T		3層				0.8 (1)			0.8	弥生中期～古墳前期
1 G		3層	55.1 (8)	41.2 (3)	22.2 (4)	18.1 (7)			136.6	〃
2 G		3層	46.7 (6)	348.5 (7)		31.4 (11)		4.5	431.1	〃
5 T	1区	3層	5.7 (1)		7.6 (6)	6.5 (1)			45.1	〃
	2区	3層	2.9 (1)							〃
	6区	3層						1.8		弥生前期～古墳前期
	14区	2層	7.3 (1)		11.7 (1)	0.7 (1)		0.9		不　明
6 T	1区	3層	7.0 (1)				1.4 (1)		13.8	弥生前期
	2区	4層	4.3 (1)					1.1		縄文後期
8 T	3区	3層						3.4	3.4	弥生前期
9 T	2区	3層	0.8 (2)			34.2 (6)			35.0	古墳以降
動物別出土骨量			135.6 (22)	389.7 (10)	41.5 (11)	92.1 (28)	1.4 (1)	12.6	672.9	

第8表　動物別およびトレンチ別出土骨量　(g)

（　）は骨片数を示す。　※爬虫類はウミガメ，甲殻類はカニ

骨片である。イノシシ（図版１の１～13参照）は，４Ｔ，８Ｔを除く各トレンチにみられ，それらは上顎骨（右），下顎骨２（左・右），下顎第三後臼歯２（左・右），上腕骨（左），尺骨（左），橈骨４（左３・右１），第三中手骨（左），第四指基節骨２（左・右），第四指中節骨（右），寛骨（右），大腿骨２（左・右），脛骨（右），踵骨３（左１・右２）の22個の骨片で，推定個体数は８個体以上である。長骨や頭蓋は割断されている。各骨の形状は，現生のリュウキュウイノシシに類似し，橈骨の近位端の幅×径は23.5×15.1（mm）で，現生の雄のものとほぼ同じ大きさである。ジュゴンと推定されるものは，肋骨片など10個のものがみられたが，骨は焼かれており，化石状を呈している。

爬虫類は，ウミガメ（図版１の18，19参照）で，上腕骨，背甲，腹板など11骨片がみられる。

魚類は専門家に依頼する必要があるが，ブダイの上咽頭骨，下咽頭骨，前上顎骨，歯骨，椎骨など20骨片，ハリセンボンの上顎骨５，フエフキダイの前上顎骨１，ハタ科の主上顎骨２個など計28個の骨片が出土している（図版１の20～26参照）。

甲殻類は，種の同定は出来ないが，カニの鉗脚１個である（図版１の27参照）。

次に出土動物骨をトレンチ別にみると，2Gが全体の64％を占め，ついで1Gの20％で，他は少ない。しかし，2Gの出土量は，化石状になったジュゴンの１個当りの重量が重いためであり，骨片数では1Gと差はない。

３．考　察

本貝塚の自然遺物は，イノシシ22，魚類28骨片の出土で，量的に極めて少なかった。

イノシシの出土は，奄美本島の宇宿貝塚[2]，サウチ遺跡[1]，徳之島の面縄貝塚[5]，沖永良部島の中甫洞穴[6]などから出土しており，また鹿児島県本土の各遺跡[3]からも出土している。奄美地方のイノシシは、小型で，その骨の形状は，現生のリュウキュウイノシシに類似している。また，シカの出土骨のないことは，奄美地方の特徴のようである。海獣の出土は，海辺の貝塚でよくみられるが，本貝塚からはジュゴンのものと思われる骨片10個が出土している。ジュゴンの出土は，鹿児島県下の遺跡では，はじめてであり，貴重なものである。魚類ではタイが多く，当然のことながら，当時の人々の重要な食料源であったことがうかがえる。また，イノシシの骨は割断されていることから，金子[3]らのいうように骨髄や脳を摘出して食べていたことが想像される。

４．まとめ

あやまる第２貝塚から出土した動物骨について同定を行った。

１．自然遺物（貝塚を除く）の総重量は，672.9ｇで，哺乳類525.3ｇ，爬虫類41.5ｇ，魚類92.1ｇおよび甲殻類1.4ｇであった。

２．哺乳類はイノシシ，海獣（ジュゴン）で，爬虫類はウミガメ，魚類は，ブダイ，フエフキダイ，ハリセンボン，ハタ科のもので，甲殻類はカニであった。

なお，ジュゴンの同定については，国立博物館小野慶一，宮崎信之両氏のご教示を得た。厚くお礼申しあげます。

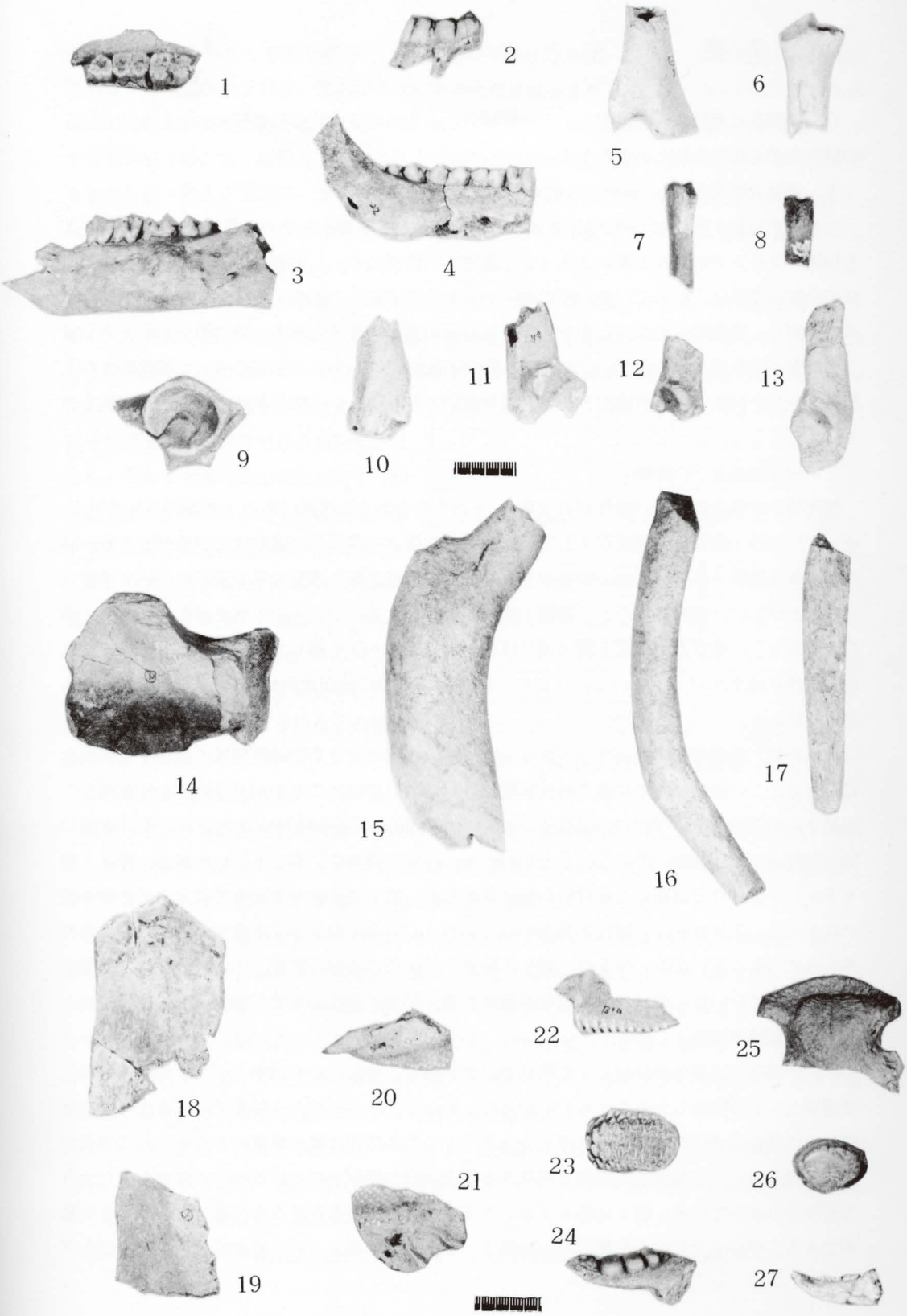
参 考 文 献

1．笠利町教育委員会：サウチ遺跡，65—66（1978）
2．笠利町教育委員会：宇宿貝塚，笠利町文化財調査報告書，95—96（1979）
3．金子浩昌：縄文時代の狩猟，漁撈，歴史公論，2，67—71（1979）
4．西中川駿他：古代遺跡出土の動物骨に関する研究Ⅳ，鹿児島県黒川洞穴出土骨の概要。
鹿大農学術報告，33，147—157（1983）
5．西中川駿：面縄貝塚出土の動物骨について
伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 43—49（1983）
6．西中川駿他：中甫洞穴出土の動物骨，鹿児島考古，第17，41—44（1983）

図 版 1 の 説 明

1～13：イノシシ
14～17：ジュゴン（14はジュゴンであるか疑問が残る）
18，19：カメ
20～26：魚類
27　　：カニ類

1 上顎骨（右，P^4～M^2）　2 第三後臼歯（右，下顎）
3 下顎骨（右）　4 下顎骨（左）　5 上腕骨（左）
6 橈骨（左）　7 第三中手骨（左）　8 第四指基節骨（右）
9 寛骨（右）　10 脛骨（右）　11 踵骨（左）
12 踵骨（右）　13 踵骨（右）
14 下顎骨(？)　15 肋骨（右）　16 肋骨（右）　17 肋骨（右）
18 背甲　19 腹板
20 ブダイ前上顎骨　21 ブダイ歯骨　22 ブダイ上咽頭骨
23 ブダイ下咽頭骨　24 フエフキダイ前上顎骨
25・26 ハリセンボン上顎骨　27 カニ鉗脚


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

第７章　　まとめ

今回の調査は遺跡の範囲確認と，その性格づけの２つを主目的にして行われた。ここではその調査結果を簡単にまとめてみよう。

１．遺跡の範囲

トレンチを13ケ所にもうけたが，まったく包含層のみられなかったのは第10トレンチのみで，その他のトレンチは内容の違いはあっても遺物の包含がある。したがって，ごく一部を除いてほぼ全域に遺跡は広がっている。ただ長いトレンチで調査した第５・第６トレンチでは海岸寄りに集中し，内陸部に近づくと少なくなり包含層の途切れる所もある。特に第６トレンチでは３区以西に包含層がみられない。しかし，砂丘の後背地については調査のされた範囲が少なく第５トレンチ14区では溝の検出と，包含層が確認されたことから部分的には広がる可能性もある。

２．砂丘形成とその時期

笠利崎では各所に新しい砂丘が形成され，そのうちの多くに遺跡のあることが知られている。そして，その一部は発掘調査がされている。サウチ遺跡や長浜金久遺跡などがそれである。特に長浜金久遺跡では広い範囲の調査がされ，砂丘の形成過程，遺跡の形成過程について示唆されることが多い。端的にいうと，嘉徳Ⅰ式の時期までは古砂丘の上で生活を営んでいるが，砂丘が海のほうへ延びた兼久式土器の頃には新しい砂丘上へ居を移している。さらに砂丘は延び，現在の海岸線を形づくっている。つまり，約3000年の間に砂丘は約100ｍ海の方へ延びている可能性がある。

ところが，当遺跡の場合はだいぶ異なっている。Ⅳ層における面縄前庭式，嘉徳Ⅰ式の出土によって，この砂丘はすでに縄文時代後期には形成されていたことが知れる。そしてⅣ層から表層までの厚さが深い所で1.5ｍほど，浅い所では20cmほどしかないことから，この砂丘は3000年間ほとんど移動していないことがわかる。今回の調査中，第２トレンチ周辺，第７・第９トレンチあたりでは風による飛砂に悩まされたが，第１グリッドあたりでは全んど影響を受けなかった。これは，この砂丘が海岸のほうが高く，内陸に向かって下降するという立地条件をもっていることによる。つまり，植生の発達によっては海岸に隣接していながら風の影響を全くといっていいほど受けない。植生が崩れた時，初めて砂丘の移動が始まる。

３．貝集積の意味

今回の調査では墓地の存在は全く確認できなかった。少なくとも13のトレンチの範囲では生活遺跡としての性格しかとらえられなかった。そして，その立地から想像できるように海に直結した生活をしている。ほとんどのトレンチで，また各時代に貝の集積がみられる。この貝の集積状況についても長浜金久遺跡で興味ある出土状況が確認されているが，ここでも似たような状況がつかめている。第１は第６トレンチ５区・６区付近などにみられるブロックごとの集中である。ブロックによる貝種の違いは第３～６表にまとめたとおりである。第２には第１グ

リッド北側にみられる方形（幅0.7m）の空白地の存在である。こうした空白地は長浜金久第1貝塚でも検出されている。類例が少なくその性格ははっきりしないが，ひとつ考えられるのはこの空白地の両端が直であることから，これを板状のものを当てていたあとと予想できるのではなかろうか。溝・道路などでないことは端部が区切れることから明白だろう。第3には第2トレンチ・第1グリッド・第7トレンチにみられた貝砕片の密集,灰や焼け貝の集中である。灰や焼け貝の集中している所は炉の可能性がある。貝砕片の集中は不明であるが，第7トレンチではこの中から貝札が出土している。

こうした貝散布のある小遺跡について中山清美氏は「季節移動」として，特に東海岸では冬期の貝採集を予想されているが(注1)，当遺跡について考えるとこれは当らないだろう。貝種も氏がその根拠としたマガキガイが必ずしも多いわけでない。当遺跡の場合，砂丘形成の項で記したように、安定した居住空間にあることから生活本拠地と考えたほうが無難であろう。そして土器の出土状況が示す（第9表）ように時期によって居住地を少しずつ移している可能性がある。

ところで、こうした貝の散布状況は奄美・沖縄諸島では多くの遺跡にみられる現象である。こうした状況がどういう居住空間にあるのか、今後住居跡などとの関連でつかんでいかねばならない問題であろう。

類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	その他の主要遺物
2T						—		外耳土器，貝・石・鉄製品
1G						—		中津野式・磨製石鏃
2G					—	—		山ノ口式・免田式・貝製品
5T	—		—		—	—		高橋Ⅱ式・貝製品
6T	—	—		—	—	—		磨製石器・貝製品
7T						—	—	外耳土器・貝製品
8T					—	—		貝製品
9T						—		須恵器
11T							—	貝製品
13T						—		

第9表　トレンチ別遺物出土表

4．周辺地域とのかかわり

南九州本土から南西諸島中部域への遺物搬入はすでに縄文時代のはじめ（例えば轟式・曽畑式土器など）からみられることがわかってきた。弥生時代においても上原静氏(注2)・岸本義彦氏(注3)が紹介しているように多くの遺跡で本土の弥生式土器が出土している。

本遺跡でも色々の遺物が搬入されている。弥生時代前期後半には高橋Ⅱ式土器の壺・甕と，黒曜石が，中期後半には山ノ口式土器の壺が，後期～古墳時代前期には免田式土器の長頸壺と中津野式土器の壺がある。これらは図化したものの他にも多くの破片があることから，突発的なつながりではなく継続的なつながりも予想でき，在地土器への影響も強い。

一方，網目文土器や外耳土器は南からの搬入も考えられる。今後は胎土分析などによって搬入土器と在地土器との割合などについても調べる必要があろう。

(注1)中山清美「砂丘性小遺跡について」『ケジ遺跡・コビロ遺跡・辺留窪遺跡』　1983年

(注2)上原静「奄美・喜界島荒木農道遺跡出土のイトマキボラ製利器，弥生式土器他」『南島考古』第8号　1983年

(注3)岸本義彦「沖縄出土の弥生土器瞥見〔Ⅰ〕」『南島考古』第8号　1983年

第８章　　考　　察

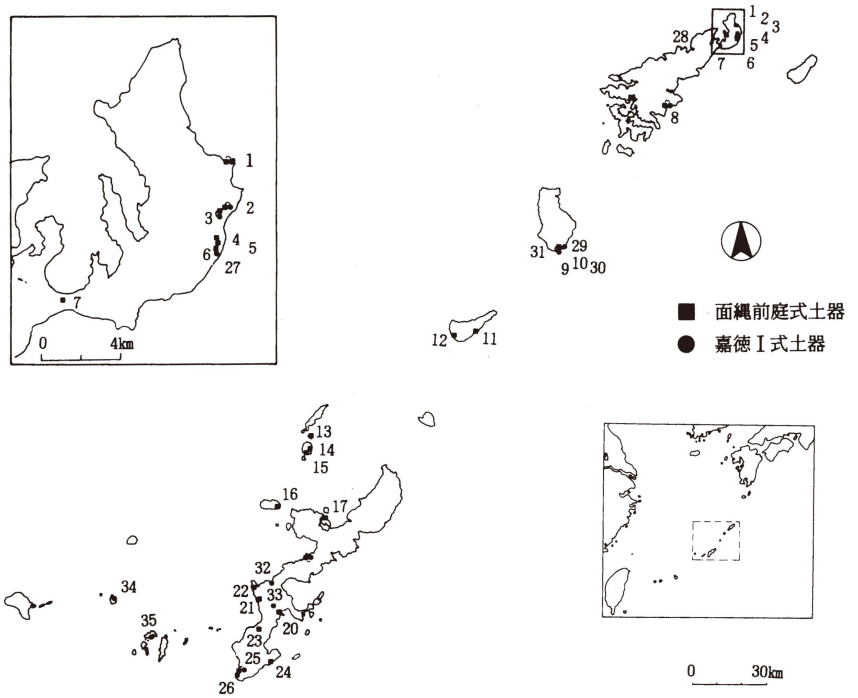
第１節　面縄前庭式土器と嘉徳Ⅰ式土器

面縄前庭式土器

面縄前庭式土器は，徳之島（伊仙町面縄）にある面縄第４貝塚の前庭部より発見された土器で，1956年８月13日より８月24日まで，国分直一，河口貞徳，原口正三，野口義麿等の九学会考古班によって調査が行われた。

当時は宇宿下層式土器として一括されていたが『器形に特徴があり，頸部がしまり，口縁部はやや外反し，胴部の張った尖底又は丸底の土器である。口縁部と肩部に細くひらたい凸部を附し，刻目をつけ，頸部の凸帯間と肩部の凸帯から胴部へかけて数条の沈線を鋸歯状に施文している。上下二条の凸帯間に四ケ所縦に凸帯を附したものが一般的である。器壁は比較的薄く，焼成度はやや良く，赫褐色の土器である。』[注1] というように，前庭部に単独に出土した一形式であるとされ，面縄前庭式と名称された。

編年上は，凸帯と凸帯の間の線刻の類似等により，面縄西洞式の影響を考えられ，縄文時代後期～晩期相当期に位置づけられている。1950年代の九学会の総合調査後，奄美諸島の先史学的調査は，鹿児島短期大学南日本文化研究所の総合調査（踏査等による）がある位でほとんど調査がなされなかったが，1970年，文化庁の委嘱により，重要遺跡の緊急指定資料の調整を目的として沖永良部島の住吉貝塚や宇宿貝塚の調査が行われ，また1970年代後半になり，各教育委員会，熊本大学，鹿児島大学，沖縄国際大学等の南島文化先史学的調査が活発になり成果をあげている。その結果，1982～1983年にかけて鹿児島大学と沖縄国際大学の合同調査が行われ



第51図　面縄前庭式土器と嘉徳Ⅰ式土器出土分布図

た神野貝塚において面縄前庭式土器は，嘉徳Ⅰ式土器の下層より出土し[注2]た。また，笠利町ケジ遺跡においては縄文時代後期前葉に位置づけされる松山式土器と共伴し[注3]た。これらのことより面縄前庭式は現在の編年より古くなる可能性がある。

面縄前庭式土器については，中山清美氏が笠利町郡土館館報[注4]でくわしく述べられているのでここでは，それ以後発見された遺跡等を加え，遺跡地名表と分布図をまとめてみた。

第10表　面縄前庭式土器出土地

番号	遺　跡　名	所　在　地	文献
1	あやまる第2貝塚	大島郡笠利町須野	本文
2	宇宿貝塚	〃　笠利町宇宿大籠	①
3	宇宿高又遺跡	〃　笠利町宇宿高又	②
4	万屋下山田遺跡	〃　笠利町万屋下山田	③
5	ケジ遺跡	〃　笠利町万屋ケジ	③
6	中永田C遺跡	〃　笠利町万屋中永田	③
7	ウフタ遺跡	〃　竜郷町赤尾木ウフタ	④
8	嘉徳遺跡	〃　瀬戸内町嘉徳	⑤
9	面縄第1貝塚	〃　伊仙町面縄	⑥
10	面縄第4貝塚	〃　伊仙町面縄	⑦
11	神野貝塚	〃　知名町神野	注2
12	大津勘長浜遺跡	〃　知名町大津勘	⑧
13	具志川島遺跡群	沖縄県島尻郡伊是名村具志川島	⑨
14	仲田貝塚	〃　〃　〃　仲田	⑩
15	伊是名貝塚	〃　〃　〃　伊是名	⑪
16	浜崎貝塚	〃　国頭郡伊江村東江前	⑫
17	渡喜仁浜原遺跡	〃　国頭郡今帰仁村西原	⑬
18	伊武部貝塚	〃　国頭郡恩納村伊武部	⑭
19	隅原遺跡	〃　具志川市昆布	⑮
20	室川貝塚	〃　沖縄市嘉間良	⑯
21	浜屋原遺跡	〃　中頭郡読谷村宇座	⑰
22	渡具知東原遺跡	〃　中頭郡読谷村渡具知	⑱
23	浦添貝塚	〃　浦添市仲間	⑲
24	百名第二貝塚	〃　島尻郡玉城村百名	⑳
25	名城前原遺跡	〃　糸満市名城前原	㉑
26	喜屋武遺跡	〃　糸満市喜屋武	㉒

＜文献＞

①河口貞徳，出口浩，本田道輝『宇宿貝塚』笠利町文化財調査報告書　1979
②熊本大学考古学研究室『笠利町高又遺跡』笠利町文化財調査報告2　1978
③熊本大学考古学研究室『ケジ遺跡・コビロ遺跡・辺留窪遺跡』笠利町文化財報告No. 6　1983
④熊本大学考古学研究室『ウフタ遺跡』研究室活動報告12　1982
⑤河口貞徳，上村俊雄他「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第10号　1974
⑥牛ノ浜修，堂込秀人『面縄第1，第2貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書1　1983
⑦九学会連合「奄美大島の先史時代」『奄美その自然と文化』　1959
⑧中山清美「先史時代における奄美と沖縄」『笠利町立郷土館館報』創刊号　1981
⑨安里嗣淳，佐野一也『具志川島遺跡群，第一次発掘調査報告書』伊是名村文化財調査報告書第1集　1977
⑩沖縄県教育委員会『沖縄県の遺跡分布』　1977
⑪沖縄県教育委員会『沖縄県の遺跡分布』　1977
⑫安里嗣淳，当真嗣一『浜崎貝塚』伊江村文化財調査報告書第1集　1976
⑬大城逸朗，新田重清他『渡喜仁浜原貝塚』今帰仁村教育委員会　1977
⑭上原静他『伊武部貝塚発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第51集　1983
⑮高宮廣衛他「具志川市隅原遺跡発掘調査概報」『沖国大考古』創刊号　1976
⑯高宮廣衛，比嘉賀盛「沖縄市室川貝塚発掘調査速報」『沖国大考古』創刊号　1976
⑰高宮廣衛「浜屋原遺跡」『日本考古学年報29』　1976
⑱高宮廣衛，知念勇他『渡具知東原』読谷村文化財調査報告第3集　1977
⑲新田重清「浦添貝塚調査概報」『南島考古』創刊号　1970
⑳沖縄県教育委員会『沖縄県の遺跡分布』　1977
㉑岸本義彦，山田正他「糸満市名城前原遺跡出土の室川下層式土器について」『南島考古』No. 6　1978
㉒沖縄県教育委員会『沖縄県の遺跡分布』　1977

嘉徳Ⅰ式土器

嘉徳Ⅰ式土器は，大島郡瀬戸内町嘉徳遺跡で発見された土器で，1974年８月３日より16日まで瀬戸内町教育委員会が主体になり，河口貞徳氏，鹿児島大学考古学研究会で調査が行われた。『平底の深鉢形で，胴が細く，口縁部は外反する。波状口縁をなし四個の低い山形隆起部をもつ。口唇部は平坦で外傾し，篦による刺突文を連続して施文している。口縁部は肥厚して文様帯をなし，篦描きの平行沈線を横位に描き，その間に連続刺突文を施す』『押し引き手法を引き継いだものを嘉徳Ⅰ式Ａとし，沈線間の刻文が連続圧痕文となり，施文具の幅が広く文様が短い線を並べた状態になったものを嘉徳Ⅰ式Ｂとした[注5]』とあり，編年上は，面縄東洞式土器と嘉徳Ⅱ式土器の間にはいり，面縄東洞式土器が市来式土器と共伴することから縄文時代後期相当に位置づけられている。

第11表　嘉徳Ⅰ式土器出土地

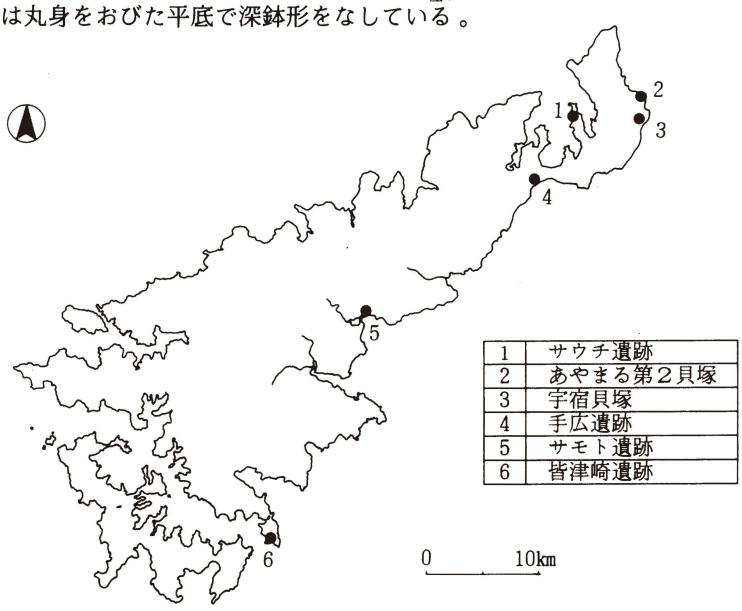
番号	遺　跡　名	所　在　地	文献
1	あやまる第２貝塚	大島郡笠利町須野	本文
2	宇宿貝塚	〃　〃　宇宿大籠	①
3	宇宿高又遺跡	〃　〃　〃　高又	②
27	長浜金久遺跡第Ⅱ貝塚	〃　〃　万屋長浜金久	③
28	天川遺跡	名瀬市朝仁天川	③
8	嘉徳遺跡	大島郡瀬戸内町嘉徳	④
29	喜念貝塚	〃　伊仙町喜念浜	⑤
10	面縄第２貝塚	〃　伊仙町面縄	⑥
30	面縄第４貝塚	〃　伊仙町面縄	⑦
31	犬田布貝塚	〃　伊仙町犬田布	③
18	伊武部貝塚	沖縄県国頭部恩納村伊武部	⑧
32	仲泊第４貝塚	〃　〃　〃　仲泊比屋根原	⑨
33	仲宗根貝塚	〃　沖縄市仲宗根	⑩
25	名城前原遺跡	〃　糸満市名城前原	⑪
34	渡名喜東貝塚	〃　島尻郡渡名喜村渡名喜	⑫
35	古座間味貝塚	〃　〃　座間味村古座間味	⑬

＜文献＞
①河口貞徳，出口浩，本田道輝『宇宿貝塚』笠利町文化財調査報告書　1979
②熊本大学考古学研究会『笠利町高又遺跡』笠利町文化財調査報告　2　1978
③鹿児島県教育委員会報告書作成中
④河口貞徳，上村俊雄他「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第10号　1974
⑤伊仙町歴史民俗資料館に表面採集品展示
⑥牛ノ浜修，堂込秀人『面縄第１，第２貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　1983
⑦九学会連合「奄美大島の先史時代」『奄美その自然と文化』　1959
⑧上原静他『伊武部貝塚発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第51集　1983
⑨金武正紀，安里嗣淳他『仲泊遺跡，1975，1976年度発掘調査報告書』恩納村文化財報告書第１集　1977
⑩嵩元政秀，知念勇他『仲宗根貝塚，第一，二次発掘調査概報』沖縄県文化財調査報告書第33集　1980
⑪岸本義彦，山田正「糸満市名城前原遺跡出土の室川下層式土器について」『南島考古』第６号　1978
⑫日本考古学年報33
⑬岸本義彦，島袋洋他『古座間味貝塚一範囲確認調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第43集　1982
参考文献
注１　国分直一，河口貞徳他「奄美大島の先史時代」『河口貞徳先生古稀記念著作集』上巻Ｐ405　1981
注２　鹿児島大学　上村俊雄助教授教示による。
注３　熊本大学考古学研究室「ケジ遺跡」『笠利町文化財報告 No.6』　1983
注４　中山清美「先史時代における奄美と沖縄」『笠利町立郷土館館報』創刊号　1981
注５　河口貞徳，上村俊雄他「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第10号　Ｐ28～29　1974

第2節　外耳土器

本遺跡から出土した外耳土器は，4点である。頸部近くに半円をなす外耳と木ノ葉形をもつもの，リボン状をなすものそして貼り突け凸帯状に少しあるものなどがこれまで奄美で出土している。その数は決して多くはない。沖縄本島においても南部から宮古，八重山に集中しているが，本島北部にはその数は限られているという[注1]。沖縄からトカラ列島にかけての外耳土器は宇宿上層式土器と同時期ぐらいから出現し，その下限は沖縄グシク時代まで及び，その形もいくつかの形に変化して来ている。奄美で出土している外耳土器は発掘資料でサウチ遺跡[注2]，宇宿貝塚[注3]，手広遺跡[注4]から出土している他，表採資料として竜郷町手広遺跡[注5]，瀬戸内町皆津崎遺跡[注6]，住用村サモト遺跡の資料がある。この資料もアーモンド状の形，アーモンド状の形に中央が凹みラクダのコブの形，杏仁形，粘土ヒモ状のものでU字形を持つものなどバラエティである。これらの外耳土器の資料が増えるにつれ，今後検討される資料の一つとなろう。

外耳土器全体の器形はそのほとんどが破片のみで不明であるが，竜郷町手広遺跡より表採されている。この資料は里山勇廣氏が発見し，復元作業のため実見する機会を得た。後日里山氏によって紹介されよう。発掘資料で全器形が復元出来た資料として同じ手広遺跡から出土している。この資料は丸身をおびた平底で深鉢形をなしている[注7]。



1	サウチ遺跡
2	あやまる第2貝塚
3	宇宿貝塚
4	手広遺跡
5	サモト遺跡
6	皆津崎遺跡

第52図　外耳土器出土遺跡分布図

参考文献

注1．昭和59年1月，沖縄県立博物館学芸員知念勇氏より御指導いただいた。
注2．「サウチ遺跡」　笠利町教育委員会
注3．「宇宿貝塚」　笠利町教育委員会
注4．「手広遺跡発掘調査」　竜郷町教育委員会
注5．奄美考古学研究会員里山勇廣氏発見
注6．瀬戸内町教育委員会の資料で町中央公民館に展示されている。
注7．手広遺跡発掘調査で確認。調査概報作成中

第3節　あやまる第2貝塚の弥生式土器・土師器の位置づけ

本遺跡では在地土器の他に各種の南九州本土系の弥生式土器・土師器が出土している。これらは層序的に明白なものの他に，出土地区の異なるものがある。そこで，これらを整理して，位置づけを試み，今後の参考に供したい。

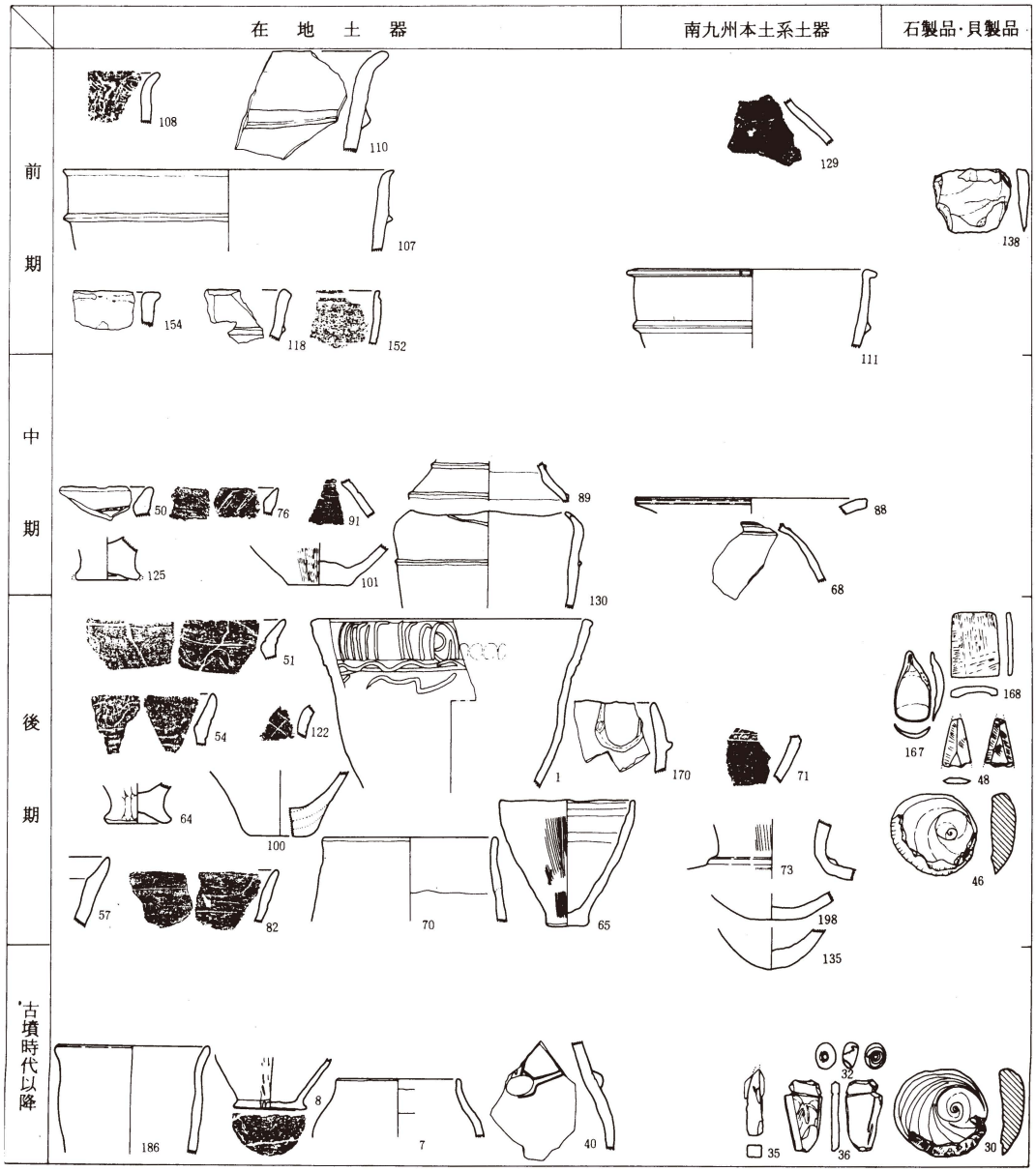
Ⅲ類はくの字状に外反するもので，頸部にヘラ描きのあるもの，三角突帯のあるものがある。Ⅳ類は横方向の割と深い凹線が口縁近くに引かれている。Ⅴ類は口縁端が肥厚したり，三角突帯状に飛び出したもので，頸部に三角突帯のつくものもある。Ⅲ類・Ⅴ類は主として第5トレンチに，Ⅳ類は第6トレンチに出土している。ここでは高橋Ⅱ式土器の甕・壺が出土していることから前期後半に位置づけられる。Ⅳ類は凹線を2本引くことによって，その間を突帯風に見立てたもので，Ⅴ類は高橋Ⅱ式土器を模したものだろう。

Ⅵ類の甕は内面に稜のあるくの字状口縁をもつもので，内面・外面にヘラ描きによる沈線文がある。ところが，この口縁の屈曲には少しずつ違いがみられる。すなわち49や50のように逆L字状に割と近いもの（Ⅵa類），くの字状口縁のもの（Ⅵb類），57のように外側の屈曲がほとんどないもの（Ⅵc類），1のように内面の稜が全んどみられないもの（Ⅵd類）の4種がある。これらの主体は第1・第2グリッド周辺にあり，ここから出ている山ノ口式土器・免田式土器・中津野式土器などとの関係から中期後半から古墳時代前期の時期が考えられる。そして口縁の形態からa類が中期後半，b類が後期，c類が古墳時代前期に相当するのではなかろうか。d類についてはその器形・文様，および第2トレンチの層位関係からⅥ類ではもっとも新しいもので，器形は南九州本土の笹貫式土器，種子島の上能野式土器に似ている。

Ⅶ類は兼久式土器と呼ばれている土器で，その位置づけについては弥生時代後期頃とする説，開元通宝が共伴することから奈良時代頃とする説がある。当遺跡では弥生時代遺物を出土する第1・第2グリッド，第5・第6トレンチには全くみられず，第2トレンチではⅥd類の上の層から出土している。先に記したようにⅥd類を笹貫式土器併行期とすれば，その始まりは早くとも古墳時代後期であることを示していよう。そして，兼久式土器が単独で出土する長浜金久遺跡では黒色土器・布痕土器などを伴っていることから，その下限は平安時代頃までくることが推測できる。この土器については細分化が必要とされる。

奄美大島の土器編年はこれまで縄文時代後期～晩期を中心に行われてきた。弥生時代については宇宿上層式土器・兼久式土器があてられてきた。しかし最近，高橋Ⅱ式土器や山ノ口式土器などの出土が沖縄本島をはじめ南島各地で報じられ，それは河口貞徳氏，小田富士雄氏，岸本義彦氏，上原静氏，中山清美氏などによって紹介されており，サウチ遺跡では多く出土している。今後はこうした資料を使用して，弥生時代以降の編年も確立されてこよう。

河口貞徳「先史時代の西海交通と薩摩半島」『えとのす』第6号　1976年
小田富士雄「九州系弥生文物の対外伝播覚書」『日本民族文化とその周辺』　1980年
岸本義彦「沖縄出土の弥生土器瞥見〔Ⅰ〕」『南島考古』第8号　1983年
上原静「奄美・喜界島荒木農道遺跡出土のイトマキボラ製利器，弥生式土器他」『南島考古』第8号　1983年
中山清美「奄美における弥生時代相当期の資料紹介〔Ⅰ〕」『赤れんが』創刊号　1981年



第53図　弥生時代以降の遺物編年表（試案）

第9章　液体シンチレーション法による あやまる第2貝塚の^{14}C年代測定

京都産業大学理学部
山田　治　小橋川　明

1．^{14}C年代測定の原理について

科学は万人に共通の原理に基き，その結論は事実による証明の裏付けを必要とする。

^{14}C年代決定法も真の科学であるならば，明確な原理の上に立ち，疑いの余地のない手法に基いて実行され，得られた結果と事実とが一致するはずである。

^{14}C年代決定法では古代遺物の経過年数 t を次式に基いて計算する。

$$t=8033\ (\text{年})\times\log_e\frac{N_0}{N}$$

e は自然対数の底で，2.718282……という数である。N_0は現代標準炭素1グラムに含まれる^{14}C原子の数，Nは古代遺物中の炭素1グラムに含まれる^{14}C原子の数である。8033年は^{14}Cの半減期を5568年としたときの平均寿命である。近年では^{14}Cの半減期は5730±30年が最も真の値に近いとされているが，国際的には混乱が生じないようずっと5568年が用いられる約束になっている。

この式で求めた結果が事実と一致するかどうかは，年代の判っている過去の炭素試料の^{14}C測定をしてみれば直ちに判明することである。最も有用な結果は，E. K. Ralph らによって調べられた古い大木の年輪の^{14}C測定値である。これによれば^{14}C年代と年輪年代はほぼ一致し，最近2000年間では最大200年までのずれがあり，7000年前までの間には最大700年のずれがあることが判った。しかし^{14}C年代と年輪年代との関係が10年きざみで図表に表わされ，^{14}C年代が判れば年輪年代すなわち絶対年代への読み換えができることになっている。

つまり上記の式は本質的には正しい式であって，更に細かい補正式をつける代りに^{14}C年代と年輪年代の比較対照表をつけることで今から7000年前までの絶対年代が得られることが確実なのである。7000年より以前の年代試料については絶対年代は今のところ得られず^{14}C年代として扱うよりほかはない。それでも^{14}C年代と絶対年代との間にはあまり大きなずれがあるとは考えられない。

2．^{14}C測定の方法について

放射性同位元素の量を測るときに最も多く用いられるのは放射線の数を数える方法である。^{14}C原子の数もふつうそれが出すベータ線の数を知ることで求められる。この関係は

（^{14}C原子の数）＝（ベータ線の数）×（平均寿命）

という簡単な式で与えられる。この式も多数の事実から確実であることが証明されている。ここで^{14}C原子の数が炭素1グラム当りとするならば，ベータ線の数も炭素1グラム当りの数であり，ベータ線の数を1分間当りの個数で測るときは平均寿命も8033年を

8033(年)×365(日)×24(時間)×60(分)＝42億2200万(分)

としなければならない。

ベータ線の数は100％完全に（ただし必ず誤差は存在する）測定されねばならない。ふつうの測定器は必ず数え落しや数えすぎがあって100％完全に測ることができない。測定器の数える割合を計数効率という。

（ベータ線の数）＝（測定器の計数値）÷（計数効率）

という式で，計数効率が正確に求められれば正確なベータ線の数も求められる。液体シンチレーション測定装置では，測定器による計数だけでなく，計算効率も0.05％以下の精度で求められるので，完全なベータ線数が得られ，確実な^{14}C年代が得られる。これがかって鹿児島県教育委員会から質問されたことに対し，液体シンチレーション法が正確な年代を与える理由の解答である。

従来の気体試料計数管法ではどんなにしても計数効率は求められない。従って，計数効率は常に一定と仮定して^{14}C年代を計算して来たが確実な保証を与えることは困難である。計数効率に最大の影響を与えるのは不純物ガスの存在であるが，その量も影響の程度も全く確認できない。ガスの純度が高ければ測定結果の信頼度は高いと考えられ，相対的には炭酸ガスの方が精製しやすく，アセチレンガスのような有機ガスは化学構造式の似た不純物を含みやすいのでその分だけ信頼性に乏しいと考えられる。

３．あやまる第２貝塚の測定結果

KSU－757　あやまる第２，No．１　1100±130 B.P.

貝，第２トレンチ６層，兼久式

炭素使用量1.26ｇ，1000分間測定

KSU－758　あやまる第２，No．２　940±150 B.P.

貝，第２トレンチ４層，兼久式

炭素1.03ｇ，1000分間測定

４．測定結果の考察

Ｃ年代測定値は炭素量が多いほど，また測定時間が長いほど誤差が小さくなる。今回のあやまる貝塚の貝量はごく小量であったのと，また結果を急いだので測定時間も短かく誤差が大きい。

液体シンチレーション法では極めて小量の炭素しか得られなかった場合以外には，すべての誤差は統計誤差の範囲を越えることは稀である。即ち，誤差は１標準偏差（１シグマ）で表わすという国際的規約に従って表現されているが，この１シグマの中に68％，２シグマ内に95％，３シグマ内に99.7％の確率で真の値は存在するはずである。

ただし^{14}C年代はあくまでも試料炭素遺物の年代であって，その遺物が遺跡の年代と一致するか，或いは土器の年代と一致するかについては十分注意深い発掘調査によって判断されねばならない。

もし兼久式土器がこの^{14}C年代と一致するものであれば，その時代は平安時代の前後ということになり，３シグマを考えても1500B.P.ないし500B.P.の中になければならない。

あ　と　が　き

奄美八景のひとつ「あやまる岬」の名は錦に織られたまりに由来するという。岬の上からながめるサンゴの海は深いみどり色と澄んだ青が色々の明るさで織りなされ，絵にもかけない美しさである。

この美しさは数千年前，先人達がここに住み始めた時も同じであっただろう。この美しい海で，貝を拾い，魚をすくい，のどかな生活を送っていたものと思う。時には迷い込んできたジュゴンのごちそうがあり，山に行ってイノシシをとったこともあったようだ。

ソテツジャングルは観光コースのひとつになっており，連日観光客が訪ずれる。どやどやと押し寄せる団体客よりも，仲良く語り合う新婚客がよく似合う。ここには二千数百年前にも九州本島から人々が来たようだ。この美しい海に魅せられここに住みついた人もいたらしい。繰り返し繰り返し訪ずれたようだ。

あやまる岬のすばらしさはなんといってもその自然美にある。奄美の砂浜も土取りによってしだいに少なくなっている。サンゴ礁のある海も埋められる時代である。できることなら，この遺跡一帯は環境とともに永遠に自然美がこわされないよう願いたい。

本調査は笠利町教育委員会の努力で多くの成果を収めたが，この調査のために連日遠路はるばる名瀬市から参加され，作業員の人々への細かい指導をされた奄美考古学会員里山勇廣氏の協力は，図面作成等で忙しい我々にとっては，有難いことであった。途中見学に来られた徳之島高校教諭成尾英仁氏には地質学的見地から有難い指導・助言をいただいた。あわせて謝意を表したい。

（池畑・牛ノ浜）

図　　版

西より

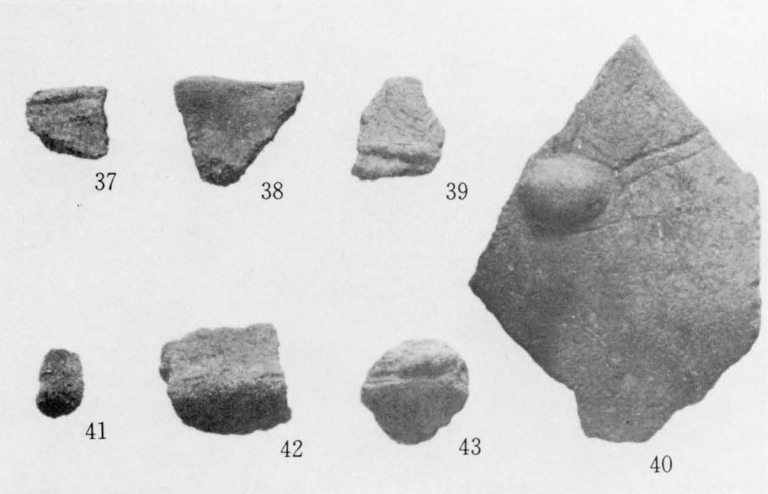
南より

南より

図版３　第１・２トレンチの近景と出土遺物

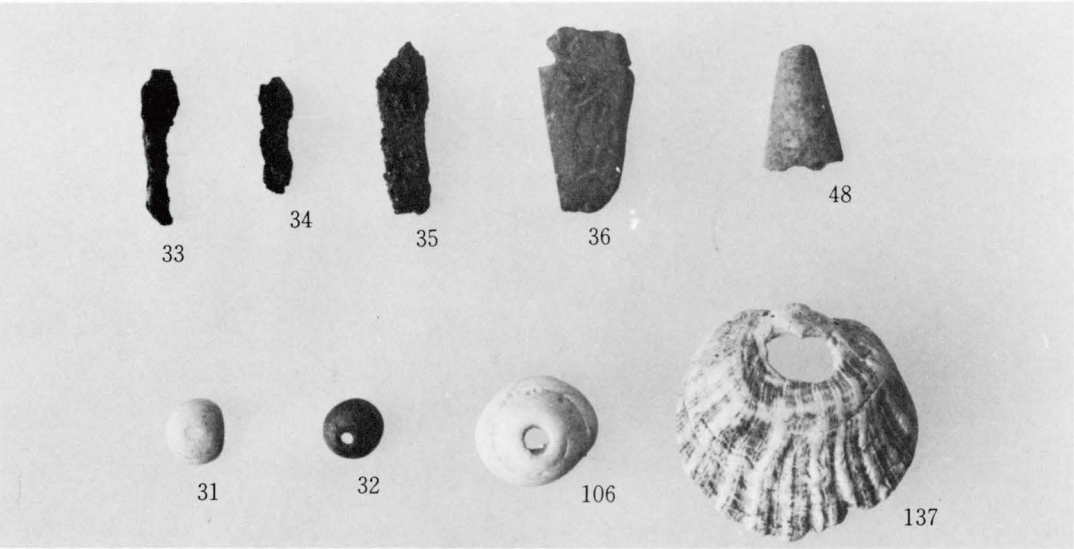
第１トレンチ発掘風景

土器の出土状況

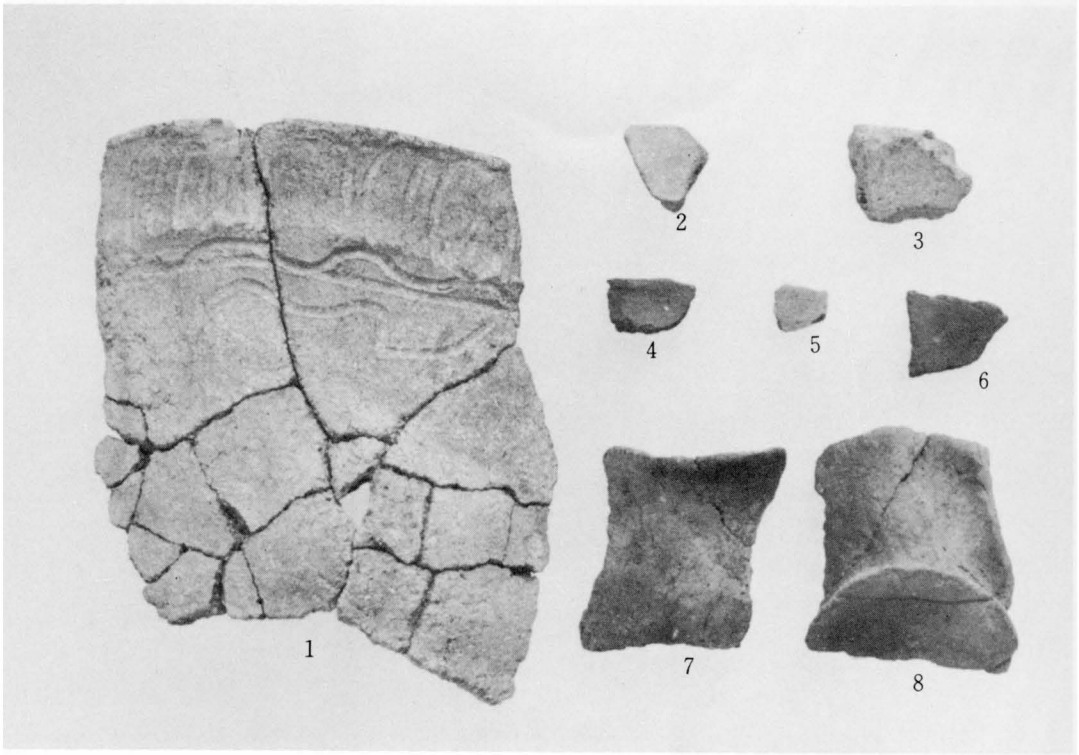


第２トレンチ３層の土器

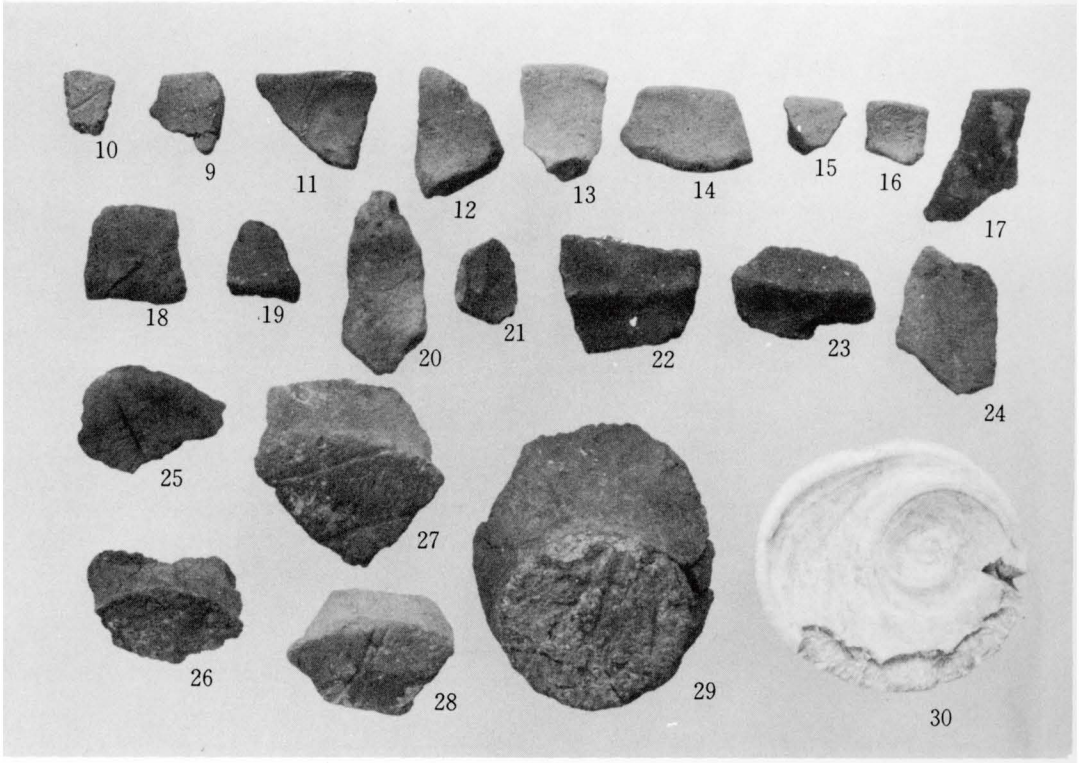
鉄器出土状況



第２トレンチ，第１・第２グリッドの遺物



５層・６層の土器



４層の遺物

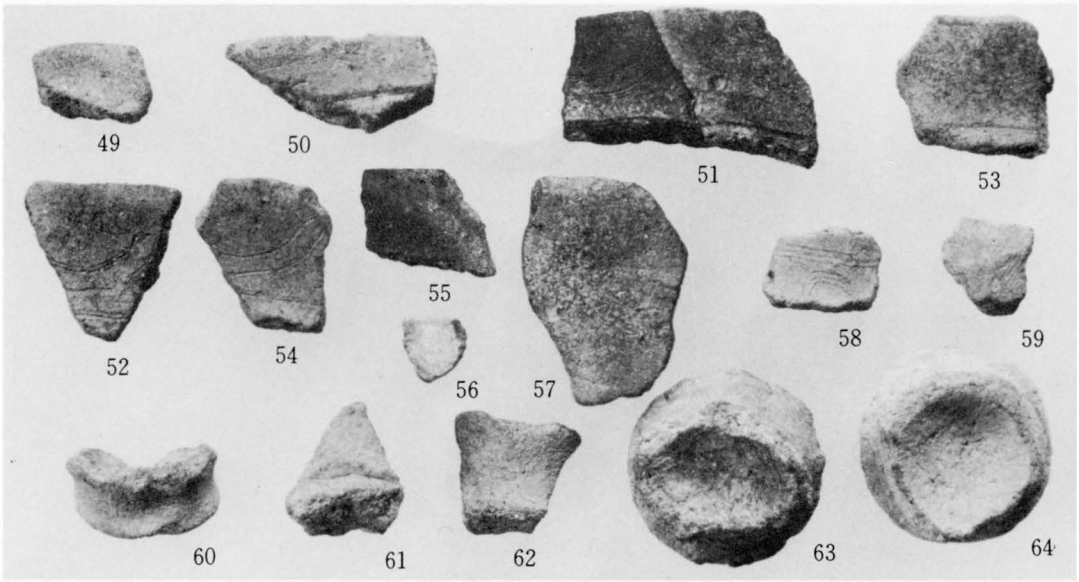
図版5　第1グリッドの近景

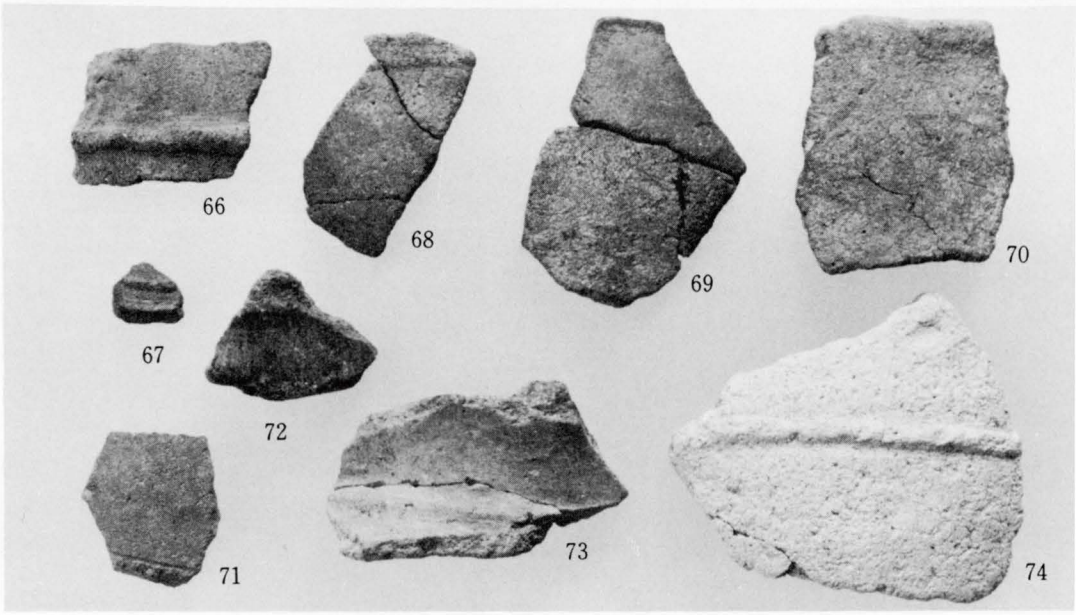
近景（東より）

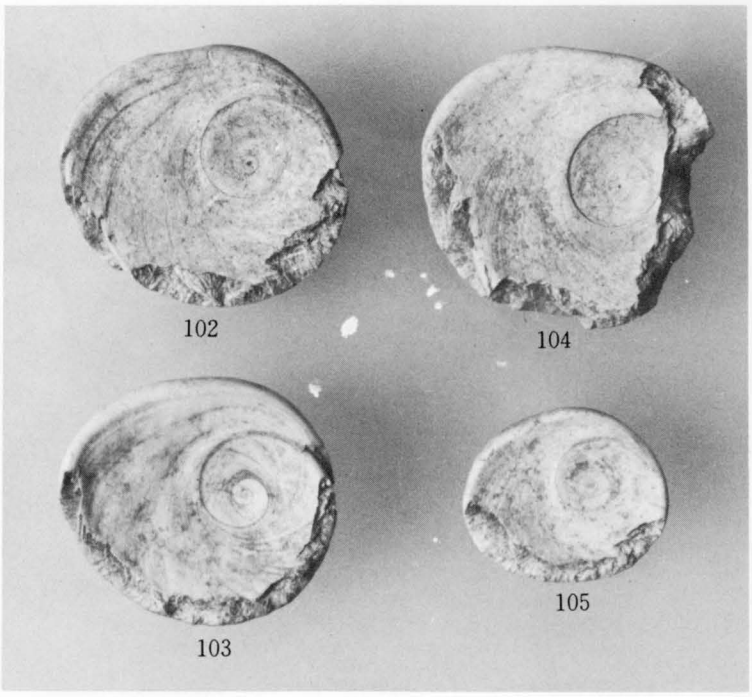
近景（西より）

図版6　第1グリッドの遺物出土状況

図版７　第１グリッドの出土土器



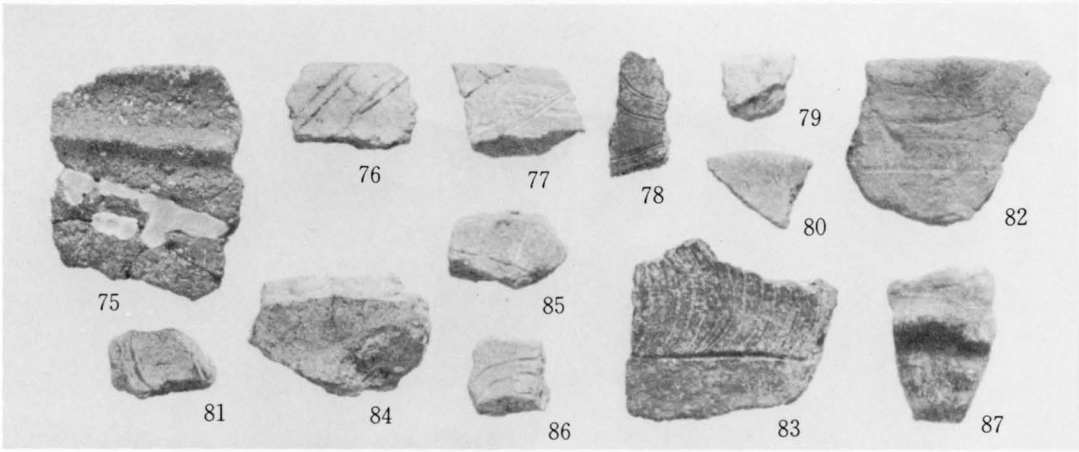


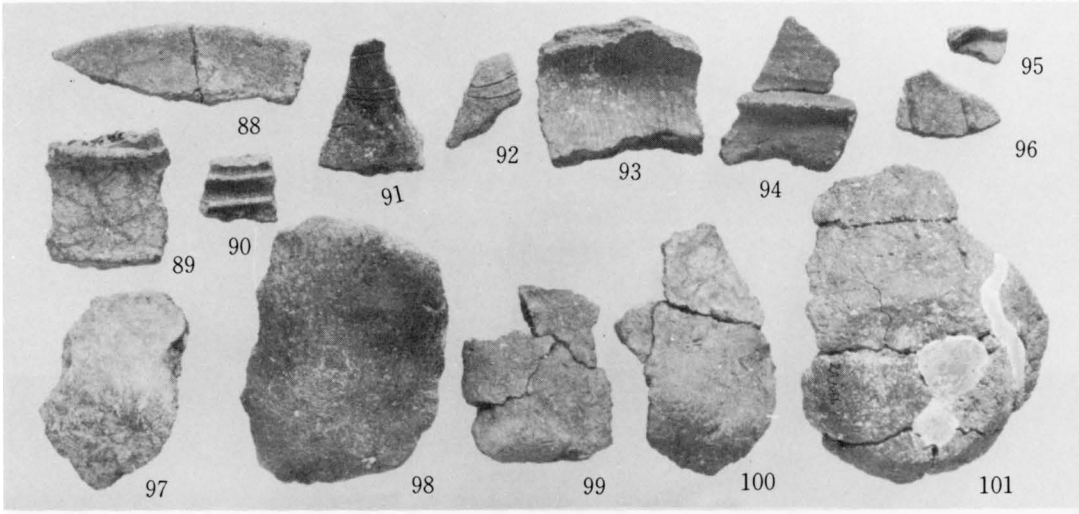


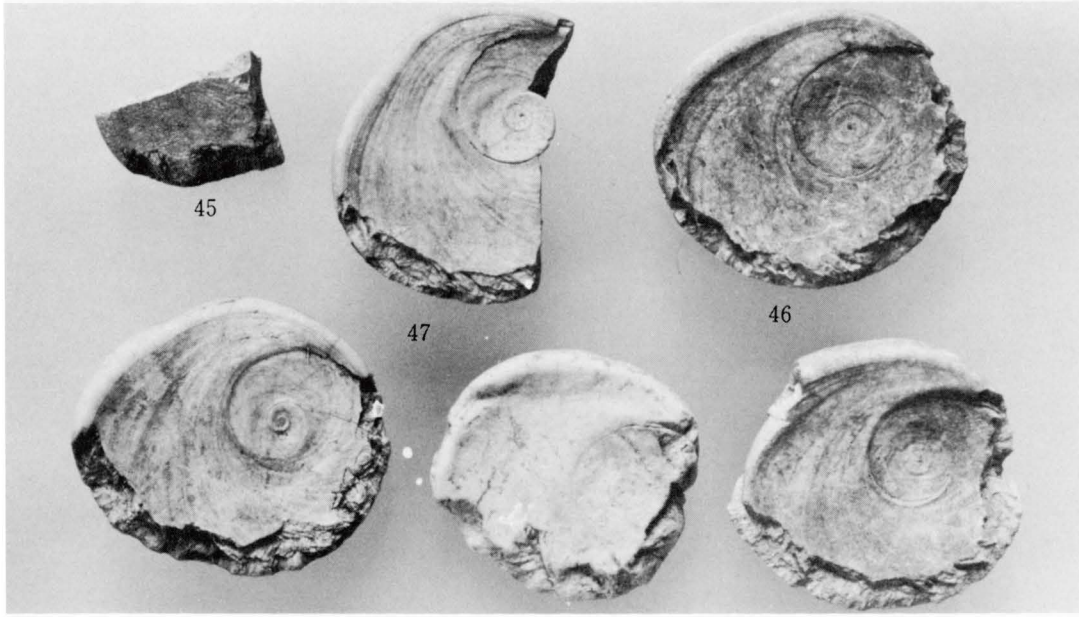
螺蓋製貝斧

近景（西より）

図版 9　第 2 グリッドの出土土器と第 4 トレンチの螺蓋製貝斧







図版10　第５トレンチの遺物出土状況(1)

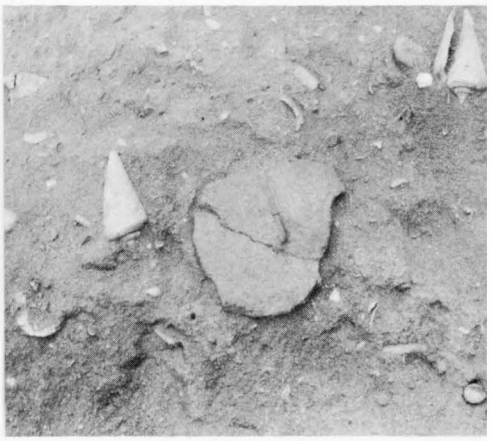
５区～８区（東より）

５区・６区（東より）

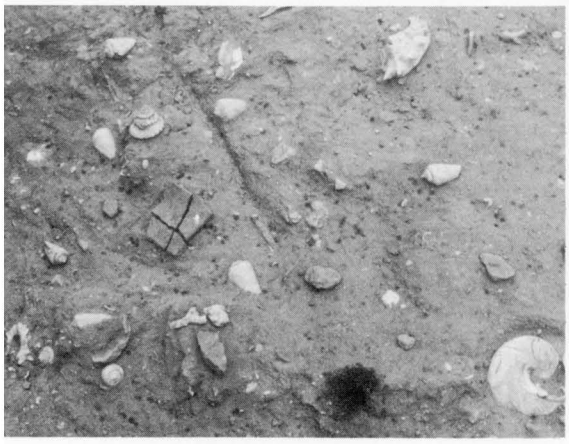
図版11　第５トレンチの遺物出土状況(2)

８区（西より）

６区付近



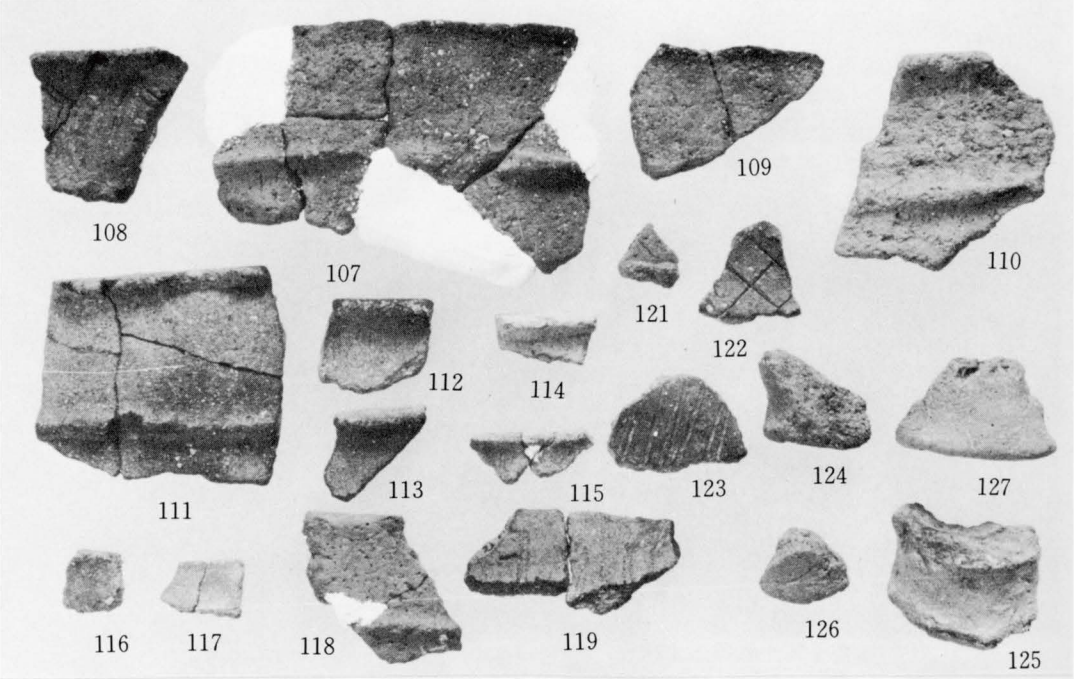
６区付近

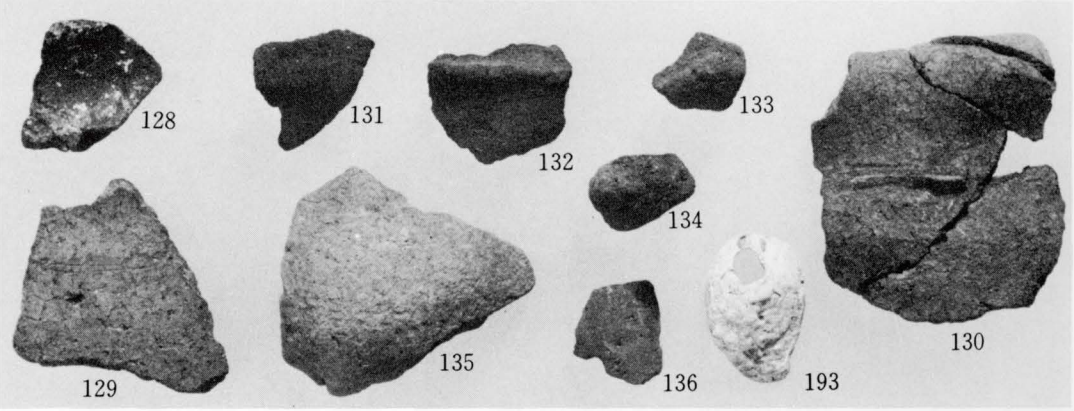


高橋Ⅱ式出土状況

13・14区の溝状遺構

ソテツジャングルの下刈り





図版13　第６トレンチの遺物出土状況

１区の出土状況

４類土器の出土状況（１区）

磨製石器

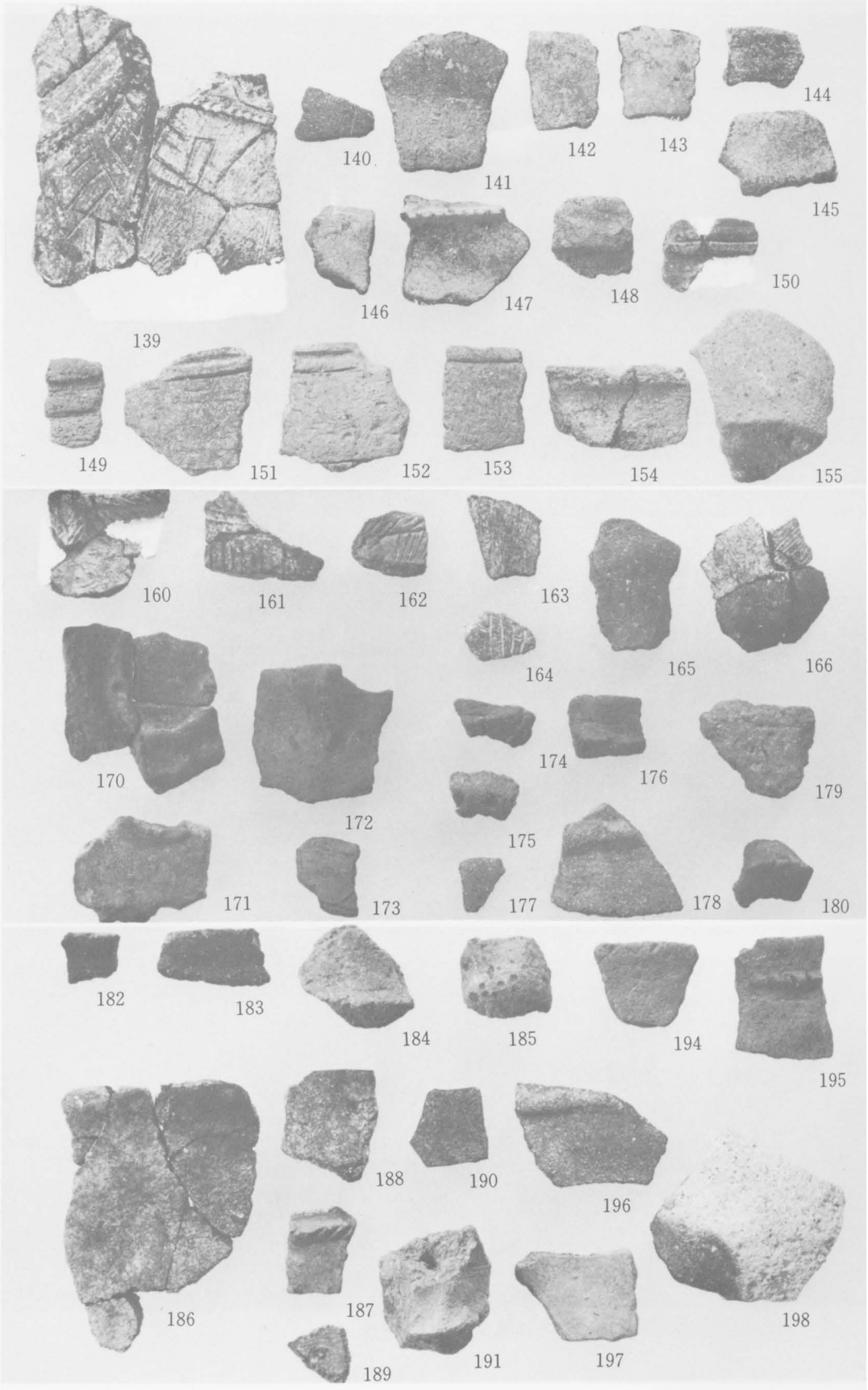
嘉徳１式土器の出土状況

２区の出土状況

２区の出土状況

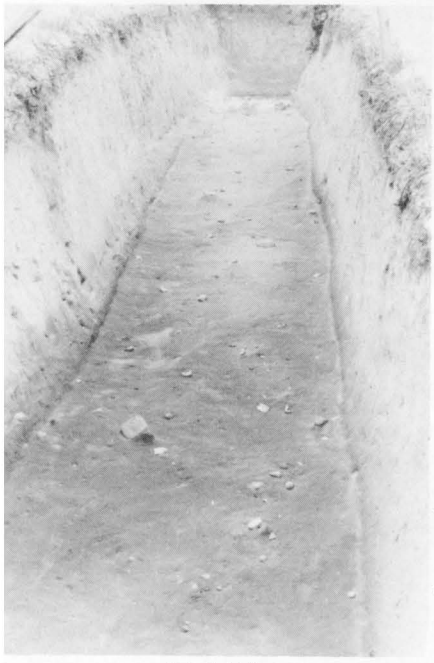
貝製品の出土状況

図版14　第６トレンチ～第13トレンチの出土土器



図版15　第７トレンチ・第９トレンチの近景

第７トレンチ近景（西より）



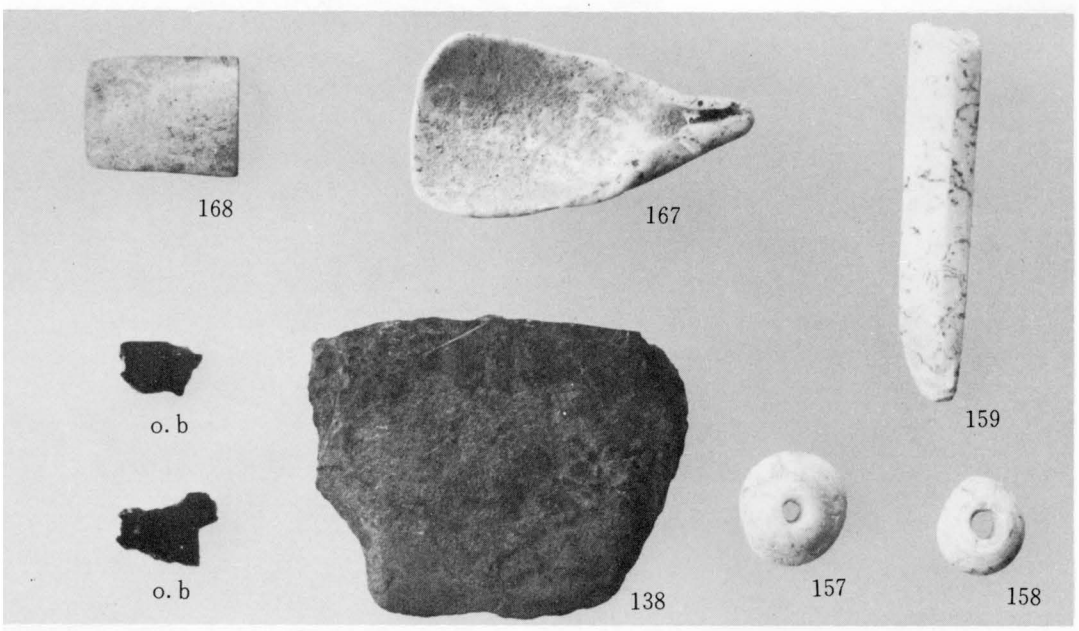
（西より）

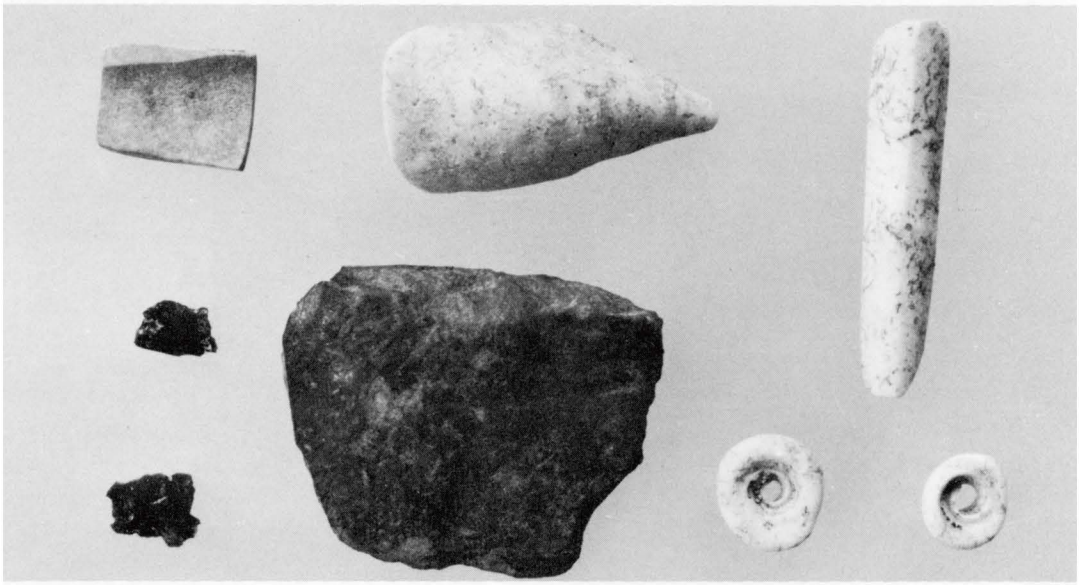
（東より）

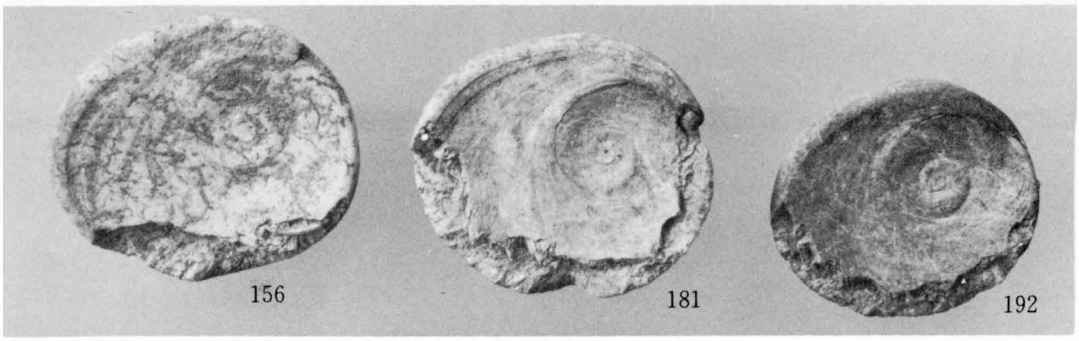
（東より）

第９トレンチ近景

図版16　第6トレンチ～第9トレンチの貝・石製品







図版17　サタヤドリ

近景（北より）

（南より）

炉跡

かきまぜ台跡

図版18　発掘風景

第12トレンチ

第12トレンチ

第２グリッド付近での説明会

調査参加者

笠利町文化財報告（既刊分）

1　サウチ遺跡（1978年）

2　高又遺跡（1978年）

3　宇宿貝塚（1979年）

4　宇宿港遺跡（1981年）

5　ケジ・コビロ・辺留窪遺跡（1983年）

6　用の民俗（1983年）

あやまる第２貝塚

笠利町文化財報告　7

発　行　　笠利町教育委員会
　　鹿児島県大島郡笠利町赤木名字中金久

発行日　　昭和59年３月20日

印　刷　　有限会社 朝日印刷
　　鹿児島市上荒田町854－１